【著者】

赤松中学

あかまつ・ちゅうがく

生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。「アストロノト！」で第3回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。本作・武装学園小説「緋弾のアリア」は、同作家の2シリーズ目となる。

【イラストレーター】

こぶいち

ゆずソフト所属の原画担当。
代表作は「ぶらばん！」「E×E」「夏空カナタ」「天神乱漫」「のーぶる☆わーくす」。
小説では「これはゾンビですか？」（富士見書房）の挿絵を担当。
趣味はゲーム、読書。
ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。
http://tyatsune.blog87.fc2.com/

カバーイラスト／こぶいち　装丁／百足屋ユウコ（ムシカゴグラフィクス）

緋弾のアリアXI

Aria the Scarlet Ammo

Gの血族

赤松中学

MF文庫J

緋弾のアリアXI

赤松中学

ISBN978-4-8401-4331-8
C0193 ¥580E

定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー

緋弾のアリアXI　Gの血族

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称「武偵」を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジ。「師団」と「眷属」の争いに身を投じたアリアとキンジ。その最中、キンジは自称「妹」のかなめと同居生活中だ。この事態に黙ってはいられないバスカービル女子の面々が、かなめに「決闘」を申し込む。キンジはその決闘でかなめ側に付くことになり……？　バスカービルがキンジの敵に!?　TVアニメ化もされた、大スケールアクション＆ラブコメディー第11弾!!

赤松中学の本

- **アストロノト！ 1〜3**［イラスト：bomi］
- **緋弾のアリア**［イラスト：こぶいち］
- **緋弾のアリアII** 燃える銀氷［イラスト：こぶいち］
- **緋弾のアリアIII** 蜂蜜色の罠［イラスト：こぶいち］
- **緋弾のアリアIV** 堕ちた緋弾［イラスト：こぶいち］
- **緋弾のアリアV** 序曲の終止線［イラスト：こぶいち］
- **緋弾のアリアVI** 絶対半径2051［イラスト：こぶいち］
- **緋弾のアリアVII** 火と風の円舞［イラスト：こぶいち］
- **緋弾のアリアVIII** 螺旋の天空樹［イラスト：こぶいち］
- **緋弾のアリアIX** 蒼き閃光［イラスト：こぶいち］
- **緋弾のアリアX** 緋想の双極［イラスト：こぶいち］
- **緋弾のアリアXI** Gの血族［イラスト：こぶいち］

緋弾のアリアXI

Gの血族

赤松中学

緋弾のアリアXI

赤松中学

XI

緋弾のアリア XI

Aria the Scarlet Ammo

Gの血族

赤松中学

P11 1弾 ランバージャック

P59 2弾 体育祭

P139 3弾 さらばジーフォース

P184 4弾 Gの血族

P245 Go For The NEXT!!!

Contents

Jeanne
Shirayuki
Kaname
Kinji

緋弾のアリアXI

Gの血族（コラテラル・ブロス）

赤松中学

MF文庫J

口絵・本文イラスト●こぶいち

1弾　ランバージャック

ある秋の昼下がり――

「テキサスバーガーって美味（おい）しいねえ、お兄ちゃん！」

「まあな……」

「好きな人と一緒に食べると美味しさ10倍だね！」

「……」

青空の下、俺（おれ）とかなめはハンバーガーを食べている。

……台場（だいば）のマックの、お洒落（しゃれ）なオープンテラスで、な。

新しくて綺麗（きれい）なこのテラスには、カップルも多い。

背筋の凍るような裏事情を知らなければ単なる女子中学生にしか見えないかなめが俺に美少女スマイルを振る舞っている光景も、パッと見、制服デートに見えてるんだろうな。世間の人には。

「んーいい天気！　絶好の兄妹（きょうだい）デート日和（びより）だね、お兄ちゃん！」

この自称・俺の妹こと遠山（とおやま）かなめさんは、人格のチャンネルが切り替わると――歩道橋をブッ壊すわ、手榴弾（しゅりゅうだん）は投げるわ、包丁を振り回すわで、手が付けられん状態に

なる。台場（だいば）ぐらい30分もあれば壊滅させられそうな、アブない少女なのだ。

（ていうか何だよ、『兄妹（きょうだい）デート』って……）

そんな非倫理的な造語を声高らかに喧伝（けんでん）してんじゃねーよ、かなめ。

あとその、キャラメルラテでハンバーガーを食える神経が分からん。

マックにはコーラ。ジャンヌ風に言えば、これが世界の法則だろう。

などと俺様（おれさま）ルールを心の中でボヤきつつ……

（天高く馬肥（こ）ゆる秋、とは言うけどな）

そのコーラを啜（すす）る俺には、食欲が無い。

ハンバーガーも一齧（ひとかじ）りしたぐらいで、鬱（うつ）モードに絶賛（ぜっさん）突入中である。

というのも、先日の事……

このかなめと白雪（しらゆき）が俺の部屋で対峙（たいじ）した時のトラウマに苛（さいな）まれているからだ。

『けッ――決闘ですッ！　決闘なら事故死も有り得るッ！　抑々遠山家（そもそもとおやまけ）の安定を確保し、以（もっ）て日の本の平和に寄与する為（ため）、此（こ）の決闘、洵（まこと）に已（や）むを得ざるものありッ！』

俺の部屋に押しかけてきて、かなめを発見し、開戦の詔（みことのり）を叫んだ白雪はその後――

笑いながら室内を逃げ回るかなめに、鬼の形相（ぎょうそう）で機銃掃射（きじゅうそうしゃ）をしまくった。

白雪の持ち銃・M60は、基本、フルオート射撃専用。

まあ弾（たま）が出るわ出るわ。

挙げ句、銃身が加熱しすぎて射撃が止まらなくなるコックオフ現象まで起きた。銃には放熱フィンが付いてたが、そんなもの白雪の怒りの銃撃の前では意味ナシ。弾切れまで撃ったＵＺＩは、熱で膨張・変形してしまった銃身をがっちょんと捨てて、

「これは挨拶。後で正式な決闘を申し込むから事前には突っかけない。しばらく、残りの人生をエンジョイすればいいさ」的な捨て台詞を吐いて、帰っている。

で。

挨拶で機関銃を撃ちまくるとっても武偵高の生徒会長らしい白雪さんは、翌日以降怯えきってしまった俺に――いつも通り清楚・従順・優しさいっぱいで接してくれている。

かなめの不在中にやってきて、

「わぁー大変」

などと言いながら、崩壊した俺の部屋を見事に修復していったが……

やったのは白雪、お前だからな？

ほんと、二重人格者みたいなヤツだよ。

しかもその後、家事をやってる時はニコニコ顔なのに――かなめの歯ブラシや洗濯物を見つけると般若のような激昂顔になるのを何度か目撃してしまった。

なお、白雪は自らが家事をやった痕跡を露骨に残していき……元気な笑顔で帰ってきたかなめにも、その痕跡を見つけた際に白雪同様の般若現象が見られた。

この方々に対する俺の感想は、一言に尽きる

「怖すぎる……」

2人とも普段は俺にやたら好意的な分、あの急激な変化はビックリ箱的で心臓に悪い

まるで往年の邦画・「大魔神」みたいな顔変化　しかも2体いますよ魔神様

これならアリアの暴力の方がまだマシだぜ　アイツはすぐ手が出る分、恐怖させられる時間は短いからな

と、俺が救心カプセルをコーラで飲んでいると……

チュンチュン！　と、テラスの隅っこにいたスズメたちが慌てて逃げ出した

「うッ」

き、来た……！　つい声が出ちまった

テラスに上がってくるエスカレーターに乗って　ゴンゴンゴンゴン　と

「……」

白いリボンをかけた頭から見えてきたのは、防弾セーラー服姿の白雪さんだ

俺にはニコッと可憐な会釈をしたが、かなめに向けてはスズメが逃げるレベルの殺気を放っている　笑顔のまま

かなめも「ハーイ」って感じのスマイルで白雪に手を振っているが——

表情とは裏腹に、ピリピリするような怒気を感じるぞ

2人から揮発するドス黒いオーラのせいで、秋の青空はもう台無し

そしてその2人を呼び出した俺は、双方をプロレスのレフェリーみたいに見回している

「キンちゃんこんにちは、あっ」

こけっ、こけけ

白雪はエスカレーターから下りる際、たとたどしく足踏みした

なんとか転ばずに済んだようだが、相変わらず運動神経の悪いヤツだ

「そ、揃ったみたいだな、白雪。お前もハンバーガーか何か注文しろ」

改めてこっちにやってきた白雪にそう言うと——

「うん」

白雪は、ぱんぱん、手を叩いて

しばらく3人揃って沈黙してから、俺は今のが料亭で仲居さんを呼ぶ仕草だったのだと気づく

「そういや、白雪は神社と学校の外に出る事が希なんだったな」

「マックなんか、来たことも無かったんだろう」

しょうがない。一緒に買いに行ってやるか

ていうか、マックで仲居さんって。ズレてるにも程があるな。どんだけ箱入りなんだよ

箱入り娘オリンピックでメダル狙えるぞ、今のは

なぜ俺が、この２人をここで引き合わせたのかというと——

白雪はかなめとの決闘を宣言し、先日かなめに奇襲を受けた報復を企むアリア・理子・レキがそれを応援していたからだ。

白雪を先陣として、バスカービル女子軍と遠山かなめは、現在まさに一触即発の状態。放っておいたら大戦争になるだろう。そしたら武偵高が沈みかねん。

なので、俺が国連のように間に入り……。

この対立を平和的に解決するため、交渉のテーブルを用意したのだ。

それがマックのテーブルなのは、一般人が大勢いる場所ならさすがの白雪&かなめでも機関銃やら包丁やらを振り回したりはせんだろうという目算による。

てりやきマックをお盆に載せ、ウットリ顔で俺についてきた白雪に、

「よし、そこに座れ。いいか、ここは武偵高の外。私情による発砲・斬撃・格闘戦は一切禁止だぞ。かなめもいいな」

我ながら言ってて悲しくなる注意をしつつ、かなめと対面するような形で座らせる。

俺の手前、能面の女面・小面みたいな笑顔で見つめ合う白雪とかなめに——

う、うう。もう胃がキリキリしてきた。

「死刑だね」

い、いきなりかなめが最悪の切り出し方をしちゃったぞ。

「いまお兄ちゃんとハンバーガー買って帰ってきた時、カマトトの頭上にハートマークがいっぱい飛んでるのが見えた——」

かじがじ、とストローを噛んでいるかなめの、口から上がる煙は、もしや摩擦熱でストローが溶けて気化してんのか。なんちゅう咬合力だ、ワニとかサメのレベルだぞ。

一方、白雪は、ぱく、もぐもぐ、ごっくん。

何やら余裕たっぷりの笑みで、てりやきマックを一口食べ

「やっぱり正妻じゃない女は余裕がないね——」

こっちも、挑発するような目、ってるし。

ていうか正妻って何だ。お前、何かにつけそれ言うけど。

だが今はそこにツッコむ空気じゃない。なんとか、穏便に交渉させないと。

「いきなりケンカ腰で話すな、2人とも。そもそも今日は和解のためにだな」

「かなめ、正妻こそ最強。これはこの世の定め。私は一歩も譲らないよ——」

「なに非合理的なこと言ってんの！？　妹こそ最強でしょ。あたしも譲れないな」

うん。ダメだなこれは。

初っぱなから俺の話に聞く耳を持たない2人からの逃走経路を考え始めた俺の、左右の

腕を——

「妻(つま)ですッ」

「妹に決まってんじゃんッ」

がッ、がッ

白雪(しらゆき)とかなめが、1本ずつ掴んだ

こ、これはッ……昔、アリアと理子(りこ)にやられた事がある

放(ほう)っておくと俺(おれ)が真っ二つにされるパターンだぞッ……

頭のてっぺんから股(また)までキレイに2枚に下ろされた俺の図が脳裏をよぎる中、

「かなめ。あなたを調べたけど——アメリカの武偵として登録だけはあったね」

「ふーん。まだ抹消されてなかったかぁ。で？　それが何？」

2人が、睨み合う。

「あなたは武偵。私も武偵。武偵同士が依頼(いらい)者なしで戦うのは良い事ではないの。だからバスカービルでは——あなたに対する報復戦を、代表者を中心に、武偵高の決闘ルールに則(のっと)って行う事で話がまとまりました」

「こ、こらッ！　リーダーの俺抜きで話をまとめんなよ！」

「——その代表者は私だよ。これもみんなで話し合って決めました」

その「みんな」に、一切入れてもらえてない俺の横で、かなめは「へぇ」と、好戦的な笑

みを返してる

武偵高では　生徒同士の決闘は、何れかの公式ルールに基づき、あまりしない事

という非公式な通達か、1年の時点で教務科からなされる

つまり、してもいい。決闘を

そもそも決闘などという血なまぐさい行為は我が国では違法なのだが、血なまぐささに

慣れておかねばならない我が校では黙認されているのだ

決闘で何があろうと、もちろん警察沙汰にはならない　決闘でケガさせられました

などと警察に泣きついたら、みんなの笑いものになるからな

「お姉ちゃん、ほんっと不合理的い　またどっちが強いかも分かってないの？」

「これは決闘の申し込みです　受けるね？」

バチッ・　バチバチ！・！

と、火花が散るような視殺戦の中——

ふっ、と、かなめが俺の腕から手を放した

あったりまえじゃん　受けるよ　じゃあお姉ちゃん、あれ返してあげるね　もう解放も

終わったし」

その言葉に続いて、丸から　　ぽとり。

周囲の人々が気づかない絶妙なタイミングで、何かが落ちてきた

それを、ぱし　俺の腕から放した手で、白雪がキャッチする。

それは、朱色の鞘に収められた　日本刀

「イロカネアヤメ……！」

空を見上げると、30mほどの上空に、くる、くるる、と

X字形をした布——かつてアリアの弾を防ぎ、さらに歩道橋を紙細工のように切断した兵器が竹トンボのように浮遊してるのが見えた

どうやらかなめは、戦闘になった場合に備えてあれを空に待機させていたらしい。

「お姉ちゃんはその刀が主武器なんでしょ？　それを取り上げたまま戦うのは、『卑怯』だからね」

「卑怯？　かなめの口からそんな言葉が出るなんてね」

あは、と口に手をあてて笑う白雪の方を見たまま、かなめは——

「この間お兄ちゃんに『卑怯な事はするな』って言われて、学習したの。だから、お前らみたいに　こういう、卑怯なマネはしないんだよ／」

と　近くを歩いていたマックの女性店員さんのオシリを掴んだ

はっ、と銀髪を振って振り返った、バイザーで顔を隠し気味だった店員さんは——

「ジャ、ジャンヌ……!?　何やってんだよ」

ルイ・ウーのメンバー、今じゃすっかり情報科2年のジャンヌ・ダルクさんじゃねえか。

見つかった、と碧眼を見開いて驚くジャンヌに、

「うわ、美っ人んんんー　お兄ちゃんって美人に弱いんだよねぇ」

かなめは思いっきりガンを垂れてるぞ。

「小賢しい——お兄ちゃんを誑かす『火焔の魔女』それに力を貸す、ジャンヌ・ダルク——銀氷の魔女。お前らまとめて、魔女狩りしてやる　2対1ぐらいハンデにもなんないよ」

ふんぞり返って嘯くかなめの前で……

白雪は俯いて、ぱっつん前髪の陰からギラーッと目を光らせ……、「2対1で済むかな？」——とかボソッと呟いてる

「な、何が起きてるんだ　この平和的な、仕上がりのマックに——！」

俺が周辺を見回すと——

い、いる　いやがる　みんな　アルバイト店員のカッコで

厨房ではスカートの下から拳銃の形がよぉーく見えるアリアが、ポテトを揚げてる

さっきは居なかったのに、レジ係をウキウキ顔でやってるのは理子

テラスの端ではレキがモップで床掃除　さらに観葉植物の陰にはハイマキが見切れてる

——囲まれてるぞ、完全に

「うえーん、お兄ちゃん、こわいよー。みんながイジメるよー」

棒読みゼリフで言いつつ、かなめが俺に抱きついてくる

ていうか、抱きつく両手をさりげなくクラッチしている所を見るに　・

俺、人質にされてるぞ　かなめに

「も、元はと言えばお前が悪いんだろ　みんなに恨まれるような事をするからだッ」

人質として自分にさほど価値がない事が分かっている、かわいそうな俺は

一緒に四方八方からやられてはたまらないので、かなめを引きはがしにかかる

「なーんちゃって」

ぱ、と俺から手を放したかなめは、

「お前ら、ホントに『今用自』　まだ怒ってないんだな　ハンバーガーにしちゃうぞ！」

大きな声で、バスカービルの女子たちやジャンヌを威嚇してる

一方、凶々しい笑みを浮かべた白雪は——

「——大丈夫だよキンちゃん　取り囲んでやっつけたりしないから　それは後　かなめは非常識だから、ここで暴れた場合に備えてみんなを呼んでおいたの　うふ、うふふふ」

「そ、そーですか　」

あまりの恐怖になぜか敬語になっちまったよ　俺

かなめ同様、白雪も一応の戦闘配備はしてたってわけか

「そしてこれは戦闘方法の手本だよ、かなめ　今のこの状況から——どんな方法で自分が

可愛（かわい）がられるか、分かるかなぁ」

クイズ形式で問いた白雪（しらゆき）に、かなめは「ぅ」と眉（まゆ）を寄せる

「……！」

その横で俺も、眉（まゆ）を寄せた

かなめとは逆に　答えが分かったからである

「ラ、ランバ　ジャック、か……!?」

「さすがはキンちゃん、当たりです　アメリカ出身のかなめに配慮して、ご当地ゆかりの方法を採用したんだよ」

にこ

白雪は黒雪（くろゆき）から白雪に切り替えた可憐（かれん）な顔を俺に向ける

「ランバージャック……！」

俺も入学したての頃、ある男子と余興でやった経験があるから知っているが　それは武偵高名物の、最もハードな決闘方法の一つ

白雪が言う通り、元はアメリカの木こり（きこり）たちがやっていた決闘方式をアレンジしたものである

そのシステムは、単純といえば単純

まず防弾装備の武偵たちが点々と、円を描くように立つ　これをリングと呼ぶ

このリングで決闘者たちを取り囲み、逃げ場を与えずに戦わせる

そうして片方が敗北を認めるか、動けなくなったら終了――基本は、これだけだ。

だが、このルールには附則があり……

決闘者がリングの外側に出ようとした場合、リングはそいつを攻撃してもいい

リングに攻撃されて中央に押し戻されれば、また敵に攻撃される　そうやって行く往

している間にどんどんダメージを受け、瀕死の重傷を負うまで戦わされるのだ

つまり逃亡はおろか、後退も許されない地獄のシステム

しかも――

ランバージャックのリングは、中立でなくていい

リングにも、敵味方がいるのだ。

つまり自分に人望が無いと、このリングが敵だらけになる

（……これは、かなめには危険なルールだぞ――

敵はもちろん敵を攻撃しないので、自分が敵を押し出しても――リングは、敵をそっと

こっちへ押し戻す程度。逆に自分が押し出されると、容赦なく銃弾を浴びせられる。

このルールにより、ランバージャックは嘲りや制裁の性質を帯びる事が多いのだ

そして、かなめには味方がいない

これはかなめ側が仕掛けた事とはいえ、多対一になる事は目に見えてるぞ

「――お前ら。ランバージャックなんて今日日もう流行らないぞ。武侠片でも斧の専利はよくやられてたが、事故も多いし、殺伐としすぎなんだよ。少なくとも女がやるような事じゃない。やめろって」

俺が口をへの字にして言うと、白苺は――

「止めないでキンちゃん、女には戦わねばならない時があるんです！」

ふるふるふるっ、と黒髪を揺らしていやいやの仕草をし、

「これはキンちゃんへの愛ゆえの、聖戦なんです！　キンちゃんという国の安寧のため、私という国はかなめという国との開戦のやむなきに至ったのです！」

なんだか分からない白苺国家戦略論をぶちあげてる。

「あのなぁ」

普段はお淑やかなのに、時によりアリア以上に好戦的なんだよなぁ、白苺は。

「――別にいいよ。やるよ。『幇助者』はどうすんの？」

方のかなめは、ハンバーガーの残りをもぐもぐしながら平然と応じてる。

まるで『コーヒーにミルク入れる？』と聞くようなお気楽さだ。

せっかく、俺が助け船を出してやろうとしてたのに。

「有りだよ。お友達がいれば連れてきてもいいよ？」

かなめが決闘を受諾したので、白苺は『よしこれで天下御免でかなめをボコれる』って

感じのダークな笑顔になり、比較的親切にアドバイスなんかしてる。

幇助者とは、「1手だけ手助けしていい助太刀」の事。

通常は決闘の膠着を防ぐために横槍を入れたり、もう勝敗が明らかな状態で過剰攻撃が行われていたら割って入って負けを認める係なのだが——

そんなもの、戦いが始まってしまえば大抵どうでもよくなる。経験上——

「違うって。あたしに必要なんじゃないよ。お姉ちゃんに必要なの。『負けました』って言えなくなるまでボコるから、誰か代わりに言う係が必要でしょ？」

かなめはかなめでレキに笑顔を返し、ぐしゃくしゃ

食べ終わったテキサスバーガーの包み紙を丸めて——ひゅっ、ぽんっ——

スラッグショットのような勢いで、ゴミ箱に投げ入れるのであった。

翌日の夜、月光の下。

決闘場となった第2グラウンドに、制服姿のかなめが仁王立ちしている。

その背には、自分の身長ほどの——長い、抜き身の刀が背負われている。

鎬や樋に蛍光ブルーの光を煌めかすそれは、ただの刀ではない。バスカービル襲撃時にかなめが用いた先端科学兵器、単分子振動刀だ。

物理・化学の成績がイマイチな俺には理解しきれなかったが、かなめの説明によると、

その刃には分子レベルのワイヤーが張られており、それがチェーンソーのように回転して
いるのだという
炭素原子を素材とするそのワイヤーは電子顕微鏡で見ると糸鋸形をしており、モース
硬度は10　要はダイヤモンドのチェーンソーってわけだ　俺なりの解釈で言えばな
「これで斬れないモノなんかない」
そう言って胸を張るかなめの横で、
（十年前、白雪も同じような話をしてたけどな　まあ、アイツのオカルト的な論拠よりは
かなめの話の方が説得力があるが
などと考えていると――その白雪、そしてジャンヌを先頭に、さす、さす
グラウンドの砂を踏み鳴らし、アリアと理子を加えた女子一団がやってきた
うわぁ……これは……
後悔せざるを得ないな　かなめが心配でついてきてしまった事を
白雪は巫女装束に鉢金、たすき掛け　手には本鞘に収めたイロカネアヤメ
これは4月にアリアを殺しに来た時と同じ、星伽巫女伝統の戦装束である
他のメンツは防弾制服姿だが、ジャンヌは魔剣デュランダルを腰に提げ、アリアは
拳銃をガンチラさせ、理子はM1887を抱っこしてニコニコしてる
皆さん、やる気十分って顔をなさってらっしゃるよ

それを迎えるかなめは――

「お姉ちゃんたち遅い遅い、待ちくたびれちゃったよ」

一同に対し、親指で喉笛をカッ切る仕草を見せた

「カマトト、タカラヅカ、チビ、ブリッコ　あれ、1人足りないぞ　ダンマリは？」

そのまま4人を指さし確認し、レキがいないことを指摘したかなめに（タカラヅカとはジャンヌの事らしい）、

「――もうあんたを狙ってるわ」

と、アリアが長いツインテールを風になびかせつつ答えてる

今の呼び名が自分たちだって認識はあるんだな

「それがリングの外周　逃げられないわよ　レキは狙撃成功率99％以上のスナイパー――撃ち損じたのなんか、1度しか見た事ない　それは不発弾によるものだったしね」

まあその不発弾は俺が仕込んだものなんだけどな　実質、100％だ

「あ、改めて言うが、やめろ。こんな事　お前らはかなめに不意打ちされた直接の被害者だから気持ちは分からんでもないが、大人げないぞ。もっと本質的な解決方法を考えろよ」

バスカービルのリーダーとして言ってみるが、西部劇のガンマンみたいにこっちを睨む副リーダーのアリアは、

「強襲科に出入りしないから平和ボケが進んでるのね、キンジ。こっちの方が武偵の本質問題は直接対決、鉛弾で解決するものでしょ」

まんま西部劇のガンマンみたいな事を言いやがる。声はアニメ声だけどな。

「それにしても、ただの仕返しを超えてるだろこれは。かなめ1人に対して、雁首揃えて完全武装で来やがって。何か他に私怨でもあんのか」

と、俺に睨み返されると……アリアは赤面スイッチをONにしつつ、

「べっ別に、あんたをかなめから取り返そうとかそういうんじゃないわよっ！」

なんだか噛み合わない事を言ってから、あっしまった何で言っちゃったかなこれ、的な慌て顔をし、キリッ、と表情を元に戻して白銀色のガバメントを抜いた。

「言っとくけど、パステル。装填だからねこれ。合製された時とは違う」

パステル――それは、バチカンに貰った武偵弾の事だ。

ただの.45ACP弾じゃかなめには通じないと見て、持ってきやがったか。

「そういう問題だと思ってたの？　めでたい女だなぁ」

かなめはアリアを嘲笑ってるが……

違うぞ、かなめ。

お前はブッ飛んだ強さを持ってるから考えたことも無いのかもしれないが、人間、いきなり襲われるのと準備をきちんとしてから戦うのでは、戦闘力が何倍も違うんだ

それもアリア級の武偵を相手にするなら、油断すると命取りになるぞ　分かってんのか。

「最近かなめぇがキーくんを独り占めしてたからさぁ　今はヤンデレ化中なのですよ～」

かなめに微妙なアダ名を付けたらしい理子は、ショットガンを持ったまま爪で器用に指ツノを作ってから——

ガシャッ　と、そのショットガンをポンプアクションさせた

それはショットガンと対戦した事がある人間なら、どうしても恐怖を感じてしまう音

「避ける時はこっちおいで　理子とあそぼ？　くふふっ♪」

拳銃弾は常に、避けられる可能性がある。意外と、シロウトでも躱す時は躱す

弾は直線にしか飛ばないし、その『線』を発砲前に見切る事も不可能ではないからだ

だが、ショットガンの弾は、避けられない

弾が拡散し、標的を『面』で捉えるからだ

しかも理子のショットガンは、ソードオフと呼ばれる銃身を切り詰めたタイプ

これは秘匿性を高めるだけではなく、弾の拡散性も高める効果がある

正直、俺がヒステリアモードだったとしても相手にしたくない銃だ

「くししし　懐かしいねぇキーくん　ランバージャックだよ」

その上、俺に笑顔を向ける理子の足下には……影が２個あるぞ

ヒルダが、ついてるのか　まあ、勝手についてきたのかもしれんが

俺が悪魔っぽいヒルダの姿を想起していると、

「かなめよ、神への祈りは済ませたか？」

　しゃん

ジャンヌが、涼しい音を上げてデュランダルを抜いた

「今宵の補助者は私だ　リングを務めつつ、決闘に少しだけ干渉させてもらうぞ」

この二つ編みを結い上げた髪型は……戦闘モードだな　コイツも

「……お前は、こういう野蛮な事には手を貸さないと思ってたけどな、」

そう俺がボヤくと、ジャンヌはその蒼い瞳でこっちを睨んできた

「私が出陣せざるを得なくなったのは、お前が不甲斐ないせいだぞ　遠山」

「なんで俺のせいなんだよ」

「私たちは先日、かなめを『師団』に引き入れるようお前に命じたろう　ある方法で」

ある方法……？

ああ、色仕掛けの事か　バカバカしい

誰がやるか、そんな事　しかも自称妹に対して

「だがこの現状を見ろ　お前は失敗したのだ」

「失敗も成功もあるか　あの方法はお前らが勝手に言い出した事だろ」

「私は直接命令を受けたワケではないし、元々かなめの件については穏健派だったのだ

だからハスカービルの女子たちに、いま遠山がこれこれこういう方法でかなめを懐柔しているところだから少し待てと丁寧に説明してやったのだぞ　想像図も描いた」

ちょっ　！

何してくれちゃってんだよ！　ジャンヌ！

「だが、かなめと皆の関係は一向に改善しなかった　」

「するわけねえだろ　そんな、やってもいない非倫理的な作戦の話をされても！」

「つまり、引き入れの方法を変えざるを得なくなったのだ　武器で屈伏させる形にな」

ぎらり……

トンチキジャンヌは、「？」という顔をしているかなめに見せつけるように、銃剣を月光に青光りさせる

それに何より、かなめは私を卑怯者呼ばわりしたからな　先日のバーガーショップで」

バーガー　マックでの事を言ってるのか？

実際コソコソしてたろ　みんなして

「私は臆病者でも卑怯者でもない　正々堂々と戦い、それを思い知らせてやろう　それに武偵高では下負けは不名誉な事だからな　いかなる場合であっても、下級生に背を向けて逃げるワケにはいかないのだ」

お前こないだ変装食堂で下級生から思いっきり逃げてたろ

ウェイトレスのコスプレしてるの見つかって

あーもう、ツッコミ所が多すぎて話す気も失せてきた

「いいよいいよ。『極東戦役』の勝負でも何でも兼ねれば？」

べー。

かなめがジャンヌにベロを出し——

ざす。

これまでずっと無口だったのがむしろ怖い白雪さんが、赤い鼻緒の下駄を鳴らして前に出てきた

「キンちゃん、下がってて。今夜は璃璃粒子が無いからね」

璃璃粒子、あれか

雨みたいに降ったり止んだりする、超能力阻害粒子の事か

それが無いという事は　白雪も全力が出せる。かなめに手も足も出なかった前回とは違うって事だ。

かなめ。

今回こそはマズそうだぞ　お前

「リングは出来たし、後はルールの確認だけだね」

刀を鞘から抜いた白雪の言葉に、ふと気づくと

いつの間にか、近くにいるのは白雪とジャンヌ、そしてかなめだけになっていた

アリアと理子は同士討ちを防ぐために60度の角度で中距離に展開し、三角形のもう一角となる体育倉庫の陰には犬用防弾チョッキを装備したハイマキが見切れてる

そっちの方向は、ここにはいないレキが担当していると見るべきだろう

こいつら、じっくり作戦を練ってきやがったな。

ランバージャックのリングの人数は1桁までと決まっているが、配置にルールは無い

バスカービル女子のリングを、ここを中心にした同じ円として考えると　その陣形が優れている事はすぐ分かる。

まず、決闘者は日本刀を携えた白雪

決闘方式の制約で、中近距離向けの武器を携えている

近距離での戦いを中心とするもう1人の剣士　ジャンヌを最も近くに配置――

もしそこから逃れても、銃の天才児・アリアが線で、ショットガンを持った理子が面でかなめを捉える　中距離の円を、出られない

奇跡的にその円から逃げ果せたとしても、レキの魔手から逃れる事はできないのだ

ヒステリアモード時の俺でさえ、逃げられなかったんだからな

「かなめ　これはダメだ　こいつらが敷いた同心円陣の意味ぐらい、お前も分かるだろ

これは必殺陣だ　絶対逃げられないぞ」

その円の中に自分も入ってしまっている俺は、少し焦りつつ強襲用品で出[illegible]する

たが、かなめは相変わらずヘラヘラした笑みを浮かべたままだ

「悪いことは言わない 詫びを入れて降参しろ。事後処理はこっちでする こいつらには俺がなんとか言って聞かせるから 少しは危機意識を持て」

マジ顔で言う俺に――

「それは無理だよ、お兄ちゃん アリにびびる恐竜はいないでしょ ていうかそんな大きなリングは必要ないんだってば、お姉ちゃん」

かなめはそう言って、けん、けん、けん

「……？」

制服の短いスカートをヒラヒラさせつつ、女子小学生がケンケンパーで遊ぶ時のように、グラウンドの砂に、つま先で直径10mぐらいの円を描いた

その円内には、自分や俺、自分の背後にいるシャンヌも入っている

――ここから出ないで戦ってあげる 指一本でも出たら、あたしの負けでいいよ」

この発言に、自[illegible]が、眉を吊り上げた

かなめは、しゃっ、と単分子振動刀を月に掲げ、

「先端科学兵装ハンザイ この刀は、お前らのカビ臭い武器とは違う 1本で日本の10式戦車1輌と渡り合える最新兵器だ 女と武器は新しい方がいいんだよ ね、お兄ちゃん」

花がほころぶような愛らしい笑顔を、俺に向けてきた。

だが――

一緒に過ごす時間が長くあったせいか、俺には、かなめの本心が分かってしまった。

理由を超えたところで、なんとなく、かなめの感情が俺に伝わってきたのだ。

　かなめのこれは、虚勢

かなめは今、1人だ。幇助者もいない。

しかもバスカービルの武装は強化されている。瑠璃粒子の凝集も調査済みだろう。

その上、これだけ完璧な布陣を敷かれてしまうと――何か重いのだ。きっと

それに怯える心が、伝わってきた。きて、しまった。

だから俺は――

クソッ。しょうがねえな。

「アリア」

離れた所からでもハッキリ分かるほどD字形の血管を額に浮かべてるアリアに――俺は話しかける。

「俺に来た『カクテル』は9㎜弾じゃない。50AE弾だった」

そして俺は持ってきていたD・Eを抜いて、一同に見せた。

「止めてもムダよ、キンジ」

「もう止めねえよ　やれ　お前らの気が済むまで　だが俺は、こういうイジメみたいのが
この世で一番嫌いなんでな」

「イジメじゃないよ～、かわいがりっていうんだよ～」

手メガホンで理子がそんな事を言ってくるが、

「似たようなもんだろ」

と、切り捨てる

「——どういう意味だ、遠山　その銃は

「かなめの幇助者になるっつってんだよ」

カンの悪いジャンヌにそう説明して、かなめを横目で見ると——

きゅ、と、小さく握った手を胸の前に寄せて　ちょっと驚いた目で俺を見てるな

で、俺と目が合ったら、微妙に頬を赤くして視線を逸らした

よく分からんリアクションだが、まあ「異存無し」って事と解釈させてもらおう

そんなかなめに歯ぎしりを始めた白雪が何か言い出しそうだ

なので俺は、強引に話を進めてしまう事にした

「——お前ら　ルールの復習だ　決闘者の片方が敗北を認めるか、動けなくなったら終了
それまでは腕が飛ぼうが足が飛ぼうが、ＴＫＯは無い　引き分けも無い　逃亡は許されない　逃げたら、リングが中心側に戻す　その際はどんな攻撃も許されるし、押し戻すだけ

でもいい」

——ああ、強襲科時代を思い出すぜ

アリアじゃないが、いかにも武偵らしいよ。こういうのは。悪い意味で。

「幇助者は膠着を防ぐため、決闘者の死亡事故を防ぐため、その他任意の理由のために、1回だけ手出ししても良い。ただし、その後は一切の手出しが許されない」

「うん、うん。ルールはあたしたちの認識と同じよ。以上？」

俺が乗り気になったのを見るアリア、何だか嬉しそうだな。相変わらず好戦的なヤツだ

「ああ」

俺が小さく頷くと——

「じゃあ、もう始まってるわよ。お二人さん」

アリアは白雪とかなめにそう言って、漆黒のガバメントも抜いた

白雪と、かなめは——見つめ合っている

だが双方、すぐには仕掛けない

ランバージャックの開始は、決闘者2人が決める。これは誰にも侵されない、2人だけの権利だ。始まるのは呼吸が合った時。野獣同士の戦いや、侍の立ち合いに近い

今はただ、静かに時が流れている

すっ。

音もなく、白雪が刀を構えた。

刀身をほぼ直立させ　柄を右肩あたりまで上げたそれは——八相の構え

現代剣道ではあまり使われない、古風な構えなのだが　星伽の巫術も併用する白雪は、

余計な力を消耗しないで済む八相をよく使う

（だが、リド　どう戦うつもりだ？

かなめの刀は、どんな金属でも切れる。

銘刀イロカネアヤメもその例外ではないだろう

「触れなば斬れん　」

呟いて、かなめも刀を構えた。

右足を引いて、白雪に対してほとんど横を向いたスタンス

刀は地面と水平に構え、顔とほぼ同じ高さに上げている

柄を握る両手は後ろに大きく引いており、右腕を大きく開けたアクティブな姿勢だ

これは　見たことがない　どんな教則本にも載ってない構えだろう

だが、直感的に分かる。

これは相手の刀に受けられる防御を無視した構え

無視できるのだ。常識外れな切れ味を誇る、かなめの単分子振動刀なら

これはその刀を持つが故の、かなめの個性なのだろう

「……」

刀を垂直に構える白雪、水平に構えるかなめ

対照的な2人から、息苦しいほどの緊張感が流れる

誰も、言葉を発しない　鈴虫の音も——止んだ

2人の闘気が噛み合い、周囲に行き渡ったのだ

そして、

——パッ——！

風に流れた落ち葉が2人の間を横切った瞬間、かなめが飛び出した

「上手いな」

ちょうど枯れ葉が白雪の視線を遮ったタイミングで、先手を取っている

「緋焔・焦壁——」

受けに回らざるを得なかった白雪は、刀から離した右手を横に振るう

その動きに呼ばれたように、白雪の前に2m近い旋風のような炎の壁が立ち上った

「うおっ……！」

少し離れた俺の所にまで、危険なレベルの輻射熱が吹きつけてくる

あれはただの火じゃない。恐ろしく高温な、灼熱の壁だ

さっき白雪は「今夜は瑠璃粒子が無い」と俺に警告したが、納得だぜ　瑠璃粒子無しで

能力をフルに使えるアイツは、まるで大門火炎放射器だな

かなめは、その炎を刀で貫きつつ——バッ！

しかし体ごと突っ込みはせず、突進をキャンセルして左サイドに跳んだ

単分子振動刀が薙いだ炎壁の端から——

長い黒髪を振り乱し、白雪も左側に現れる

その構えはシャンス戦で見た、松明を掲げるような右手大上段

刀身は既に、渦を巻くような炎を纏っている

「星伽候天流——緋焔毘・胡蝶！」

振るわれた刀そのものは、肉眼では追い切れなかった

だが炎の軌跡は、蝶が羽ばたくような打ち下ろし・切り上げのＸ字を描いている

巌流でいう『燕返し』、その片手版、ってところか

だがそれは、かなめの刀を炙るだけの軌道だ　白雪はイロカネアヤメが単分子振動刀に触れないようにしているのだ　触れれば、切断されてしまうから

「——あはッ」

かなめが、勝利を確信したかのように笑う

そして、こちらも肉眼では追えない速度で刀を動かし——くるるっ、

膝を抱えてのハック宙で、白雪から距離を取った

刀身に輝く蛍光ブルーの光が、イルミネーションみたいに回転する

「危なかったわ

やるねぇ、かなめぇ」

などと会話するアリアと理子には、今の交錯で何か起きたのか細かく見えてたらしい

……」

無言で正眼の構えを取った白雪の巫女装束、その緋袴の帯が……ぱら……

一部分、切れている

さらに純白の衣にも左脇に切れ目が入ってしまい、下着にあたる肌襦袢が露出している

今の一瞬で、かなめは白雪の胴、胸を狙った2突きを繰り出していたのだ

新体操の選手みたいに着地したかなめは、

「どっちも紙一重で躱したね、お姉ちゃん」

チャキッ――楽しげに、刀を構え直した

だがそれは刀身をさっきより顔から離した、ややオープンな構えになっている

「ふん、単分子振動刀を持ってられなくなるぐらい、熱くしようって作戦だったかぁ」

というかなめの刀は、焼きゴテのように赤熱化していた

あれは――恐らく俺なら、もう持っていられない熱さだろう

どうやら、白雪は無闇に星伽の術で炎を放っていたのではなく――かなめの刀を炙り、

熱を乗り移らせ、あの厄介な科学の刀から手を離させようとしていたらしい

「残念でした。耐高温テストなんか、何十回も経験済みだよ！　この刀も、あたしもね高熱にしても性能は変わらない　お姉ちゃん、終わったね」

獲物を捕らえる猛禽のような眼をして——

かなめが、引いた右足をシャリッと鳴らす

「むしろ切断面を焼いちゃうから、手術しても繋げられなくなっちゃうぞ！？　腕とか足とかさぁ。でもまあ、それは自業自得って事で」

空恐ろしい話で威嚇するかなめに、一方の白雪は

刀を鞘に収め、姿勢を低くした

居合いの構えだ

「緋緋星伽神か　いや　それは悪手だぞ、白雪……」

俺は固唾を呑んで、それを見る

奥義・緋緋星伽神には、力を溜める時間がいる　それを許すかなめじゃないだろう

仮にうまく出せたとしても、刃がどこをどう翔るか容易に想像がつく技だ。あれは

かなめはそこに自分の刀を合わせるだけで、イロカネアヤメを切れる　その向こう側にいる白雪もろとも　そして——それができないかなめじゃない

それとも、それを分かった上で……

対価の名を冠したその技と、心中するつもりなのか。白守

「火焔の魔女――自分の火で、火傷しなッ――」

赤光りする単分子振動刀を構え、かなめが――ハンッ！

足下を爆発させるように蹴り、砲弾のようにいきなりトップスピードで駆けた

「――かなめ、終わったね」

ぱっつん前髪の間から、白守がかなめを見据え　その背後から――

「ジャンヌ……！」

白守の補助者、ジャンヌが駆けてきた

魔剣デュランダルを脇構えにし、剣身を体で隠すようにしている

「おお――！　ジェットストリームアタックだ――！」

理子が何だか分からない単語で囃す中――

ジャンヌは白守を華麗に飛び越えて、デュランダルを引き起こした

「――オルレアンの氷花――」

静かに唱えたジャンヌの剣は既に、青白く輝いている

微細な氷の結晶が、ジャンヌの周囲に煌めく

その技の直撃はマズいと思ったらしいかなめは、足下に刀を突いて急ブレーキを掛ける

――パン――

かなめの手前に落ちた碧い光が、地面を一気に氷結させた

そこに突き立てられていた刀へ、これも瑠璃色の問答無しの超低温が伝導していく。

「…！」

ぱき、ぱきぱき……！　という音と共に、単分子振動刀が凍て付いていき――

かなめは自分の足と地面が氷で縫いつけられないようにと、

「んっ　！」

　ひらりっ……！

超人的な運動神経で、逆立ちした　凍った地面に突き立つ刀の柄を片手で握ったまま、

そこを支点にして、刀の上に　まるでサーカスだ

単分子振動刀は、切っ先から上へ上へと銀氷に覆われていくが――

刃々が赤熱化していた事もあり、鍔の辺りまで凍り付いただけに留まった

その上で片手逆立ちしているかなめは、無傷だ

「ひゅう――補助者を使ってきたかあ　ごめんごめん、ザコすぎるんで忘れてたよ」

逆立ちしたまま体を縮めたかなめは　ハッ！

「でも残念でした！　ムダだったね」

一気に全身を伸ばし、その動きで刀を地面から抜きつつ飛び上がった。

そのままジャンヌを飛び越えて、水晶のように凍り付いた単分子振動刀で狙うのは――

白雪。白雪の頭上から、かなめが襲いかかる形になっている

「月伽餃人流・奥義」

対し、今まで力を溜めていたらしい白雪は、

「緋緋月伽神ノ！」

ばぁっ――と立ち上る炎の奔流で、十字のかなめを迎撃する

その炎を物ともせず切り裂いて、かなめの刃がイロカネアヤメを両断しようと迫る

「――ッ！」

かなめが何かに気づいた表情をした、次の瞬間

――キキンッ――

ガラスが割れるような音と共に

イロカネアヤメとぶつかった単分子振動刀か、破断した　バラバラに

それに、とすっ、という鈍い音が続く

落ちてきたかなめ本体に、炎を消した白雪の刀がぶつかった音だ

――み、峰打ち……！

これは、見えた

白雪はかなめの胴に、軽い峰打ちを入れたのだ

地面に落っこちたかなめは、ごろっ、ごろごろっ、と転げて……がば

四つんばいの姿勢で、顔を起こした

「あ、ああ……」

大きな目を潤ませたかなめは、刀の破片を掻き集めるような仕草をしたが……

再び赤熱化していたそれに、手を弾き返されるように引っ込める

「そんな、そんな……！　先端科学の結晶が……こんなの絶対、おかしいよ……！」

ショックのあまり、かなめはただ狼狽えているだけだが——

「俺には、今のカラクリが分かった。一応」

どんなに最先端の科学を駆使していても、かなめの刀は金属

金属は、加熱され、冷却され、また加熱され……を繰り返されると、脆くなる。

世界一頑丈な日本の鉄道レールだって、気温の急激な変化があると膨張収縮で破断する事があるんだ

それをあれだけ激しく、桁外れな温度の炎と水でやれば……

効果は覿面だったのだろう。結末はご覧の通りだ。

「はかなさを　ほかにもいはじ　桜花　咲きては散りぬ　あはれ世の中……」

長い睫毛の目を閉じ、和歌を諳んじた白雪は——

静かに、銘刀イロカネアヤメを木鞘に収めた。

新古今和歌集・徳大寺実定だったかな、それ。古文の成績が悪いからウロだぜ。

「——勝負あったわね」

くるくるすぽっ、と、拳銃をスカート内のホルスターにしまいつつ、アリアが言う。

お前、何にもしてなかったクセに、なんでそんなどや顔するよ。

俺は、かなめのそばに片膝をつき……

「かなめ。もう終わりだ。最新武器は花が咲くみたいに次々現れるが、散らない花は無い。その刀は、今夜散った。それだけの事だ」

……今の自分が詠んだ和歌を、この場に合わせて解説してやった。

タネを明かせば実にシンプルな攻略法だったが、逆にシンプルすぎて、かなめはそれを想定してなかったんだろうな。

だが、俺に対して顔を上げたかなめは

その現実を、まだ認められないようだった。

最新、最強の武器。先端科学兵装が、破られた。

それを、かなめはまるで自分自身が否定されたかのように感じたらしく、

「う……うぁあああああ！」

それこそただの中学生みたいにキレて立ち上がり、白雪に拳で殴りかかろうとした。

白雪も一応、立ち位置だけ変えて応じる姿勢を取ったが——

俺は幇助者として、開いた手を白雪に向けた。

その子の人差し指は、D・Eのトリガーガードに掛けて、銃をプラプラと垂らす

これは武偵やアメリカの警官がやる『撃つつもりがない』意思表示

降参のジェスチャーだ

そして、反対の腕でかなめを制しつつ——下を見るよう、視線で促した

そこにはかなめが最初につま先で描き、「ここから出たら負けでいい」と宣言した円が

あり……かなめの片足が、その外に出ている。

というかさっき、白雪が峰打ちで意図的に押し出したのだ……片足だけ出るように

「——自分が言った事だろ。守れ」

ちょっと厳しめの口調で俺に言われた、かなめは

……うる……うるるる……

その目に涙を溜めて、震えて、震えてから……

「う……うぇ……うぇえええええええん！」

それこそ中学生丸出しの泣き方で、泣き出してしまった

　俺の前で恥をかいた事が、耐えられなかったようだな

というか、どうしよう……泣きやまないぞ……かなめ。

「泣ぁ～かした～泣ぁ～かした～！　せ～んせ～に言ってやろ～！」

ぴょんぴょん跳ねながらやってきた理子が、俺と白雪の周囲を走り回りやがる

理子、てめえ、最初、かなめにヤキ入れるの大賛成だったじゃねえか。

だが……

お陰で、さっきまでの殺伐とした戦闘のムードは霧散したな。

なんというか、理子の表情も「もういいでしょ？　これ以上イジメちゃダメだよ」的。

どうやら理子は、このいたたまれない空気を読んで……わざとふざけたムードを流し、場の緊張感を解いてくれたんだな。コミュニケーション能力ある奴だよ。

コミュ力に乏しい俺とアリアは、「どうしよう」と顔を見合わせるだけだったが……

そこにトテトテやってきたハイマキが、ペろ、かなめのほっぺたをなめて、優しく慰めてやっている。どうやら俺とアリアのコミュ力は犬以下らしい。

一方、コミュ力という点で断トツ最下位のその飼い主さんは――グラウンド脇の桜の木から、ドラグノフを担いで下りてきた。意外と近くにいたんだな、レキ。

「かなめよ。剣を交えたとはいえ、お前の技は大したものだったぞ。あの一瞬で反撃していたとはな。さっきまで気づかなかった。少しズレていれば、私は討たれていたよ」

そういってかなめの横にしゃがんだジャンヌの、背中は――

「……ま、丸出し……じゃねえか！」

俺は慌てて、顔を逸らす。

本人は平然としてるが、防弾制服がバックリ縦に切られて開いてて……ケガはしてない

もの、下着のストラップが丸見えになってやがる　陶磁器みたいに白い生肌も

し、しかし、どうやって留めるんだろう　女子の胸の下着は　留め金か背後についてるのに　アリアのは前にホックがついてたから理解できんでもないが

などと、男子の永遠の謎に俺がオーバーヒートしかけていると……

裂けた巫女服の脇をどこからか取り出した安全ピンで留めた白雪も、

「……やっぱり強かったね　さすがはキンちゃんの妹さんだよ」

また半べそのかなめに、優しいお姉さん顔をしてる

かなめはションボリして黙っていたが、「キンちゃんの妹さん」という単語は耳ざとく聞き逃さず、コクンと頷いてる

もうそういう事にイラッとし飽きていた俺は、

「そんなこと褒めんなよ　ケンカの強い弱いなんて、学園島の外じゃ何の意味もないことなんだぞ」

ようやく緊張の解けた苦笑いをしつつ、そうジャンヌと白雪に小言するのだった

その後すぐ、仕切り屋のアリア様が「キンジ　コーヒー」とか言い出した

これに時間がかかると俺がアリアにランバージャックされるので、俺は夜分悪いなぁと思いつつも武藤に宅配を頼む事にした。

まさか決闘に立ち会ってたとも言えないので「小児をしていた　ちなみに女子もいる」と伝えると「5分で行く！」と答えてきたか、コーヒーは缶コーヒ　しかないらしいので「どうしましょう」とついまた敬語になってしまいつつアリアに聞くと、

「使えないわね、将来が心配だわ」

に始まる聞くに堪えない俺批判をした後、アリアは強襲科の後輩にコーヒ　を用意するよう連絡してた。ほんとに人を顎で使うのに慣れてるよな、このものぐさ貴族様は

で、間宮あかりというアリアの戦妹を搭載した武藤の軽トラが本当に5分で到着して、間宮は間宮で10種類もの味のコーヒーポットを持っていた

そして、嘘から出た実で

そこからは本当に、深夜のお月見会になってしまった

ちなみに間宮は、アリアより背が低くアリアより胸が平たい　史上稀に見る幼児体型の女子高生だ　髪型もショート　ツインテールでとことんガキっぽい

コイツは脳神経の配線をどう繋ぎ間違えたのか知らんがアリアを異常に尊敬しており、何でもホイホイ命令を聞く便利キャラなのだが

「夜も遅いんだから遠山先輩はアリア先輩、というか女子から離れて帰ってください」

とかいう発言からも分かる通り、なぜか俺の事を目のカタキにしてくる　できれば会いたくない女子の1人だ

ていうか雨宮よ、この現場を見て「お月見」で納得するのは武偵としていかがなものか。アリアの隣をしっかりキープし笑顔でコーヒーを注いでるが、周囲が焦げ臭いんだからおかしいとか思えよ。

「…………」

で、雨宮のせいでハブられ気味の俺は、女子の輪から離れて地べたに座っている。一応コーヒーは貰えたが、なんか出がらしっぽいぞこれ。月見団子を買いに行った武藤、早く帰ってこないかな。

女子たちは実はかなめが今回も帯空させていたあの布状の兵器――「磁気推進繊盾」をグラウンドに下ろし……端っこに黙って座って「座っていいよ」的な空気を流したので、みんなしてそれをピクニックシート代わりにして女子会ムードだ。

かなめの様子を心配しながら、それを見ていると――キャラメルマキアートをぐい飲みして、ようやく落ち着いた感じになってるな。

夜も遅いせいか、体育座りの雨宮がウトウトし出したのを見計らって

「ていうかあんた、何で今夜これ使わなかったのよ」

磁気推進繊盾に過去苦しめられたアリアがそう尋ねると、かなめは――白雪をチラッと見てから、

「白雪お姉ちゃんが、刀を１本しか使わなかったから、前と違って、今夜のこれは決闘

戦争じゃない。だから、あたしも刀1本だけで戦うべきだと思ったの。あたしだけ何本も刀を使うのは、卑怯だから」

ああ……こないだのマックでも言ってたが、かなめは——先日、俺に「[illegible]を名乗るなら卑怯な事はするな」と言われたのを守ったんだな。

「……そうだったんだね」

それを聞いた白雪は、あれだけ敵視していたかなめを見直すような目をした。

そして銀色の紙山みたいになった単分子振動刀の欠片を1つ拾い、撫子柄の手ぬぐいに包んでかなめに手渡している。

「刀は武士の魂——あなたの刀からも、気高い魂が伝わってきたよ。美しかった」

「お姉ちゃん……」

素直にそれを受け取ったかなめも、白雪を尊敬したような目で見上げてるな。

まるで本当の姉妹みたいなムードだよ。あそこ。

「喧嘩の後の兄弟名乗り、ってヤツだな」

ヤクザ映画みたいなセリフに振り向くと、団子の皿を手に武藤が戻ってきていた。

皿を白雪たちに渡してから、俺の横にどすーんと座った武藤は、

「ランバージャックだったんだろ、これ」

最初から分かってたみたいだな。どうやら。

「……チクるなよ？　黙認されてるとはいえ、最近は教務科もうるさいからな」

「……おねえよ。オレは容認派だからな、こういうの」

俺と武藤はお互い何か含みのある言い方をしつつ、女子が残した団子をつまむ。

「へっへっへ。思い出すなァ、キンジ」

「ヘンな笑い方すんなよ」

「お前も笑ってるじゃねえか」

実は、この武藤が……入学直後に、俺と徒手でランバージャックをやった相手だ。

理由は何だったか――確か、上下がどうのとか言って、武藤がふっかけてきたんだよな。

車輌科だからってナメてかかった俺は、体格差に苦戦したもんだ。コイツは組んでからの投げ技が意外と多彩で、得意のエクスプロイダーなんか目が回るほどの威力があったよ。

二度と喰らいたくないね、あれは。

リング役の不知火や理子に何度も押し戻されて、お互いヘトヘトのボロボロになるまで戦って――どっちが勝ったかは、もう忘れた。

で、その後どういうワケか、武藤と俺はつるむようになったのだ。

ケンカした後で友達になるとか、理に適ってないんだが……まあ、それが武偵高なりの人間関係の作り方なのかもしれないな。古くさくて、不器用な。

決闘後の対話は後日改めてする、という事になり

白雪やアリアたちはそれぞれの部屋へ、俺とかなめは俺の部屋へと帰る事になった

街灯の下、鈴虫の音の中を歩いていると

「お兄ちゃん」

かなめが、横から話しかけてきた

「なんだ」

「幇助者、――味方してくれて――ありがとう。お兄ちゃんが幇助者やるって言ってくれたとき――とっても、うれしかった……」

「でもお前、負けたの俺のせいだろ」

俺は一応、そこを自ら謝っておくことにした

ジャンヌが、「オルレアンの氷花」を放った時

かなめは、もっと早く刀を地面から抜けば空中に逃れる事ができた

だが、その後ろに俺がいたから……地面への冷気の浸透を、高温状態にあった刀で少しでも食い止めようとしたのだ

そのせいでかなめの単分子振動刀は完全に凍り付き、組織を脆くする結果に繋がった

もちろん俺とジャンヌの直線上で戦ってしまったのはかなめのミスだが、そもそも俺が幇助者なんかやらずにいれば――違う結果になっていたかもしれない

「ううん。妹が兄を守るのは……人が自分の家族を守るのは、当然のことだから」

そう言って、かなめは前髪を揺らして首を横にフリフリする。

その言葉を聞いた時――

俺は、かなめが本当の妹のような気が……

「……」

つい足を止めて、かなめを見下ろすと――

かなめも全く同じタイミングで足を止めて、その大きな深海色の瞳で俺を見上げていた

まるで本物の妹か、兄を見上げるように

2弾　体育祭

双極兄妹、ランパージャックと、短期間に2つの挫折を経験したかなめはその後……

　すっかり、毒気が抜けたようになった

自分に兵器としての価値が無いと悟り、決闘で敗北して自信を無くしてから、なんだか普通の女の子らしく学園生活を送っているようだ　通ってる学校は普通じゃないけどな

自慢の科学剣の数々も、すっかりお目見えしなくなった

だが　まあ、本来それでいいんだ

チャンネル争いで鉄砲ーすアリアや、イタズラで地雷を仕掛ける理子の方が間違ってる

かなめはこれから、平凡な一般人としての人生を送るべきだ　俺は心底そう思うぞ　まだ人生の修正がききそうな年代だしな

かなめの俺に対する態度も、随分変わった気がする

なんというか、かなめの主張通り〝兄妹〟として考えると、適切な距離を置き始めた感がある　理子みたいにベタベタしてくる事は無くなり、個人的には非常に助かる

とはいえ甘えん坊のお兄ちゃんっ子である事は変わりなく、時々俺を物陰からボーッと見てるなどの不可解な行為はするけどな

それはジャンヌが持ってるような少女マンガによくある『恋しちゃったけど相手がお兄ちゃんだから表現できない』的な動き

これはこれで自宅に居づらいこと山の如しなんだが、『他の女と一緒にいたから』包丁で30回刺す』とか言ってた頃よりは全然マシだ。噛んで耐えよう

と思って油断してたら……

かなめの不在中、とある理由で雨乞いの逆テルテル坊主——アタマが下になるやつだ——を作成していた俺に——意外な相手から、妙な電話があった

『師匠、もしもしで御座る』

「その呼び方やめろっつったろ」

で始まった、風魔との通話で——

『妹君は最近、1年女子の各位と積極的に交流されて御座る』

などという報告を受けたのだ

「いい事じゃねえか。普通の女子らしくて」

俺と違って、元々人気者だったらしいしな。猫かぶりのかなめさんは

『それが最近、特に仲の良い女子がいるので御座る』

「別にいいだろそれも。誰でゴザルよ、それは」

どうでもよさげな話題だったので聞く気が失せてきた俺は、逆テルテル坊主のアタマに

へのへのもへじを書こうとマジックに手を伸ばしたが――

「間宮あかり殿に御座る」

という言葉に、手を止めた

「アリアの戦妹の、か？」

「左様」

イヤな予感がしてきたな

間宮の事を少し掘り下げて尋ねると、どうやら1年の中ではかなりの成長株らしい

詳しくは機密になってる程の、それなりに大きな事件とかにも手出ししてるようだ

アリアの戦妹になった頃の間宮はEランクで、Sランクの誰かさんに「あんたといい、あたしFランク武偵に縁があるのかしら」などとカチンと来る事を言われたのにな。

で、ソイツとつるんでかなめが何をやってるのか尋ねると、

「詳細は不明なれど、師匠と神崎先輩を近づけないように共謀・画策している模様」

ときた

「俺と、アリアを？　結構な事じゃねえか」

近づかれなければ、ガバメントで追い回されたり、あのツノみたいな髪飾りつきの頭でリアル闘牛されたりしないで済むんだからな

「一応、2人とも監視しとけ　ヘンな動きがあれば報告しろ」

『御意(ぎょい)』

などと遣(や)り取(と)りして、俺(おれ)は頭(かぶり)を振りつつソファーに深く腰を下ろした

1年関係の事は風魔に任せすぎかもしれんが、まあいい

俺は忙し……くもないが、そろそろ人を使う事も覚えなきゃいけないからな

「それに、あれもこれもそこまで気を回してられん」

今の俺には既に、大きな、大きな、気苦労のタネがあるんだ

武偵高で明日の日曜に行われる、『体育祭』という——魔のイベントがな

「頼む……明日、大雨降ってくれ」

と、俺は完成した逆テルテル坊主をカーテンレールに吊すのだった。

それはそれは雲一つ無くキレイに晴れた、日曜の朝——

俺たち武偵高の全生徒は、第1グラウンドで方陣状に並んでいる

年に一度の運動会、『体育祭』のためにである

このイベント、うちの生徒はよく捜査や演習であちこち出かけてるため、練習はナシ

当日の早朝5時に集められて、教師どもに銃で脅されながらのリハーサルが行われ——

いきなり、本番をやらされるのだ

チクショウ、眠いぜ。立ったまま寝ちまいそうだ

私たち選手一同は、武偵憲章に則り、最後まで諦めず競技を行うことを誓います！」

などと仰々しい選手宣誓を、目立ちたがり屋の1年・高千穂麗が行い――

生徒たちは紅組と白組に分かれて、競技の準備に入った

その腰や背には何と、ナイフも、投擲弾も、拳銃も狙撃銃も機関拳銃も無い

武装解除しているのだ　俺たちは

これは武偵高では実に、実に、あり得ない光景である　そもそも校則で「拳銃と刀剣の携帯を義務づける」とされてるんだからな

しかもこれから始まる競技は、「玉入れ」

婚約がお見合いに失敗した時に強襲科で強要される「生徒2人でそれぞれ拳銃に弾を詰め競争をし、遅かった方を撃っていい」、あの「弾入れ」ではない

地上3mに掲げたカゴに皆でボールを投げ入れる、ただの「玉入れ」である

なにゆえ、うちの運動会がこんなに平和的なのかというと、

「いやァ、実に体力の有りそうな生徒さんたちですなァ」

「晴天にも恵まれて、健全な汗を流す事ができそうですねェ」

などと話し合っている、都教委――東京都教育委員会の次長と教育指導課長が視察……というか監視に来てるからだ

というのもかつての体育祭は、古代ローマの剣闘士も裸足で逃げ出すような過激競技が

目白押し、負傷者続出の、要はケンカ祭りだったのだ。ここの狂った生徒達はそれを大いに楽しんでいたのだが、噂（うわさ）を聞いた都知事がブチギレて。

その後、監視が付くようになった。ここでヘタをしたら武偵高廃校の危機！　と焦る教務科（マスターズ）からは、「体育祭の第１部では無邪気な高校生を笑顔で演じる事。発砲等は最も厳重に処罰する」という指示が出ている。

最も厳重な処罰とはつまり体罰フルコースなので、俺（おれ）たちは気色悪い作り笑いを浮かべながら玉入れだ。

「うぬぉうー！　入らないのだー！」

だがそんな中でも、我らが白組では——

装備科の平賀さんが演技抜きの無邪気な笑顔を振る舞い、みんなの心を慰（なぐさ）めてくれる。いつも武器を改造してくれるミニお子々で、今後その注文をするのが不安になるほどのノーコンぶりを見せてるよ。

ちなみに着用する体操着は自由なのでハーパンをはいている平賀さんなのだが、なんか公園で遊んでる女児を彷彿（ほうふつ）とさせる子供っぽさだな　こういう競技が似合う似合う

「——フンッ！」

キラキラ……！

銀髪を靡かせて、ムダに華麗なフォームで玉を投げてるのは　ジャンヌ

コイツは美人なので作り物の笑顔も映画のように美人顔だが、はいてるのは時代錯誤も甚だしいパンツみたいな形のブルマー。全体的にはマヌケ&男子の目の毒である

一方で空恐ろしいのは——

俺たちと一緒に玉入れをしてる先輩たち、3年の存在だ

武偵高の3年生は官民からの長期依頼が多く、短期留学と称して海外の事件対応に駆り出される事も多い。だから、あまり会う事もなかったんだが

……どいつもこいつも、なんて存在感だよ

みんな、一癖どころか二癖三癖ありそうな、難物っぽいのばかりじゃねえか

1年2年よりずっと上手く普通の高校生のフリをしてるが、やっぱりムードが違うぜ一般人相手には隠せるだろうか、武偵同士だと分かっちまう。

——3年は基本、抜き身の実力を下級生には見せてくれない。3年同士でも、迂闊には見せない。爪を隠し慣れている。

それは実戦的な依頼が増え、武偵同士が商売敵として相まみえる経験も増えるからだ

仲良しこよしじゃ済まなくなり、持ち技、必殺技、特殊能力を隠すようになる

その結果、ただの高校生に見えて、中身はそこらのヤクザより怖い——

いわゆる〝プロ〟の風格を漂わせ始めるのだ。

「奴隷の1年、鬼の2年に、閻魔の3年――閻魔様は鬼みたいに全裸を見せびらかしたりしねえ、って事か」

ああ　ただの手入れで、こんなに汗をかくとは思わなかったぜ

主に背中に冷や汗を、だけどな

その後、いきなり体育祭のプログラムは手抜きとなり

各種の『個人競技』が、校内各所でバラバラに行われる事となった

これは教師たちが生徒を見張るのではなく、部教委のお偉方をしっかりと接待するリソースを割くためである」

俺は個人競技に出るのが面倒だったので、スコア収集係を買って出たのだが

スコアシートを取りに教務科テントを訪れた時に見た、蘭豹&綴の変わり身っぷりには恐れ入ったよ。

普段の「ガハハ」じゃなく「ホホホ」と談笑しつつ、教育委員のオッサンたちに緑茶と羊羹なんか出してやがった

あれじゃまるで、ただの美人女教師じゃねえか。陰日向にも程がある、

こないだ2人がどっかから入手した、小樽の酒を丸々あけて酔っぱらって大暴れして、

人工埠頭の一部を内側から無意味に破壊して、学園島全体が南に0・08度傾いた事・

チクってやろうかな。

その後バラストタンクに注水して傾斜角度は復旧させたそうだが、クビになるぞきっと

まあ、その代わり俺のクビもちょん切られるんだろうけど

蘭豹が普段背負ってる、あの2m近い斬馬刀で

体育祭の第1部・後半——個人競技では、各人の得意不得意にかかわらず教務科の指定した種目をやらされる……ので、誰がどの競技に出ているのか見当もつかない

まずは障害物競走の会場へチャリで向かうと……

たったった。

——きゃん……——きゃうん——

高跳びのバー……に股を引っかけ、跳び箱に頭から突っ込む、これも古式ゆかしいブルマー姿の白雪がいた

もう他の選手はみんなゴールしてるのに、1人だけまだ1分も進んでない

ていうか、ありとあらゆる障害物に引っかかってるぞ……以上で

だが、そんな無様な白雪は……

「白雪さん頑張るんだー！」「そんな所も含めて最高だー！」「もっと高くジャンプしてー！」

男子生徒どもから、声援を受けまくってるな……なぜだ

しかも、からかわれてる感じじゃなく、心の底から応援されてるぞ

「あっ、あん、これ……えっ、あれ？　あれ、あれれっ……？」

次は網くぐりに挑戦して案の定どんどん絡まっていく白雪は、自身が部長を務める女子バレーボール部のユニフォームを着ている

「うちのバレーボール部、ちゃんと活動できてんのか……っ」

これは俺にとって、武偵高７不思議の１つである

続けてラケットスポーツのコートに向かうと、

「先輩！　私のタオル使って下さい」「いいえ私のを！」「私のも！」「私本体を！」

などと１年女子たちにおしくらまんじゅうされてるジャンヌを発見した

「と、遠山ッ！　助けてくれ」

普段のフォロー・ミーの変化形を叫びつつ、包囲網の間から手を伸ばしてくるジャンヌ

だが、すまん。俺には救出不可能だ

そんな超ミニスカートのテニスウェアを着てる女子どもの輪になんか、特攻できるか

こちとら病気持ちなんだ。自分でなんとかしろ

「いいじゃねーかモテモテで。性別が逆だったら良かったのにな、お前」

などと言いつつ、勤勉な俺はフェンスに掛けてあるボードからスコアを書き写す。

おお　ジャンス、1位じゃねえか　2位は強襲科の高千穂、3位はCVRの成瀬　と

ぱしゅ、ぱしゅ

というふに振り返ると、隣のコートではバドミントンのダブルス試合が行われていた

近い方のサイドのペア、その片割れは　レキだぞ　ヘッドホンは外してるが

ポロシャツとインナースパッツ入りスカートという一明らかに借り物のーウェアを着た

レキは、

「　」

ぴゅーん。

と飛んできたシャトルが横を通り過ぎてから、出来の悪いピッチングマシーンみたいに

ラケットを空振りしてる　垂直に

そんなだから、ゲームは一方的にレキたちペアの負け

相棒にさせられたバド部の女子、コートに突っ伏して泣いてるよ

まあ　あんたは悪くない

お地蔵様とダブルス組まされたら、世界チャンピオンだってマトモな試合はできないさ。

「おいレキ　お前、教務科に指定された種目とはいえ　もうちょっとやる気出せよ」

「……」

スコアをシートに書きつつお小言する俺に、レキは何も答えないな

スカートなのにフェンス脇で体育座りして、本物の石像みたいに動かない

「……？」

何だか、少し妙な感じだ。レキが

この茶番じみたイベントを、何かのシミュレーションにしてるような目つきをしている

たが——まあ、レキが妙なのはいつもの事か。放っておこう

その後、女子を手押し車で運ぶという何だか分からない競技に、タイヤが付いてるからには車輌科のプライドを賭ける」と本気で挑む武藤兄妹の姿に呆れたり、俺のマネっこでスコア収集係をやってるスパッツ姿のかなめと合流したりしつつ……

俺は担当する最後の個人競技ゾーン、エクストリーム・スポーツの会場に入った

空き地に滑走用の曲面をあれこれ設置した、そのパークで俺は……

「——ん？！」

聞き慣れたアニメ声に、空を見上げる

そこではアリアが、インライン・スケートを履いて大きくジャンプしていた

ハーフパンツの体操着を着て、キッズサイズのプロテクターを肘や膝につけ、ご丁寧にツインテールを出す穴を開けたヘルメットをかぶったアリアは——

円弧状の斜面に着地して、続けてのジャンプで、くるくるっ——と、滞空中に横倒しに

した体をネジのように捻して飛ぶトリック、コークスクリューを見せた

長いツインテールが体の周囲を二重螺旋状に流れ、観客の生徒たちから喝采が飛ぶ

「……すげえ……」

さらに次の斜面で飛び上がって、ちょん、と自分のスケートの先端をつまみ——身体を捻りながら宙返りする、フラットスピン540　難易度の高い技を連続して決めてる

決めながら、空中から自分の後輩の女子たちにウィンクする余裕っぷりだ

「やっぱり　俺の知る武偵の中では最も運動神経が優れてるな　アイツは

白雪やレキの体たらくを見た後だと　猶そう思うぜ

それに　いつもながらイヤな感覚なんだが

他に表現する言葉を知らんからそう表現せざるを得ない　その、可愛さ

それもズバ抜けてるよ。アイツは

初めて会った日からずっと、何かにつけ思わされる

身分もリアル貴族だし、語学の才能もあるし、何で天はアリアに二物も三物も与えたんだろうな？

俺なんか何も与えられてないぞ　与えられたのは厄介な体質だけだ

「だが、まあ……背と気が短いとか、泳げないとか、短所も色々あるか　アリアには

特に、大はしゃぎで過ごしてる時に物忘れが激しくなるのは大きな短所だな　夏祭りで

1度食べたタコ焼きを秋にはすっかり忘れてたから、2度教えるハメになったし。

などと、あれこれ思い出しながらアリアを眺めてると——ぐいっ

「痛っ」

さっき合流したかなめに、頬をつままれて引っ張られた

「なに見とれてんの、お兄ちゃん」

「み、見とれてなんかねえよ　なんで怒ってんだよ　エサを頬張ったシマリスみたいな顔しやがって」

「べぇーっにぃー」

ぷい。

かなめはそっぽを向いて、BMXフリースタイルのスコアをシートにガリガリ写してる

ぽき、と鉛筆の芯が折れるぐらいの筆圧で。

「あ、キンジ　あんた　体育祭サボってんの？　兄妹そろって」

ここでようやく俺に気づいたらしいアリアが——

インライン・スケートを履いたまま、つぃー　ミズスマシのようにやってきた

「第1部なんか……こんな茶番、サボった方が正解だろ」

「第2部のウォームアップになるでしょ？　こんなお芝居でも」

「シーッ　迂闊に2部を口にするな！　都教委に聞かれたら教務科にボコられるぞ」

俺は周囲を見回し、鬼教師の姿が無いことを確認する

「で、キンジ。ど、どうだった？」

アリアはプラボトルからストローでスポーツ飲料を飲みつつ、横を向いて聞いてくる

「どうだったって、何がだ」

「バカキンジ。向こうで見てたじゃない。あたしを」

「バカキンジ言うな。ていうか気づいてたのかよ」

「気づかないワケないでしょ。あんなにジロジロ見られて。視線がやらしいし」

「ジ、ジロジロって……いや、まあ、見てなかったワケじゃないが」

俺が口ごもると、きゅきゅい。それをどう解釈したのか、アリアが赤面し始めた

銃が出るか、と反射的に身構えかけた俺だが、今はアリアも武装解除してる。大丈夫だ

それに、別に怒ってる様子じゃないな。微妙に口元が緩んでる。これは、恥ずかしさ半分、嬉しさ半分、といった表情だ。アリアを観察してきた経験上分かるが

「俺にジロジロ見られて恥ずかしいのは分からんでもないが、嬉しさの部分がよく分からんな」

などと眉を寄せてると、かなめも横で眉を寄せている

こっちはアリアの表情の意味を正しく理解し、怒ってる感じだ

おい、どういう事だこれは、とアリアの顔を指さしてかなめに聞こうとした時、

「あんた、これからどうすんの？　スコア付け、もう終わったでしょ？」

そのアリアが聞いてきた。

「ん？　いや、まだだ。ここの他の競技がまだ１つ残ってる」

「あっそ。どれ？」

あれ、機嫌が悪くなった。

「ビルダリング。建物を登攀するロッククライミングみたいな競技だ。隣の狙撃科が届かないから、その屋上まで登ってきたヤツを採点するんだ。屋上で」

「お、おくじょッ……！」

あ！

いけね！

赤紫色の瞳をまん丸に見開いて固まったアリアを見て、俺は慌てて自分の口を押さえる。

というのも最近、アリアに対して『屋上』という言葉はＮＧワードになっているのだ。

それを、２度も言っちまったよ。

「お、おく、おくじょ！　おくじょッ――！」

「わ、悪かったアリア。忘れろ。今のは俺が悪かった」

「おくっ。おくっ。おっ、くっ。お、くじょ――！――」

……こ、これは

「不幸中の幸いだな、〝嵌まるパターン〟だ……！……」

そのＮＧワードを聞かされた時のアリアの行動は何種類かに分類されるのだが、これは特に安全なもの――そのまま機能停止してくれる、ボーナス・パターンである。

まだこの禁句の意味が分からなかった頃、「何でピーって聞いてテンパるんだ？　ピーの何が悪いんだよ　ピーの、ええ？　ピーの――」と何度も言ったら、なぜか大泣きした挙げ句、涙目で俺にキ――キー喚き、１人でテンパって、拳銃を四方八方に撃ちながら走り回った挙げ句、俺の部屋から東京湾へとダイブしたのだ。俺のお株を奪って

――これが最も危険な〝大暴れパターン〟

元々おかしいヤツだったが、とうとう本当におかしくなったか、と思いつつも――海面でアップアップするアリアを釣り竿で救出し、「あの時のは自分でも何でか分からないのについしちゃった事！　だからノーカン！」と、一本釣りされた状態でぽかぽこ殴ってくる暴力人魚に言われてようやく気づいたのだが……

アリアはどうやら、この間ＳＳＲの件で俺にキスした事を思い出して、ヒステリーを起こしていたらしいのだ。

とはいえ、あれは俺だって何でか分からないのにされた事。どうすればその心の傷――を癒してやれるのか、何のアイデアも湧かない。

自分でやっといて後から暴れる理不尽なアリアに悩まされつつも、とりあえず俺はＮＧ

ワードを[illegible]わないよう気をつけて揺らしている……という状態なのだ。今は

「アリア、おい、大丈夫か」

固まっていたアリアをちょっと揺すると、

「だ、だいちょぶ」

赤くなったまま、精神的ショックで半壊中だ。

「……」

「……」

どうしようかねこれ、2人して今後

という空気をお互い流しつつ、困惑顔で見つめ合っていると――

ぶぴーー！

競技で使っていたらしいホイッスルを鳴らして、アリアの戦妹・間宮が小さな体、短い足で走ってきた

なんだ？　短いツインテールを逆立てて、拳を振り回して怒ってるぞ

「遠山先輩！　アリア先輩から離れてください　かなめちゃん手伝って！」

「うん！　これはもうアウトだー！」

間宮はインライン・スケートを履いたアリアの背中を掴み――からーらー　台車を引っ張るようにして退場させていく。

こっちではかなめが俺の腰をつかみ、ズルズルと狙撃科棟の方へ引っ張っていく

これは、風魔から報告があった「俺とアリアを近づけない同盟」か

なんだこいつら

俺の安全保障上、アリアが遠ざかるのは歓迎すべき事なんだが――

お前ら、そんな事頑張って何になるんだよ

特にそこのミニアリア。間宮あかり

俺は白雪に対する粉雪のアクションで見たことがあるから分かったが、お前のアリアに対する態度は、あれと同じ属性のものと見た

それはそれでアリアの心身の安全保障上、危なっかしい事だぞ。まあ　それは俺にとって最も理解不能な世界の出来事だから、放っておく事しかできないんだが

などと……残念な戦妹を持つ事が判明し、「俺の見えないところでアリアも苦労してるんだなぁ」などと同情しつつ

俺はスコアシートを情報科テントに提出し、1年が武山のノートをまとめて、現時点で紅組865点・白組856点という接戦になっている事が分かった。

　勝敗は最後の全体競技・100人リレーによって決まるってワケだ

「――形式上は、な……」

などと溜息（ためいき）をつきつつ、改めて第1グラウンドに集まった全生徒のスキマから100mトラックを見渡す。

走者には紅白それぞれ50人ずつがクジ引きで選ばれ、延々とリレーをするのだが

俺は選ばれなかったので、観戦するだけだ

結局、玉入れしか参加しなかった事になるな　今回。全然いいけど

「ヨーイ！」

パァン

という号砲には選手一同さすがに神妙にしていたが、

「ひっ！」

1人だけ、トラックの内側でバックステップしてひっくり返った女子がいるな。紅組に。

水っけの多そうな太ももをジタバタさせつつ起き上がった、その生徒を見ると——

「な、中空知（なかそらち）……！」

よ、よりによってリレー選手に選ばれてたのか　幸（さち）の薄い女だな

通信科2年・中空知美咲（みさき）は長い前髪のかかった目をキョロキョロさせ、走る選手を見て、目を回し、また前に転んでる。

そして四つんばいになった状態で、次の走者が自分だと気づき　　あわぁわ、あわわ

「ひあぁあ」

立ち上がるヒマもなかったのか、腰が抜けたのか、四つんばいのまま丸首シャツの胸をだらしなくゆたゆたさせてコースに入っていく

ていうか、神のイタズラで俺の角度からは見えてしまったんだが

む、胸の下着・・白木綿で、無地で、もさいヤツだったな　なんか逆にやらしいぞ

まさかそのまま四足走行をするんじゃ　と不安がる　周をよそに、中空知はなんとか大地に立った　生まれたての子鹿みたいに足をプルプルさせつつ、テイクオーバーゾーンでバトンを受け取り――

　ふざけてんのか！　と思うようなX脚で走り出した

「ひっ、ひはっ、はっ、あっ　あくっ……！」

など喘ぎつつ時速10kmぐらいで走ってるか、赤い長ハチマキはほとんど靡いてない

「す、すげえ……」

何という驚愕の運動オンチっぷりだ、中空知　転ぶ　転ぶ　また転んだ

400mトラックを走り切ってワトソンにバトンを渡すまでに、8回も転びやがった

いつも思うが、あれに武偵が務まってるのが本当に謎だ

というわけで体育祭は紅組の逆転負けとなった　戦犯は言うまでもなく中空知である。

わーわー……パチパチ……

生徒一同の拍手によって、この茶番劇は華々しいエンディングを迎え

（体育祭がこの第1部だけで終わってくれれば、普通の学校なのにな）

別に大して疲れてない全校生徒による、なんちゃって整理体操が行われた

これは男子同士・女子同士が2人ずつ組むんだが、男子のフリで通学してるワトソンと組まされて……超気まずかったな。ワトソン、体勢によってはアタフタ慌ててるし……それを不知火が心配そうに横から見てたし……もう消え入りたいよ

教務科テントの方では——

「いやァ、白熱した勝負でしたなァ」

「全くですねェ……良い体育祭でしたねェ」

教育委員会の次長・課長か、見た目だけは美人な蘭豹や綴、さらに元女優の特殊捜査研究科・結城ルリ先生に囲まれてすっかりご機嫌になっていた

よく見たらさっきまでヤツらの机の上にあった緑茶が、瓶ビールに変わってるぞ。

ほろ酔い気分のオッサン2人は、天使のスマイルがウリの救護科教諭・矢常呂イリンに高そうな菓子折を貰い、ご満悦で帰っていったが

チクショウ。公務員ども。

武偵が敵を骨抜きにする常套手段——美女・酒・賄賂に、まんまと騙されやがって

俺みたいな平和派の哀れな目とか、そもそも武偵高の体育祭が『ケンカ』と呼ばれてる

事とか、騎馬戦が無い事とかに気づけよ

――騎馬戦――」

その単語を脳内で[illegible]しただけで、胃がキリキリと痛んできた。

それは体育祭　第2部で行われる、〝普通じゃない〟競技の1つなのだ……

水飲み場で太田胃散をサラサラ飲んでいると――

「トオヤマ」

赤い円錐形のカラーコーンを抱えた、ワトソンが現れた

「リハビリならやらんぞ　時と場合を考えろ、また不知火に見られたら……」

「また何もやってないだろう　リハビリは次回だ　というかさっき、キミは整理体操にかこつけて、ヘンな所を触らなかったか　ボクの、こ、こことか、こことか」

「何勝手に思いこんだ　誰が触るか、そんなとこ」

「その言い方は失礼だぞ」

「面倒なヤツだなお前、ホントに……」

などと話しつつ、ワトソンが「3」とマバタキ信号で伝えてきたので――

用具の片付けを手伝うフリをして、2人で体育倉庫に入ることになった

誰か見てないか細心の注意を払いつつ

「で、何だ。〝サード〟。ジーサードの所在でも分かったのか」

俺は薄暗い倉庫で、積み上げられた棒高跳び用ウレタンマットに腰を下ろした

「いや。それはイギリスの情報局保安部でも分からないよ。ジーサードは〝消える〟から。移動や通信の足跡はもちろん、光学的にも見えなくなる」

「ああ。それは2度見た。そういえばそうだったな」

そんなヤツ、探しようがない……か

「だが、過去は消せない。これを見ろ」

と、ワトソンは背中から何枚かのA4ペーパーを出して渡してきた

お前、こんなもん入れたまま体育祭やってたのか。

どうりでさっき背中合わせのストレッチをやった時、ガサガサすると思ったぜ

「……読めんぞ。英文なんか」

俺はその、シナモンっぽい香りのなすりつけられた紙を突き返す

「もう。勉強しなよ、トオヤマ」

ちょっと女の子っぽく溜息ついたワトソンは、ぽふ、と——

やはり男子のものではない、丸っこいオシリを俺の隣に下ろした。

（う……）

マズい。発動したぞ、俺のムダな嗅覚が

体育祭でちょっと汗ばんだせいか、ワトソンから　い、いいニオイがする
なんというか、フェロモンじみたものを感じるぞ　男子のカッコしてんのに
お前、そんなに女子女子した甘い香りを振りまいててよく女子だとバレないな
ほとんど丸出しの太ももに張り付いたハーフパンツが、健康的なんだか扇情的なんだか分からなくなってきちまった

「トォヤマ、なぜボクの足を見る　キミはエッチだ」

クセなのか、ワトソンは小さく出したラズベリー色の舌に薬指を付けてから紙をめくる

「み、見てねえよ　誰が見るか」

「キミは失礼だ」

さっきと同じ、面倒なやりとりの後——

ワトソンはこれもよく見ればとても女子っぽい大きな目で、シリアスに俺を見てきた

「——この資料を渡してきたリハディー・メイソンは、「師匠」としてジーサードに今後どう接するべきか、バスカービルのリーダー　キミに、意見を求めたいと言ってきた」

「俺の意見なんか　文の価値もないと思うがな　何て書いてあるんだ」

「うん　まず　サードは悪人ではない　と書いてあるんだ　少なくともイギリス政府にとってはね

「悪人では、ない？　？　かなめを使ってアリアたちを攻撃した、アイツがか？」

「キミのミクロな視点から見れば明らかに悪人だろう。だが、マクロな視点で見ると――彼は善人にも見えるんだ」

「……」

なんだか分からないという顔をする俺に、ワトソンは紙を指さして見せる。

「たとえば、ここ。ロスアラモスからの脱走後、ノーサードは世界各地でテロリスト集団・海賊・人身売買組織といった武装勢力を壊滅させ、無辜の民を救っている。1ペニーの報酬も取らずにね。当然、何か裏があるんだろうと思って調査機関が入念に探ったんだが、その裏が見当たらない。つまり、無償なんだ。彼の目立った戦闘行為は」

「物騒なチャリティーもあったもんだぜ」

と、俺は腕組みする。

ノーサード……あんなにガラの悪いヤツなのに。ベタな言い方をすりゃ、正義の味方やってんのか。だが、それなら何で俺たちに手を出してくるんだ。

俺とかアリアとか、白雪、理子、レキは「悪の武装勢力」なのかよ。

いやまあ、バスカービルの女子どもの凶暴性を考えると100%の否定はできないのが悲しいところではあるか。

「こういうタイプの怪人は古くからいる。武力を以て、力なき人々を独善的に救って回る人間だ。その際たいてい、法は無視される」

そう言われて、俺の頭には……

アメリカンヒーローや、時代劇のサムライなんかが思い浮かんでしまう

続けて、ある特定の人物を思い出してしまい──頭を振って打ち消した所で、

「きみの姉上も、その傾向があるよね」

と、ワトソンにハッキリ言われてしまった

姉──正確には兄なんだが、カナ──カナも、そのケがあった

カナは武偵としての活動をする中で、貧しい人からは金を受け取らなかったのだか──

それは実は、非推奨行為なのだ。業界の適正報酬価格に悪影響を与えるのかどうとかの、大人の事情で

あまり繰り返すと武偵庁に告発される事もあるのだが、カナはそんな事お構いなし

「じゃあ、報酬にオニギリでももらおうかしら」とか言って、本当にオニギリ1個で武装立て籠もり犯から貧乏な家族を救ったりしてたからな

「シーサードとカナは、気性に大きな違いがあるものの……どこか似た、怪人物なんだ

キミはカナを尊敬してるらしいから、認めたくないかもしれないけどね」

というワトソンに

俺は、言葉にできない部分でどこか納得してしまっていた

最初から、何となく気づいてはいたのだ。性格はバラバラだが、シーサード、かなめ、

カナ。そして俺の、部分的な人道性にはな

「アメリカやイギリスは、ソーサードのターゲットが命に合致する場合、仕事を依頼する形を取り、報酬として武器やそのメンテナンスを提供してもいるらしい。首に鎖を付けられない猛獣だが、猛獣として餌を与えている、ってことだね。だから今では、彼の活動の純粋性は大国の思惑により失われているとも言えるよ。さて、これらの話からキミは、ソーサードの善悪をどう考える？」

真横から訊いてくるワトソンに、俺はしばらく考えてから——

「俺の見立てでは簡単だ」

ごくシンプルな意見を述べさせてもらう事にする。

「善悪なんて時と場合によるものだ。たとえば戦ってる者のどっちが正しいかなんて、どっちのサイドから物を見るかによって異なる。そんな事は中学生でも理解できるさ」

「じゃあ、彼は善でも悪でもないと見るのかい」

「そうだ。だが——無法者だ」

ここは明確に告げた俺の目を、ワトソンは真剣に覗き込んでいる。

「また日本に現れて違法行為に及ぶようなら、逮捕する。それだけだ。それが武偵の仕事だからな」

と言う俺に、ワトソンは頷いた。

「じゃあ、極東戦役についてはどうしよう？」

そういや、そっちもあったか。

だが、それも俺の中ではとっくに結論が出てる

「……上海は、ジーサードを師団に引き入れろ」って言ってたし、その戦略は分からないでもないけどな。それはヤツが交渉、対話に応じるなら、って条件つきでの話だ」

「じゃあ、ジーサードの出方次第では――」

「武力しかないだろ。ココやアリアには平和ボケってバカにされたが、話の通じない人間に何度も話しかけるほど、日本人の頭もお花畑じゃないぜ」

と、俺が啖呵を切った時、ガタッ

「勝てないよ、お兄ちゃんには」

俺とワトソンがひっくり返ってしまう事に、4月に俺とアリアの命を救ってくれた防弾跳び箱の中から――

「か、かなめっ」

が、現れた

いたのか。ずっと

――思いっきり、マズい会話を聞かれちまったな。

口をパクパクさせて俺の隣に隠れたワトソンをスルーしつつ、スパッツ姿のかなめが、

跳び箱に腰掛ける

「サードは強いの　彼は人工天才の完成形　もう、人間の領域にはいない」

聞かれてしまった事は仕方なかったし　かなめの目は真剣だ

ので、俺は　心かなめに向き直る

「ジーサードは——頭が失敗作なんだろ　そのくらいは俺らだって調べてる　というか、人間じゃなきゃ何なんだよ」

「超人だよ」

きし

と、跳び箱を鳴らして、かなめが言う

「戦って勝てる相手じゃないの　HSSを以てしても、超能力を以てしても　そして自分より強い者に逆らうのは、最も非合理的なことだよ　お兄ちゃん」

そんな脅し文句は、今までの日々でも何度か聞いてきたか

ンオ・西川での記憶がある俺には、笑い飛ばせない

——ヤツは、強いんだろう　本当に　それは感じ取れてる

彼我の戦力ぐらい分からなきゃ、長生きできないからな　武偵は

「お兄ちゃん、サードと戦わないで　彼は強い　そして、正しいの　彼には2つの願いがあって・　あたしは、その両方を叶えたい」

「2つの、願い……？」

深海色をしたかなめの瞳に、ふと悲しげなものがよぎったのを――

つい、聞き逃してしまう

「1つは　彼は、教育係だったサラ博士の教えを守って　悪に虐げられている弱者を救おうと戦ってるの　強大な力を見せつけて、紛争の抑止力にもなろうとしてる　それが人間兵器の存在理由だと信じてるの」

「だが　ヤツはお前の事だって殺しかねないヤツなんだろ？」

「彼のそばにいるって事は、彼を知るって事　それは時に、彼の足を引っ張りかねない　そうなればあたしは犠牲になってもいい　サードとサラ博士の理念のために　そう誓って、彼についていったからね」

と、言うかなめの声からは、強い忠誠心が感じられる

これは　あまり良くない状態だな

命も惜しくないレベルの忠誠心は、簡単には解けない　その命の遣り取り　殺し合いでもしない限り　忠誠とは、信仰のようなものなのだ

「それにロスアラモスの脱走に始まって、あたしは何度もサードに命を救われてるしね　彼の部下はみんな、サードのためになら死ねる覚悟があるんだよ」

胸に手をあてて、そう言うかなめに

「キミは――彼を愛しているのか」

黙っていたワトソンが、いかにも女子らしい事を聞いた

だが、かなめは首を横に振る。

「そんな関係じゃないよ。それに　　彼が愛する女性は1人しかいない」

「誰（だれ）だい、その女性は」

敵に恋人がいるなら、利用の仕方もあるので

武偵の習性に倣って、ワトソンが条件反射的に問いかけた

「さっき言った、教育係のサラ博士だよ　サードが11歳の時、ハーバード大学医学部からロスアラモスに来た人で　　研究所でたった1人、サードに優しく接してくれた人。彼女は人工天才による紛争抑止力を、純粋に信じてた」

そう言ってかなめは、新しい武偵手帳を出し、中から1枚の写真を出した

そこには　　白衣を着た、穏やかな笑顔の白人女性が写っている

画家が見たら絵にせずにはいられないような、美人だ　知的そうな　十歳ほどの女だが、その瞳からは少女のようにピュアなものも感じる

自分も彼女に会った事があるのか、かなめは思い出すようにうっとり写真を眺めている

「どこにいるんだい、彼女は」

さっそく探りを入れたワトソンに、

「――もう、この世にはいないよ」

かなめが、答えた。

「サードの訓練中に事故が起きて、研究所で亡くなったの。サードはそれを自分のせいだって思いこんで……その時から、人が変わったようになった。ロスアラモスから脱走したのも、その頃だよ」

という話に、ワトソンは、深く恥じ入るような顔をした。

「済まなかった。謝罪する。この場にいない者のプライベートについて、ボクは少し聞きたがりすぎたようだよ」

まあ、今のはワトソンが聞いた事もあるが――

かなめも、色々喋る事で俺たちにジーサードへの理解を促そうとしたのだろう。衝突を避けるために。

「ジーサードには2つの願いがある……って言ってたな。もう1つは何だ」

今なら、かなめが他にもある程度までヤツの事を話してくれそうな気がする。

そう思って、俺が更に尋ねると――

――返ってきた答えは、ある程度どころじゃなく、核心だった。

「イロカネの力を手に入れる事」

……イロカネ……。シャーロックがイ・ウーで研究してた、あの金属か

シャーロックの言葉を借りれば、

あらゆる超能力が児戯に思えるような超常の力を、人間に与える物質

あれを探してるのか　ジーサードは

サードはイロカネ関係の事を聞きつけると……調べたなら知ってるよね　心が、普通の状態じゃなくなるの。それが昔は怖かったけど　お兄ちゃんに会ってから、理解できるようになったよ」

俺に　会ってから？」

「人を愛する気持ち　それは絶対、正しいものだから　あたしはサードを支えたい

彼に、イロカネを与えてあげたい　彼の、愛のために

と、かなめは少し不可解な発言をする

「だからお兄ちゃん、サードと戦わないで　サードは強い　そして——正しい　戦うのは非合理的なんだよ。分かってくれる、よね　？」

最後は声を震わせて言った、かなめは

ジーサードに忠誠を誓い、また、何かしらの理由によって同情もしている感じだ

そのジーサードと　自分が兄と慕う俺を、戦わせたくない

その一心なんだろう。今は。

「ジーサード……」

お前は何をしようとしてるんだ。イロカネを使って。

そして―ヤツが俺たちに手を出してきた理由も、その辺にあるんだろう。

あれは―アリアの体内にも埋まってるからな。手術でも摘出できない、心臓付近に。

そうなると、かなめには悪いが……

やはり、あまり仲良く出来る相手じゃなさそうだ。

「人間ってのは非合理的なんだ、かなめ。俺も超人なんかと戦りたくはないが、ヤツの出方次第じゃ勝敗度外視にならざるを得ない」

と、俺が対決の可能性を残した答え方をすると――

　ぴりっ。

体育倉庫に緊張感が走った。

俯いて呟くかなめが、ワトソンの方を鋭く見ている。

「そう」

「何をするつもりだ、かなめ」

「それなら。ここでちょっと不慮の事故が起きるんだよ、お兄ちゃん。まずワトソンが負傷して、お兄ちゃんがＨＳＳ化できなくなる。お兄ちゃんも手足が折られて、戦えなくなる。でも安心して。お兄ちゃんの看護は、あたしが付きっきりでしてあげるから」

スニーカーの足で、倉庫の床に立ったかなめは

両手の指をカギ爪のように曲げている。

「　」

素手で、引き裂くつもりだ　ワトソンの　ーかなめの視線から判断して、顔面を

ピン

という音に振り向くと　マットの上にしゃがんだワトソンが、刃渡り2センチ　程の小さな折りたたみナイフを指に挟んで構えている

「お、おい。よせッ」

こっちも鋭い目になっているワトソンを、俺は制止しようとする

刃物を隠し持ってやがったか　今日に限っては校則違反なのに、どこに・・クリップが隠れてる　口腔か」それかもっと奥に飲んでたんだな

さすが全身武器、西洋忍者だ

「ボクだって不本意だ　ジーフォース──遠山かなめは師団にとって戦略　の重要人物傷つけたくはない　だが、物事には優先順位というものがある　この状況ではボク自身の、そしてキミ自身の安全を優先すべきだ」

瞬時に合理的な判断を下したワトソンは、俺にも戦えと暗に言っている。

睨み合う2人の間で──

俺はポケットに手を入れ、対かなめ用に持っていた秘密兵器を準備する

その時まさに天佑と言うべきタイミングで、校内放送の音声が聞こえてきた。

「全生徒に連絡します。ただ今より、第2部の準備に移ってください」——

さっきのダメっぷりからは想像もできない　中空知の美声だ

この隙を狙い　俺は——

「　２人とも、そこまでにしとけ　今の話は、この場ですぐ結論を出せる問題じゃない

ほら　体育祭に戻るぞ　そっちの方が優先事項だ　遅刻したら蘭豹にボコられてケンカもできない体にされちまうんだからな」

そう宥めるように言い、「でも」と言うワトソンのナイフを摘み取って、「でも」と言うかなめの口に秘密兵器というかキャラメルをポンと放り込む

「……あむ　む　ちゅっ　……んう、ちゅっ……」

と口をもぐもぐさせ始めたかなめの中では

急遽、キャラメルの方がケンカより優先される事になったらしい

コイツはなぜか、キャラメルが異常に好きだからな

俺は、ふにゅう、と顔つきが穏やかになったかなめの両肩を掴んで方向転換させ——

何とかワトソンから引き離し、体育倉庫から押し出すのだった

「……よかった……」

一触即発の空間から、なんとか生還できたぞ　１人も傷つけず

アリアに追い回される際、ももまんを囮にして逃げる技の応用が利いたな

人間、大事なのは経験と応用力って事か　ちょっとだけ感謝するぜ、アリアさんよ

——体育祭・第2部は、夕方5時からスタートとなる。

これは都教委、つまり公務員が5時までしか働かないのを逆手に取ってのことだ

お偉方を帰した後に行われる、この第2部こそが本番

監視つき体育祭で不満が溜まっている生徒たちに対し、ガス抜き・盛り上げ施策として開催されるのが——男子競技「実弾サバゲー」と、女子競技「水中騎馬戦」

（競技名の時点で泣きたくなるよ　どっちも

なお、それら2競技は第1部の紅組・白組に分かれたままで行われ、勝つと1万点入るさっき俺がチマチマ採点した得点は一体なんの意味があったんでしょうかね？

「実弾サバイバルゲーム」に参加の全男子は、各自、所定位置について下さい」

中空知に罪はないが、アナウンスが恨めしいぜ

男子競技の「実弾サバゲー」とは読んで字のごとく、実弾アリのバトルロワイヤルで、もうほとんど戦争である

これはエアガンで行われるサバイバルゲームとは違い、防弾制服に弾が何発当たっても戦闘を継続していい　失格となるのは、背中が地面についた時だけ。

つまり格闘技を併用する事で素早く敵を失格にできるので、近接戦の祭典となる

昔は徒手格闘や近接拳銃戦などの大会が学校中で行われてたのだが、それらを第2部でコッソリ一気に消化するため、統合されてこうなったらしい

――また、水中騎馬戦に参加の全女子は、所定のプールへ移動して下さい

――女子競技の『水中騎馬戦』も、その統合パターンだ

元々、武偵高の騎馬戦は殴る蹴る有り・銃有り

体育祭が監視されるようになる原因ともなった、ケガ人出まくりの競技だった

また体育祭には寒中水泳大会もあったのだが、これも児童虐待がどうのとかいう理由でNG

これら禁止競技2つを組み合わせたのが――水中騎馬戦である

水着の女子がプールで騎馬を組み、きゃいきゃいハチマキを取り合う　俺にとっては想像すら危険を伴う競技なのに

よりによって俺は、教務科からそのセコンド役を命じられているのだ

本来、さすがの武偵高とはいえプールの授業は男女別なのだが　騎馬戦では各チームから1人ずつセコンド、つまり軍師が徴兵される決まりがある

で、バスカービルの女子どもに、「セコンドはお前がやるんだよなァ」とそれぞれ聞いたところ、

「キンジあんた気でもあるの？　強襲科で戦わない女子なんていないわよ」

「私が選手として出ればキンちゃんが軍師になって、いい所を見せられるかも……！」

「やだやだやだ出る出るぅーるっ——！　理子こういうの大好きなのぉ　！」

「皆さんが戦うので、私も戦います」

と、皆さん好戦的　戦うと言って譲らない

こういう場合どうなるんでしょう、と教務科に電話したら、

くだらん事で電話してくんなや！　ほんならお前がセコンドやれや！

運の悪さに定評のある俺は、ちょうど直前　の合コンでぼっち化したらしく不機嫌だった蘭豹にそのような勅命を下されてしまったのだ

〔どうせなら実弾サバゲーの方がマシだったぜ

そっちなら、不知火あたりに頼んで軽く撃ってもらって、わざと倒れてリタイアすれば良かったんだからな。

女子更衣室は当然使えないので、用具室で海パン姿となり……1・2年合同の水中騎馬戦が行われるとでかい屋内プール、そのプールサイドに恐る恐る闖入した俺を、

「うわ、ウワサ通り来た　たらし」

「ワトソン君は許せるけど、たらしはキモい」

「たらし伝説に新たな1ページだね」

などと、水着姿の2年女子の一部が毛虫を見るような目で見てくる。

チクショウ、俺だって好きで来てるんじゃねーんだよ。

—うう—

広大なプールサイドが、見渡す限り、女子、女子、女子だらけ。

しかも今日、身につけてるのは1枚または上下2枚の水着だけ。ハダカも同然。

まるでお花畑だ。

で、その花にアレルギーを起こす体質の俺は早くも逃げ腰。

壁に背をつけて怯えてる状態だ。

俺はヒスらないために他の本能を敢えて刺激しようと、先日こういう非常時に備えて暗記した、風魔がバイトしてる中華レストラン・新華城のメニューを暗唱し始めた。

　白湯麺、麻辣麺、陳皮……

ああ、身を隠すトーチカが欲しい。切実に。

「よーしおまえら！　準備体操始めろやノー！」

競泳水着姿の蘭豹が、ホイッスルをくわえ——

プール側、つまり俺に背を向けていた女子たちは、

「屈伸運動ォーー！」

ピッ、ピッ、ピ

「な　何やってんだお前ら！　酢豚！

せっかく人が青椒肉絲あたりまで暗唱してたのに！　本気でキレるぞ！

今の光景に記憶がフッ飛んでしまった俺は、歯ぎしりしつつ前菜からやり直す

「だ　大丈夫かトォヤマ　どうしてそんな鬼のような顔をしてブツブツ呟いてるんだい

全身から変な汗が出てるぞ」

「桃包、芒果布丁、ワトソンッ　！」

通りがかったジャージ姿のワトソンを　がしっ、と掴んで引き留め、視界を塞ぐ盾にする　コイツはさっき、かなめから俺の陰に隠れたからな　貸しを返してもらうぜ

ワトソンは転装生　つまり男子という事で学校に通っているのだが、俺と似たような事情により水上騎馬戦に参加させられていた

だが教務科にうまく根回ししたらしく、仕事は救護係　水着にならずに済んでいる

いいから、しばらくこうしていてくれ／　そばにいてくれ

「──えっ？　う、うん　わ、分かったよ、トオヤマ・　」

俺は中腰になりワトソンの背に額を付け、アキレス腱伸ばしやら開脚ストレッチやらをやっているらしい女子たちの光景から身を守る

なお、ワトソンはさっき毛虫扱いだった俺とは異なり、女子にモテまくっていた。

なんで美少年と俺とではこうも扱いが違うのか　人間は見た目が全てなのかよ？

などと今女子に対する怨嗟に充ちた時間を過ごし、ようやく準備体操が終わったらしいので……ソーッと、ワトソンの脇からプールサイドを見る。

「……」

だ、大丈夫だ。みんな普通にやってる。

いや、これだって全然大丈夫じゃないんだが――女子ならではの柔軟さでとんでもないポーズを次々と見せつけられかねない、さっきの危機的状況は脱した。

「だが、いつ何時、どんなハプニングが起きるか分からんぞ……」

と、警戒心ハリハリで身構える俺に、

「遠山君。非殺傷弾とはいえ水中騎馬戦では銃を使うので、これを使っていいですよ」

うんしょ、うんしょ、と。

武偵高の良心、探偵科教諭の高天原先生が俺に運んできてくれた物は――

警視・特殊部隊ご用達の、大型防弾盾――。

「あ、ありがとうございます……！」

俺は武偵高の校章が入ったクソ重い盾をプールサイドにズシンと置いて、ハハ、と片膝をついて身を隠す。

まさに、地獄で仏！　盾の扱い方を強襲科で習っててよかったぜ。

これなら屈んでいる限り、完全な視界のシャットアウトが可能。必要な時だけスリット

からプールを見ればいい　今後はずっと、俺のように隠れていよう

と、横紐のスリットに目を寄せると、

「水着がズレちゃった女子が恥ずかしがると思うし、ね　盾は後で装備科に返却してね」

盾の反対側からスリットに目を寄せてきた高天原先生が、ウインクした。

そして彼女が背を伸ばし、回れ右する動作で

大質量のせいで体の回転から0.5秒遅れて揺れ、花柄ビキニからこぼれそうになる

胸　単純に大きいだけではなく形状もまろやかな美しい腰が至近距離から見え——

・・ドクッ・・・。

俺の血流が危険域を掠めた

おい俺！　落ち着けって！　年上に弱いのは知ってたが、ここでヒステリアモードとかガチでシャレにならん事が分かってんのか！？　ていうか先生　仏かと思ったがあんたも鬼か　そんなに着やせするタイプだったとは知りませんでしたよ・・。

などと慌てる俺はさておき、プールサイドは試合前の作戦タイムを迎え——

女子たちは試しに騎馬を組んだり、会議したりしている

騎馬はチームでだろうが部活でだろうが好きに組んでいいのだが、バスカービルの女子どもはちょうど4人なのでそれで組むらしい

で、その4人が……防弾盾ごと、俺の前にやってきた……そ

「……う！？」

スリットから見えたアリアが……どうしてだかビキニを着ているのを見て、またなぜか一瞬で俺の血圧が高くなる。

目を細め、瞼で自らの視界を制限していると——

「やらしい目ね……元々あんた目つき悪いんだから、やめなさいよそれ」

などと、ちょっと赤くなって腰に手を当ててるアリアにそれすら禁止されてしまった。

おかげで、胸の下部と腰回りに短いフリルをあしらったセパレート水着を着たアリアのちっこかわいい姿を直視せざるを得なくなる。

水着は薄い赤紫色……というか布そのものが薄い。……なんかあれこれ透けて見えちまいそうな、戦慄の光景だ……！

「そ、そんな風穴が開くようにジロジロ見ない！……目を見開くのも禁止！」

どうすりゃいいんですか。

というか機嫌悪いな、アリア。……泳げないからだなこれ。

がん、と裸足でサッカーボールキックしてきたアリアのせいで首の向きがずれ、今度は、

「キンちゃん……こ、これ、恥ずかしいけど……キンちゃんのためにって、一念発起して、着てみたの」

ぐい、とスリットに顔を寄せてくる白雪（しらゆき）の方を向かされてしまった。

「うおォッ」

前屈（まえかが）みになった白雪が一瞬スッ裸に見えて目玉が飛び出しかけたが——それは、白雪が着用している水着の面積がやたら小さいせいだった。

いわゆるマイクロビキニというやつ。武偵高では水着は自由とされているが、何をどう間違えたらそれが俺のためになるってんだ。真逆じゃねえか！

俺がプルプル震えながら絶句していると、

「どうですかキンちゃん様、お気に召しませんでしたか！？……は、はしたないかな、やめようかな……うん、やめようね、き、着替えます、着替える、今すぐここでぇ！」

ぐい、と紐ビキニを自ら掴んでスリットに詰め寄ってくる白雪から、

「いいから、いいから！　前屈みでアップになるな！」

俺は盾の角度を変えて緊急避難する。

しかし避難が避難にならない。お次は理子が正面だ。

「違うよねぇー、キーくんはマニアックなのがグッとくるんだよねーっ。ほれほれぇ、旧スクだぞーっ」

盾の前でしゃがんでニヤニヤしてる理子は、理子的ゲームにしか現存しないであろう、古い型のスクール水着を着てる

それは要するに、紺色をしたワンピースの水着だ

布面積が大きく、肌の露出は比較的少ない、俺（おれ）にとっては一見安全なデザイン。

胸には　２　＼　みねりこ」と、なぜか平仮名で書かれた白い布が縫（ぬ）いつけられており

　ヘソ下には　なんだ、あれは？　水着内に入った水を抜くための機構だろうか？

片手ぐらいなら下から　へ突っ込めそうなスキマがあって、極めて短いスカートのような構造をしているぞ　そう思うと妙にいやらしいから、そうは思わないようにするか

「おーおー、水抜きにご注目ですか　紳士的ですなぁ」

ぐいっ、と理子がそこを引っ張ってヘソを見せてきたので

「おっおっおい、よせ！」

「んー？」

俺が慌（あわ）てると、理子はさらに、くいーっ。

上から覗（のぞ）いていたアリアが真っ赤になるぐらいそこを広げ、ついでに下のパンツ部分も連動して引っ張られ始めたので――

「――そうはいくかっ」

俺は後退せずむしろ前に出て、がんっ

盾で突き飛ばしてやると、理子は大股（また）おっぴろげて真後ろにひっくり返った　ざまあ

理子から改めて盾を引き、ズルズル後ずさると　　視界には、

2-A
みね

「」

アホとアホやる俺を冷たく見下ろす、レキの水着姿が入ってきた。

髪の色と似た青と緑の中間みたいな色の、これもビキニだ。

アリア以上・理子以下のプロポーションをしたレキは

これはこれで、等身大の女子らしい魅力がある。

たとえば俺が、そんなことは自発的には決してしないが――白雪や理子と市民プールに行ったら、世間の男子から「不釣り合いだ」と空きカンを投げられるだろう。この２人は残念極まる人格さえバレなければ、男ウケする外見をしてるからな。なおアリアと一緒に行ったら「女子小学生を連れ回す不審者がいます」と通報される恐れがある。

「」

だが、ここでボケーっとしてるレキは……

なんというか、俺がプールで連れていてもおかしくない感じの女子なのだ。

同い年か１つ下くらいの、普通の女子に見える。

そう考えると、脳内にレキと２人でプールに行って過ごす想像が頭をよぎり――

「なに　なに。なにキンジ。あんたレキがいいわけ？　ジロジロ見ちゃって！」

がす！

背の後ろ側に回ったアリアが、俺のケツを蹴ってきた

「ちっ違うッ！　俺はコイツの見た目が普通っぽかったから　」

「へぇーそうなの！　普通っぽい！　子だと　他の子より　長々と　観察　す！
る！　の！　ね！　ッ！！」

なぜか急にヒートアップするアリアは！　。1回につき1回蹴ってくるので、俺は盾をアリアの方に向け直す

――ナメるなよ？　この盾は日本製

防弾レベルNIJⅢ＋、ライフル弾だって跳ね返す世界最強の盾なんだ

――バカキンジの！　好みは！　ふっつーの！　子！

がん！　げし！　がす！　がすっ！

　って　おい、へ、凹んできてるぞ　最強の盾が！　防弾盾を蹴りで凹ますとか、ありえんだろ！　どこまで本格的に人間やめたキック力してんだよ！

「だから違うっつってるだろ！　コイツは全然普通じゃない、殺し屋もビックリのスナイパーで、オオカミ飼ってる不思議少女だろうが！」

といったら、けりっ

レキにもケツを蹴られた

　もうこれ、イジメだろ　泣くぞ？

結局のところ作戦会議は集団コントみたいな事をやってる間に終了してしまったので、

俺は何のためにセコンドとして来たのだろうと思いつつも——

「がんばれ　死者が出ない程度に」

と、役にもつかない作戦指示をして、騎上アリアを搭載した白雪レ騎馬を見送った

なおアリアが上に乗っているのは最軽量なのと、1人だけ泳げないからである

さて——

この騎馬戦、基本ルールは通常の騎馬戦と同じ

騎手、バスカービルでいえばアリアが巻いてる白いハチマキが取られるか、落馬するか、騎馬が崩れるかしたら……1騎討ち死に　という普通のルールだ　それで殲滅戦をやる

水深1mのプールで水着でやるって事と、殴る蹴るがアリなのと、

「使用弾は非殺傷弾、粘着弾、潤滑弾や！　弾倉はプールの底に仰山バラ撒いといたで！　拾って使えや！　——1年進水！　続いて、2年進水！

　銃がアリな上が、普通じゃない武偵高の特別ルールである

蘭豹の号令に従って、専用階段を降り　これからオマハ・ビーチと化すプールへと、女子の騎馬隊がじゃぼじゃぼ入っていく　きゃーつめたーい、なんて黄色い声が[illegible]りだ

「お……おっ」

や、やった……！

水に入ってくれたおかげで、騎馬の身体がほとんど見えなくなったぞ

騎手の騎士は見えるが、これは俺得な展開だ

しかも連中が羞恥心に乏しいのと俺の存在感が希薄なのが相まって、俺がいる事はほぼ無視されてる空気　これも有難い

ヘタに恥じらうような仕草をされると、なんでか逆にヒスりやすいからな　経験上

――ドンッ、パパパパパンッ――！

一方、屋内プール棟の外からは銃声が聞こえ始めた

始まったんだな　地獄の実弾サバイバルゲーム。こっちはこっちで俺にとっちゃ地獄の水中騎馬戦だよ　陸も地獄　海も地獄　ほんと、ここはノルマンディーだぜ

「両軍突撃ィー！　撃てェー！　どんどん殺せェー！

銃声を聞くと興奮するタチの蘭豹は、嬉しそうに大型拳銃の実弾号砲をブッ放してる

ほんと、ああいうヤツがいるから戦争は無くならないんだな

「あ、あわ、あわわわっ　ぶく・・・・！」

通信科や情報科の弱々しい女子で組まれた、中空知を乗せた騎馬は・・・戦う前に崩れて沈み、ハチマキだけが浮いてきた。

何もしてないのに死んだ中空知騎をよそに、紅白の騎馬たちはサブザブと接近し

バスバスッ　わぁーー

などと銃声や掛け声を交錯させ、激突し始めた

非殺傷弾で騎士役が撃ち落とされたり、粘着弾で2騎くっついてしまったり、潤滑剤でスルスルになって馬が崩れたり——荒れてきたぞ、戦場が。いろんな意味で

「それそれ！　それそれ！　やれやれーッ！」

BGMで流されてる「ワルキューレの騎行」に後陣で合唱をあてるのは——

出たぞ特殊捜査研究科、お色気軍団。その女子たちが組む騎馬である

戦闘力が無い彼女らは、歌で仲間の戦意高揚を図る係らしい

「う、うわ……！」

スリットから少しそっちを見てしまった俺は、慌てて手で目を守った

選りすぐりの美少女だけで構成された騎馬。それが水着なんだから、危険すぎるぜ

「わはははっ！　圧倒的じゃないか我が軍は！」

アリアのものではないアニメ声に振り向くと、プールの方では紅組がかなり優勢だ

白組の馬を銃で追い立てて隅に引き込んでは、複数の馬で囲んで各個撃破している

「——あの連携力は……！」

と思って見ると、やっぱりアニメーション同好会のメンバーだ

あの同好会は部でもないのに、クラス・学年を超えた組織力がハンパないからな

睨んでたのは会長の錦揃な文。子供に化けて潜入捜査するのが得意な、諜報科の2年だ

「ほら遠山君！　ちゃんとセコンドして！」

高天原先生がメガホンで言ってくるので、

「ぶ、武偵憲章1条！　仲間を信じ仲間を助けよ！」

俺は盾の裏から、指示ともいえぬ指示をする

その際、スリットから見えたのは——

「くっ　このぉ！　風穴——って、弾！　弾弾！　弾持ってきなさーい！」

数的不利に陥った白組で、しかも弾切れを起こしたらしいアリアが3騎もの2年女子に取り囲まれている姿だった　英語混じりで叫んでる　あれは慌ててる時のクセだぞ

アリアは背、すなわち頭の位置が低いので、ハチマキを狙われると不利なのだ

強襲科の騎士がアリアを徒手で攻め、狙撃科の騎士が撃ち、装備科のは後ろから水着を引っ張って体勢を崩しにかかってる

「あっ——」

ついに、アリアが強襲科の騎士に白いハチマキを掴まれた時——

敵の背後に、潜水してた白組の騎馬が浮上し、さっ　と、赤いハチマキを奪い取った

「——かなめ！」

騎士は、かなめだ　1年の騎馬だぞ　それが2年をやったのか　大手柄だな

かなめは今風のスクール水着の胸元から、弾倉を2つ出す

それをアリアに無言でパスしつつ、

「もう1騎！」

諜報科の騎士に飛びかかり、ハチマキを奪ってる。大したもんだな

さらに敵騎馬を踏み台にして自分の馬まで跳躍して戻ったかなめだが。

豊和M1500・ヘビーバレルを構えた狙撃科騎士が、それを先読みしていた。

ハッ、と振り返ったかなめが、被弾を覚悟して両腕で顔を守る

だが

「形勢逆転よ！」

——パスッ！　びしゃしゃっ！

もらった弾倉を瞬時に再装填したアリアが、二丁拳銃の潤滑弾で敵の騎馬をトロトロにする。それで、スルッ、ざぶん

「キャー！」

崩れてしまった馬から、狙撃手が以下へ滑り落ちた

彼女が放り上げてしまった狙撃銃を、アリアは　チェイン

潤滑弾が飛び散らない程度の角度で掠めるように撃ち、かなめの手元に落とさせた

「ありがとう、アリア。助かる」

「あたしも助かったわ。ありがと、かなめ」

「じゃあ、もう一仕事だね」

「そうみたいね」

と、アリアとかなめは　背中合わせになった

さらに2人を取り囲むようにコッソリ迫っていた何騎もの敵から、お互いの背後を守りつつ戦う体勢だ

「そっちが先に沈んだら、キャラメル箱買いしてね。アリア」

「あんたが先に沈んだら、ももまんタワーを献上しなさい」

ニヤリ、と同時に笑う2人を見て　俺は目を丸くする

〈あれは、まるで

アリアと俺、みたいな息の合い方だ

気が合う2人、という感じじゃない　俺とアリアだって、何かにつけ意見は合わないだが、組んで戦うと息が合う。これは理屈で説明できない、相性みたいなものだ

その呼吸が、合うのだ　俺・アリア、そして、かなめ・アリアのコンビは　同様に背闘するアリア・かなめを包囲する敵陣、そのさらに外側から

「――私に続け！」

ジャンヌを切り込み隊長にした、白組数騎が突撃してきた

陣形は∧字形の、偃月（えんげつ）陣　兵力が少ない時に用いられる、攻撃力を一点に集中させて敵

の隊列を引き締める陣形だ

そんな物どこで売ってるんだとツッコみたくなる、でっかい白組の紋章が描かれた白いハイレグ水着を着て拳銃を撃つジャンヌは　まるで初代ジャンヌ・ダルク気取り

「我らが精兵とて、恐れるな！　天の加護は我が軍にあり！！」

うわぁー、ノリノリで戦ってるよ

キリッ、キリキリッとしたキメ顔を、3秒に1回ぐらいしてる

ていうか　お前は偉大なご先祖様のマネをしてるつもりかもしれんが、やってる事はあられもない水上騎馬戦だからな？　そこんとこ忘れるなよ？

そんなジャンヌの鼓舞により、1年女子たちがパワーアップした事もあり

水上騎馬戦は「やらせはせんぞー！」などと叫びつつ沈められた錦揃を最後に、赤組が全滅、白組勝利となった。

乱戦になると理子がツーサイドアップのテールを水中でオッソン使って敵騎馬の水着を取るなどしてたが、あれはルール上アリだったのか？　まあどうでもいいけど。心底

で、無線に入った連絡によると男子の実弾サバゲーも白組が勝ったらしい

つまり第1部との合計得点は2088対886って　白組の優勝。

プールサイドでは白組女子がバンザイしてたよ。盾の裏で声しか聞いてないけど

俺的には勝敗なんかどうでもよく、こんな事でさえ勝ち負けにこだわるアリアの機嫌が損ねられなくて良かったという程度だ

なお、盾に隠れつつプールサイドから退散しようとしていた俺は紅組の女子に発見され、八つ当たりのターゲットにされた。「卑怯者！」「女たらし！」「むっつりスケベ！」とかどさくさに紛れて酷いこと言ってませんかあんたら　いやまあ、言われてもしょうがないような場所にいるんだけどさ　撃つのはやめようよ

というわけでペコペコになった盾を装備科に返却し、ビリビリする腕を押さえて、俺の体育祭は、第1部　第2部ともに終了したのだった。

こんだけ女子たちにイジメられた上、明日は水中騎馬戦のセコンドをやったという理由で男子に妬まれ、根掘り葉掘り聞かれるんだろう。いい事ないぜ　ほんと

勝利した白組の生徒には、賞品として教務科から1人1ダースの銃弾が与えられた

ていうか、1ダースって　弾倉1装填分にもならん

不機嫌なアリアなら5秒で無意味に撃ち尽くす数だぞ　何の罪も無いかわいそうな俺に向けて「目つきが気に入らない」とかどうでもいい理由で

しかも賞品の弾は安物　俺がもらった9ミリ弾なんか、Wolf WPAのMC　会社こそアメリカにあるが、ロシアの工場で製造されてる、品質がいいとは言えない弾だ

これの相場は1発14〜15円　普通の学校で賞品に出るという鉛筆1本の方がまだ高い

「薬莢、真鍮じゃなくて鉄だし」

と、呆れて見てたら、ちょっと錆があるし。さては弾薬庫で長年死蔵されてたのを廃棄するノリで出したな　こんなの使えるかっての。

銃弾にも鮮度がある！　って俺らに教育したのは教務科だろうが

正式な廃棄処分が面倒だったので弾を土に埋めて

俺は食べ物を求め、コンビニへ向かった

普通の学校なら食事は運動会の合間にとるものだが、武偵高では「戦闘中にメシを喰うのはイタリア軍だけや」という謎の児童虐待理論により体育祭の終了後となっている

つ聞きたい　いつ武偵高は軍人養成学校になったよ？

食べる場所は自由なので、制服に着替えた生徒たちが思い思いの場所で弁当を食べてる。

実弾サバゲーの戦後処理が行われてないので、空薬莢や弾がゴロゴロしてて硝煙の臭いが立ちこめてるが　まあいい

「空腹は最高のソース　腹が減ってりゃ、どこで何を食ってもうまいんだ」

という兄さんの格言を思い出しつつ、食糧を買おうとしたのだが……

「あれ！？　無い」

コンビニの弁当売り場に、弁当が無い

海苔弁の1つも無い　カップ麺やオニギリすら無い

どうやら今日は自炊派や通学生が、こぞって買いに来たらしい　俺が弾を込めてる間に

みんな売り切れちまったのだ

学食に行っても今は長蛇の列だろう　並んでる内に餓死しかねん

――仕方ない　バスカービルの弁当を分けてもらうか――

4人から托鉢すれば、1食分ぐらいは調達できるかもしれん

と、俺は携帯を取り出し――アリアに電話をかけ、

「おいアリア、どこだ　武偵憲章1条に従い、俺に食い物を分けろ」

食糧補給要請を行うと

「武偵憲章の悪用は禁止よ、ハイエナさん　あたしたちなら11区の廃車置き場にいるわ

かなめもいるから

バスカービルの皆は、かなめと一緒らしい

かなめがちょっと心配になった俺が、早足で向かった廃車置き場には――

強襲科・狙撃科の対テロ訓練や車輌科のカースタントみたいな実習で壊れた車が点在しており、その中や上でメシを食う生徒がけっこういた

そこをウロウロしてると……

「……おっ」

白と藍色で上下に塗り分けられたレトロなVolkswagen Transporter 1の開いたドアの前に、ハイマキがおすわりしてるぞ。

元はキャンピングカーだったらしい、その広い車内を覗き込むと……

「あっ、お兄ちゃん」

クルミ入りのキャラメルマフィンを持ったかなめが、リアシートに座っていた。

思ったより清潔なシートは可動式だったらしく、かなめ、アリア、白雪、理子、レキが丸く席についている。

既に武偵高のセーラー服に着替えており、俺の目当てでもある食事を広げてるな。

「……お前ら、リーダーの俺をハブるんじゃねえよ」

文句を垂れつつ、俺は下座っこについていた育ちの良い白雪の横が空いてたので、そこに腰を下ろした。

「キンジが道ばたに穴掘るとか命令してるから、声かけるにかけられなかったのよ」

「おかえりなさい、あなた」

「くっふふ　キーくんのお膝の上に、あとで理子りんが座りに行きますよ〜！」

そしてカロリーメイトをもぐもぐ食べてるレキは、無言でチラッと俺を見た。

4名4様のリアクションを全スルーした俺は、かなめとハスカービル女子が集まるこの

空間に、闘争の気配がない事を、一応、確認する。

（仲良く……やってるのか。

これは——体育祭で助け合って、女同士の友情みたいなものが育ったのかもしれないな。

誰とでも友達っぽい理子と、誰とでも友達っぽくないレキはいつも通りだが。

アリアは、かなめの隣に座ってる。

白雪も、かなめの口周りをハンカチで拭いてやるなどしてる。

まあ、白雪はそれと同時に『キンちゃん見て見て私の度量の広いところを』的な表情でチラッとこっちを見てくるんで鬱陶しいんだが。

「すっかり可愛がられてるぞ、かなめ」

かなめには……人を惹きつける、妙な力があるのかもしれないな。

俺も今じゃこうして、心配して様子を見に来ちまってるワケだしな。

「かなめとあたし達が同じテーブルについてるのが不思議、って顔してるわね。キンジ」

カンだけはいいアリアが、ツンツンした眦の目をネコっぽく細めて笑う。

「まあな。前は剣やら銃やらを向け合う仲だったワケだからな」

「ふふっ。あたし達、みんなそうだったじゃない」

「……まあ、それもそうだなぁ」

「それに、奇襲されたのは過去の事。ランバージャックで落とし前もつけたし、ケンカは

もう終了よ」

切り替え早いなーアリア

その切り替えの早さ、対・遠山キンジさんにも適用してくれませんかね

未だに5月の白雪の事とか6月の理子の事を、「あんたは女癖が悪い」とかグチグチ言うんだから、あなたは。

　ともあれ、女子たちの関係は好転しきったらしい

この件については一件落着、ってやつだな

「しかし、陸上競技場か　今日はあちこちごった返してるか、穴場を見つけたもんだな」

「ここには、かなめぇが呼んでくれたんだよ　自分の事を話すために」

アリアと共にハンバーガーやらポテトやらを広げていた理子か、俺とかなめを見る

「……自分の事？」

俺が聞き返すと、

「かなめは人工天才――ロスアラモスの研究所から逃げてきた、人間兵器」

アリアがそう言うので、俺は少し面食らう

――話したのか　自分の出自を

ワトソンはその辺の事をアリアたちと共有するかどうか、ハスカービルのリーダー――

俺に一任してくれたので、かなめのプライベートな事は話さなかったのだが

かなめの方を見ると、その深海色の瞳からは「ＨＳＳとかマズい事は言ってないから、安心して」というムードが以心伝心してくる。

「……どう思った、お前らは」

「ふーん、で？　って思ったわ。それ以上でも以下でもない。どこ出身の何者だろうと、あたし達にとって、かなめはかなめでしょ。そのほかに何を思えってのよ」

はむっ。

大きなハンバーガーを齧りながら、アリアが事も無げに言う。

白雪、理子、レキも、それに同意してる目つきだ。

「あたしは人間じゃない、って言うから、そこは否定しといたけどね。モノとして育てられようと――かなめはキンジに諭されてから、生き直そう、生まれ変わろうとしてる。そういう心を持つ者は、人間。決して、モノなんかじゃないわ」

などと、アリアは大ざっぱで大きなアリア的発言をしてる。

なんというか、こいつは……

こういう所は、器と人間が大きいな。背はちっちゃいのに。

アリアの言葉を聞き、ちょっと俯いて目に嬉し涙を浮かべてるかなめも……粗方察した。

ということは、ハスカービルの女子たちに歩み寄ろうと思ったんだろう。

「……一番大事なこと、まだ、言ってなかったんだけどね。みんなのこと知らなくて、

急襲した夜のこと」

俯いたかなめが、暫く

振り向いたアリアたちと俺に、かなめはしばらく黙ってから

「……ごめんなさい……」

ハッキリと、そう言った

「……ちゃんと謝ったか。偉いぞ、かなめ」

世の中、何でも謝れば済むワケじゃないが——

謝らないでいると人間関係は拗れたまま、大なり小なり蟠りを残すことになるからな

「——」

だが、かつての敵に謝られるなどというレア展開にアリアたちは困惑気味だ

お互い助けを求めるように、顔を見合わせている

「　私たちこそ、ごめんね　大人げなくランバージャックなんかして」

そんなとき頼りになるのは、やっぱり白雪。

6人も妹がいるだけあって、年下の扱いには慣れてる。

実は今日ね、私たちも　かなめに、手作りの贈り物を持ってきたの」

がさ、と、白雪はラ　ピングしたプレゼントを取り出す

「これ　キンちゃんも持ってるから、私も自分で同じの作って持ってるけど　アリアが

持ってるのよおそろいなんだよ　これを作ろうって発案したのもアリアなの」

「い、いわなくていいわよそんな事は」

赤くなって白雪に言うアリアの横で——

かなめは、その小さな包みを受け取った

「……くれるの……？」

周囲を見回すかなめに、うん、うんうん　みんな頷いてるな

かなめが、ガサガサとその小さな袋を開けると

「？……？」

なんか、中から……いかんとも形容しがたいモノが出てきたな

フカフカしたそれを持ったかなめが角度を変えた時、俺が携帯のストラップにしている

ヌイグルミ……その頭部らしき部分が見えた

「それはレオポンー……手作りレオポンですよー　みんなで分担して作ったから、キメラ・レオポンというレオポン亜種に仕上がりましたっ　ちなみに胴体を作ったのは理子りんでーっすうくおあっ……く……くぅ……鋏まれ……！」

と、勢いよくバンザイしてワーゲンバスの天井に手首をグキッとやり1人で悶絶してる理子が言った通り——

それは俺とアリア……と初耳だが白雪……が持っているUFOキャッチャーの景品、ネコ科

動物のヌイグルミ…　『レオポン』を、手作りで再現したものらしい

「頭は私が作ったの　しっぽがアリアで、足がレキさん作だよ」

という白雪の説明を受けて、改めてかなめ共々キメラ・レオポンを見回すと

白雪が作ったという頭はちょっとメスっぽい顔つきなものの、よく出来てる

胴体はヒラヒラした柄布を派手派手しく縫い合わせたパッチワークになっており、その原作無視っぷりがいかにも自由な理子らしい

レキが作ったという脚部はクソリアルで、後ろ足もネコ科動物らしく逆関節になってる

そこだけ精巧な剥製みたいだ　キモい

尻尾は　アルコールランプの芯みたいなただの白い紐　先端だけに、ほつれないよう玉みたいな布を縫いつけた包みがあるが　どうやらそれを縫った御方は生まれて初めて縫い物をしたらしいな　不器用さ丸出しだ　ていうか、せめて糸の色ぐらい地の色と合わせろよアリア　なんで赤とピンクの糸で縫うよ　自分の好きな色だろそれ

全体的には、ヒドい出来だ

そもそもこの個性的すぎる4人が合作した時点で、マトモな物が出来るハズがない

―でも

でも、心は、籠もってるな

4人は4人なりに、一生懸命作ったんだろう。

それは見た瞬間に伝わってきた　この鈍い俺にも

かなめにも……彼女たちの気持ちは、伝わるだろう

出来不出来じゃないからな、こういうものは

　りん、と……

レオポンの頭の上に付いた、小さな鈴を鳴らして――

かなめは嬉しそうに、大切そうに、キメラ・レオポンを抱きしめた

見れば……その目からは、さっき目に溜めていた嬉し涙がはらはらと零れていた

「……みんな……あ、ありがと……ありがとうっ……」

しゃくりあげてゆく、かなめは――

多分、こういう友達を持った事が無かったんだろうな

利害関係や社交辞令での仲間はいたのかもしれないが、損得抜きの、本当の友達……

それがいっぺんに４人も出来た事を、感じたのだ　かなめは、今

あんなに嬉し泣きしちゃって……

やっぱりこういう所は、年下だな　かわいいもんだよ

「う～キーくん！　この子、この子かわいいっ、理子にちょうだい　かなめかわいいよ　かなめ！　理子の妹にする――

アリア越しにかなめを胸に抱き寄せ、武藤と同じような事を言う理子は……お、お前、

さっきぶつけた右手首が通常曲がらない方に曲がってるけどそれは大丈夫なのか？

「ほら、かなめ。もう泣くなよ。武偵は易々と泣くな」

そもそも感情の振れ幅が大きく、よく泣くかなめに俺はそんな事を言うが——

まあ本音を言うと、今は、泣かせてでもいいと思ってる。それは、いい涙だから。

　グー、

そんないいムードに水を差す音が、俺の腹から鳴った。

忘れてた。腹が減ってるんだよ、俺は。それで食料の調達に来たんだった。

「えー、では、そろそろ俺に食糧をだな……」

と言うと、俺が来るまで弁当箱を開けずにいた慎み深い白雪が、天使の笑顔で俺の膝に紙ナプキンを広げてくれた。何をくれるのかな。

という俺のワクワク顔を見たアリアは、なぜかこっちを睨みつつ、べちゃ

ハンバーガーに挟まってたピクルス（嫌いらしい）を抜き取り、ナプキンに投げてきた。

ってめえ。

もらっといて何だが、人間がピクルスだけで生きていけると思ってんのか。

だが文句は言えん。

アリア、パンチングマシンで１００kgとか普通に出すし。

「キンちゃんどうぞ。これ、私が作ったの。各地から新鮮な素材を集めました」

一方、白雪（ゆき）が楚々（そそ）とした手つきでバスケットから取り出してきたのは

おお、サンドイッチか。

それも簡易に作ったものじゃない　ローストビーフ、スモークサーモン、アメリカン・クラブサンド、BLT、粒餡（つぶあん）マーガリンなど種類も豊富だ

「おお　ゆきちゃん、ほんと何でも作れるんだねぇ！」

自称サンドイッチ通の理子のお眼鏡（めがね）にもかなったらしく、身を乗り出してきてる

「女の子は料理ができないと立派な花嫁になれないからね　お仕事から帰った旦那さまを毎日おいしいお料理でお迎えするのが、大和撫子（なでしこ）の務めなんだよ」

勝ち誇るようなニコニコ顔の白雪になぜか注視されて言われたアリアは、

「ふんっ　料理なんてメイドが作るものでしょ　はむう」

そっぽを向いて腕組みし、ハンバーガーを頬張（ほおば）ってる。

よく見たら　なんだそれ　バンズにももまんが挟まってるぞ

も、ももまんバーガー　か？　まさか　いや、それは実在するらしい　ここに

「夫婦はそれぞれ自立して、好きな時に好きな物を食べればいいのよ　それか大人の男女記念日、バカンス、クリスマスのディナーは夫婦で作って食べるものだけどね」

などと欧米出身丸出しな事を言うミス・アリアは、ん　？

こっちもなぜか、白雪に勝ち誇るような表情をしてるぞ？

アリアにも、白雪にも、「我こそは勝者」的な余裕がある

お互いの大好論を語り合うその目つきは、双方ともに『それなり敗者』って感じだ

「アリア、将来いい人が見つかるといいね」

――にこにこ

「あんたこそ本性見られないように頑張って探しなさいよ、白雪」

――ニヤァ

「何だ……これ……？」

俺の額に、正体不明の汗が滲む

この2人の間で今まで何の戦いが起きていて、それがどう「双方勝利」の形で決着していたのか……蚊帳の外の俺には全く窺い知れない女の世界が、ここにある

その後――

アリアとレキは何やら仕事で、白雪は生徒会の用事で、理子は見たいアニメが放送かあるとかで、それぞれ帰っていき、

からんとしたワーゲンハスには、かなめと俺だけが残った

秋の日はつるべ落とし。辺りはすっかり暗くなってしまい、俺は武偵手帳に挟んでいたLEDライトを天井から下げて灯りにしている。

サンドイッチは理子に一部盗まれたが、代わりに俺の知らんアニメのキャラ弁を分けてもらったし、レキから供出を受けたカロリーメイトも食べた

それらで空腹から救われた俺は、ベンチみたいなシートに横になって見るともなく、窓から星を眺めている

リーリー　と、虫の声が静かに聞こえる中

俺と頭を寄せてＬ字になるような形で、かなめも別のシートに寝ころんでいる

「　お兄ちゃん、ちょっと慌てた感じだったね　ここに来た時」

「お前がアリアたちと一緒だって聞いたから、心配だったんだ」

そういえばあの時は

なんでだろう。やはり、凄く気がかりだったな　かなめの事が　空腹も忘れるほどに

「　お兄ちゃんが、あたしを　心配してくれた　」

かなめが何やら嬉しそうに呟くので、気恥ずかしかった俺は少し赤くなる

「まあ、みんなと打ち解けてくれて良かったよ　白雪までお前を可愛がってたな」

ランバージャックでの決着以降、白雪の態度は軟化していたが

あんなに優しく接してたとはな　ちょっと意外だったよ

「――白雪お姉ちゃんは、鋭いね」

器用に寝返りをうって肘で上体を上げたかなめが、こっちを見てくる。

「……鋭い？」

「お兄ちゃんが来る前に私、『私には分かるよ』って言ってたの」

「何をだよ」

「あたしとお兄ちゃんが、兄妹だって事」

「……」

白雪は、『人見（ひとみ）』と言って——

人やその写真を見ただけで、その素性や性格を言い当てる能力を持っている

対象との相性や波長みたいなものがあり、見れる・見れないはハッキリ分かれるらしいのだが——見れる場合の的中率は、驚くほど高い

その白雪が、そんな事を……

「お前なんか　妹じゃない　誰が何を言おうと認めんし、信じないから説明もいらん

不機嫌そうに言った俺に、かなめはもう諦めてるのか苦笑いで頷いた

「えへ　ノンデレお兄ちゃんと２人　あたし、嬉しいな」

何だか分からん事を言いながら姿勢を仰向けに戻したかなめと、俺は２人で、静かに窓から外を見る

車内には本当にヒマな兄妹がゴロゴロしてるみたいな、穏やかな空気が流れ……りん、と、鈴の音がした

目だけでそっちを見ると、かなめはバスカービルの女子にもらったキメラ・レオボンを抱っこしてウトウトしている。

「おい、かなめ、寝るんなら帰って寝るぞ」

俺が、シートに座り直すと——

かなめは、ふるふる……と、首を横に振った。

「もうちょっと……ここにいさせて。今、思い出してるの」

「何をだよ」

「さっきのこと……みんなと、お兄ちゃんと、ここにいた時間のこと……」

その、なぜかとても幸せそうな顔を……俺は何も言わず、見下ろしている。

「——こんな時間、これからいくらでも作れるだろ……メシをダラダラ食うのは大得意だぞ、みんな。なんなら明日も一緒に食えばいい……あいつら集めて、俺も来てやるから」

「明日も……」

かなめがキメラ……レオボンを抱きしめて、りん……と鈴がまた鳴る。

「お兄ちゃん」

「何だ」

「これはきっと、夢だね」

「そうであって欲しいが、現実だ」

「こんなに楽しかったんだね、人生って。こんなにステキだったんだね、外の世界って。
ふふっ　あたし、知らなかった、なぁ……」

最後は半分寝ながら言っていたかなめの頭に、俺はそっと手を置いてやった

――俺も、忘れてたよ

「昔には拳銃（チャカ）が出る学校に通って、戦わされ続けて…
平和な日常のありがたみってヤツを、すっかり忘れてた
だが、俺が生きたいのはこういう日常の方だ
だから、明日から俺も満喫しよう　こういう時間を。
それには自称妹のかなめがついてきてしまうか、そのぐらい背負ってやってもいいさ」

人生――

そんな言葉を呟いて　完全に寝に入ってしまったかなめを
俺は仕方なしに、文字通り背負って帰る事にした

むにゃ　お兄ちゃん、明日は　みんなで、何しよっか・みんなで――

俺の背中で寝言みたいに言ってるかなめは――
[illegible]いじゃないが、ホントに家族みたいだな
それにもまあ、付き合ってやるか　ゴッコ遊びみたいなノリで
日常には　友達と、家族がつきものだからな

3弾　さらばジーフォース

翌日は振替休日だったので——

勤勉な俺は朝イチから図書館へ行き、マジメに勉強をしようとした。

しかしそこに理子が湧いて「さあエッチな本を探すよ！　ほらおいでー」などと学問の冒涜ともとれる1人イベントに俺を引き込もうとしてきた。

で、朝は裸婦画集や医学書を持ってくる理子から逃げ回るので潰れてしまい。理子が飽きて帰った後、昼には武藤が現れ「俺は秘宝探求者だ。お前を助手に採用する」などとほざいて理子と全く同じイベントを開催してきた。

なので結局、俺は図書館でメタルギア・ソリッドみたいに逃げ隠れしてただけ。すっかりやる気を失って、昼過ぎにトボトボ自宅へ帰ると——

（お、美味そうなニオイがするな）

またも空腹を抱えて歩いていた俺は台所に直行し、作り置きされていたカレー鍋を発見した。これこそ秘宝。かなめのカレーは美味いからな。今日はハーブを変えたのか、少しニオイが違うけどな。

だが……それを作ったかなめが、いない。どこかに出かけてるらしい。

―まぁ、1年とかインターンは色々こき使われるからな―

きっと、実弾サバゲーの戦後処理にでも駆り出されたんだろう。

テーブルには、かなめ作の『お兄ちゃん人形＋かなめ人形』が置いてあった。こないだもらったのを防弾物置の奥に捨ててたのがバレたか。

もう勉強する気分でもなかったので、俺はテレビを見ながらカレーを食べ、食べたら胃に血が行ったのか、眠くなってきた。

「世の中に、寝るより楽はなかりけり――」

などと祖父ちゃんの口癖を呟きつつ、俺はベッドルームに入り、どさっ、と横になる

そうして

理子にマウントポジションを取られて強制的に見せられたゴヤの『裸のマハ』がなぜか『裸のアリア』になってる悪夢に魘されて飛び起きると、すっかり夕方になっていた

夢ヒスしてないか心配だったが、だ、大丈夫だな。

「ふう……」

安堵の息をついて、洗面所に向かうが…また、かなめは帰ってないな

ＨＭＤの充電器の位置が動いてるから、一度帰宅して、また出たようだが……カレーの残りには手を付けてない

不在着信でも無かったかと思って携帯を見ると、

「…っ」

なんだこれ。アンテナが立っていない。

その代わりに、OFFと書かれたピクトが表示されている。

セルフモード――携帯の電波を止め、通話やメールを使用できなくするモードだ。

俺はこんなもの設定しない。誰かが勝手にやったんだ。

カチカチ、と、セルフモードを解除すると――

「ん？」

「見崎、シャンヌ、その他にも幾つかの番号から、留守録が何件か入ってる。メールもだ」

その内容を確認しようとしたタイミングで、知らない番号から電話が掛かってきた。

反射的に出ると、

「凪山か？　電話機に出んから心配したぞ。急いで具足を付けろ」

この声、斗藻だ。

「具足……装備って事か？　どうした」

「どうもこうも無い。もう始まっておるッ！」

「――ッ」

イヤな予感が全身を駆け抜けると同時に、

「儂の式神が報せてきた。ニーサードが東京に入ってきよったぞ」

聞きたくなかった言葉を、上条が伝えてきた

「場所は品川火力発電所の東南東じゃ　近くの荏原神社に仁雪とジャンヌがおったでの急ぎ向かわせておる　ノーフォース――かなめは、そこにおるか」

「いや……いない！」

『まずいのう』

上条は何かを悩むようにしばらく黙り、

『ノーサードめ、戦運のあるヤツじゃ　こっちがバラバラで、準備もままならずにやってきよった。勝負強いものを感じるぞ　ヤツには……』

うぐう、と考え込んでしまった

上条にしてみると運の善し悪しは重要な事なのか、すっかり頭を抱えてる感じだ

「とにかく俺も出る　他のメンツはどうなんだ」

「了解、レキは既に動いた　アリアは装備科という場所にいるらしいが、自分で急行するそうじゃ　ワトソンもついさっき連絡がついた所での、お前の部屋に向かわせた」

早川に上条が伝えたところで

俺の部屋のインターホンが鳴らされた。ワトソンが来たのだ

スカイツリー戦の時と同じ装備で現れたワトソンに手伝ってもらい、俺は銃、防弾制服、

持てるだけの小銃、そして左右の手に『オロチ』を装備して男子寮を飛び出した。

寮の前には、既に赤色回転灯を付けたワトソンのポルシェ911が停めてある。

「どうするトオヤマ」「ノーサードは武偵高の対岸、火力発電所付近にいるそうだよ」

その運転席に飛び乗りつつ、ワトソンが聞いてきた。

どうする、というのは、移動手段の事だろう。

「水路は厳しいぞ。ボートの用意が無いし、湾岸は橋と水門で行き止まりだらけだ」

「でも車は――アンラッキーなんだ。東京港トンネルが事故なんだよ。車どころか人も走れない。一般道で芝浦をターンして行くしかない。20分はかかる――」

チクショウ。もう年末が近いからな。毎年お馴染みの道路工事シーズンってやつか。

直線的に行けるルートは空路くらいだが、ヘリなんか準備にもっと時間がかかる。

「迷ってるヒマは無い、車だッ。出せ」

助手席に入った俺はハンドブレーキを下ろし、ワトソンに運転を促す。

「んッ……トオヤマ、キミは何を食べたんだい――」

その動きで顔が近づいたせいか、エンジンを掛けながらのワトソンが唐突に聞いてきた。

「どうでもいいだろそんな事。かなめが作ったカレーを――」

微かだが、口からハーブ……亜硝酸の匂いがする。睡眠薬だ。香辛料の香りに紛れても判別できるという事は、相当量を飲まされたな。気がつかなかったのかい」

医師でもあるワトソンにそう言われて——ハッと気づく。

そういえば今日のカレーは、香りや味が普段と少し違った。

かなめは「俺が褒めた味と同じ味を作る」事に、いつもこだわっていたのに。

「どういう事だッ……かなめ」

俺はすぐ携帯からかなめに電話をするが、もちろん出ない。

「行ったのか　ン　サードの所に」

「どうするつもりなんだ　かなめ　お前は……」

車内には、カーナビを兼ねたモニターがあり、

そのモニターにTV電話会議サービスで接続してきたシャンヌが、制服の胸ポケットに携帯を上手く挿してアウトカメラ映像を送ってきていた。

俺たちはレインボー入口交差点を右折し——クソッ、道が混んでるな。今は映像で状況を見守るしかない。

モニターと連動する車載スピーカーは最高級品で、まるでその場にシャンヌがいるかのようにクリアな声が聞こえてくる。

「遠山、ワトソン。ヘッドセットが無いので……携帯をハンズフリーにし、スピーカーをオンにしてある。お前たちが大声を出すと向こうに聞かれる怖れがあるから注意しろ」

もうかなり接敵しているのか、ジャンヌの声には緊張感がある。

モニターには、イロカネアヤメを持った白雪の姿もチラチラ映る。

2人単位で行動しているんだな。正しい選択だ。

ジャンヌたちは六角柱みたいな煙突がある品川火力発電所の側、敷地外を移動していく。

その先は東京湾で、洋上には天然ガスのタンカーが見えている。

その間に、音声のみで理子、レキ、続いてアリアがオンラインになっていく。

「うっ……」

俺を含め、一同が呻くような、或いは驚いたような声を上げた。

——来た。

顔面には厳めしいペインティングをし、サングラスのようなHMDもかけているが、あの存在感は、間違いない。

仁王立ちしているのだ。ジーサードが、海の上に。

安定感から見て何かの上に立ってるようだが——足場が、見えない。

恐らく透明な何かが足下にあるのだろう。

ジーサードは現代的デザインをした漆黒の甲冑を体の各所に装着し、その装甲と組み合わさった黒いコートを風に靡かせていた。そのどちらもが、金や金糸で飾られている。

作戦会議の時にも思ったが、派手好きな男だぜ。相変わらず。

ジーサードは何か怒ったようなムードで、陸の側、公園みたいな芝生の方を見ている

芝生の[illegible]には、ジーサードに何か喋っている——

「かなめ……！」

HMDを掛け、こちらもプロテクターを身につけたかなめがいる

その腰の左右に2振り、背にもクロスさせるようにして2振り——合わせて4振りもの、先端科学兵装の刀を装備してるぞ　今まで見た中で最も重武装だ

そしてさらに、

「……な　何……」

ジャンヌの声と共に、俺も言葉を失い、目を見張った

言葉を失わざるを得なかった　目を見張らざるを得なかった　その人は人に息を呑ませ、人の目を惹きつける、神がかった美形だから

コンテナヤードの片隅、海と陸の境目にそびえるクレーンの上

そこに、ライトブラウンの防弾ロングコート・編み上げブーツという戦闘服を着た——

「カ……カナ……！」

カナが、腰掛けていたのだ。

そしてあの距離感から察するに、あの場では——

かなめ側ではなく、ジーサード側にいるみたいだぞ　！

――ジーサードがしばらく不在だったのは、カナを撮影するためだったのか……

腰まで届く栗色の三つ編みを海風に揺らし、画面越しにも拘わらずその美しさで俺達を一呑みにしてしまったカナは――美しいだけじゃない。自分の意思でヒステリアモードになっており、その力を俺なんかよりずっと上手く使いこなせる超人だ。

俺は、ヒステリアモードの『兄さん』にはマグレで一度勝った事があるが、『カナ』に勝った事は無い。もし戦いになっても、勝てる自信は全く無い。

カナは、別物なのだ。

恐らく俺の知らない上位の派生系ヒステリアモードを実現した、別次元の存在。しかも、イ・ウー戦の時より更に一回り成長したオーラを身に纏っている。

「……」

夕陽に照らされて佇むカナは、けぶるような長い睫毛の下で――

ただ、その場を見守るように見下ろしている。

映像か……ジャンヌが少し震えながら、俺に近づき、

「こ……ここからは、映像を広角化・固定する。武運を祈っていてくれ」

武偵手帳から出した、コンタクトレンズのような魚眼化レンズを携帯のカメラに増設した。そして携帯そのものは、樹木の枝に置いて固定する。

受光角が広がって歪んだ画面をモニターが自動検知し、パノラマ写真のように整え――

画面内ではその場の全体――

かなめ、ジーサード、カナ、そして白雪・ジャンヌの様子が把握できるようになった

続けてワトソンがイコライザーを使い、音声をより明瞭に拾えるようにすると、

「サード、殺す必要は無いよ　ハスカービルは――師団は、敵じゃない」

――かなめの声が聞こえてきた。

説得するような感じで、ジーサードに話している。

もうジャンヌと白雪が接近している事には気づいており、どう対応すべきか話し合っているらしい。

「フォース　これは命令だ」

低くそう言い放ったジーサードに――ザッ

白雪が姿を見せた　かなめに、味方するように

「ジーサード　あなたがこのかなめの他に――八尾の妖狐を巡って玉藻様と交渉した事、さっき私も聞きました　玉藻様の回答には星伽も同意です　あなたには色金も、その術も、一切渡す事はできないよ」

どうやらジーサードは別ルートでも師団にコンタクトしていたらしく、それは星伽本家にも関係する事だったらしいが――

（よせ、白雪……！）

その月は危険なんだ　刺激するような事を言うなッ

俺たちはようやくレインボーブリッジを渡り、有明橋でタイヤを鳴かせて転回した所だ

道のりでいえば、ようやく折り返し地点。現着に後10分は要る

――ここは仲間を一時撤退させるべきだと判断した俺は、

「ジャンヌ、レキとかなめを連れて、そこから逃げろ！」

モニターの下にあるマイクに叫ぶ。携帯のスピーカーから、俺の音声を流すために

すると画面の中では、その声を耳ざとく聞いたらしいかなめが振り返った

「お兄ちゃん！？」

驚いている　きっと俺を巻き込まないように眠らせたつもりが、予想外に早く動かれたからだろう

調べがたりなかったな、かなめ　俺は比較的、薬が効きにくい体質をしてるんだ

「あたしは　ハスカーヒルは　敵じゃない、サードは　」

と、混乱しているかなめに――

「――フォースッ！　俺の命令を聞かんかァ！」

「――かなめ！　そこから逃げろッ！」

ジーサードと俺の叫びが、同時に放たれた

2人の声に、びくッ！　と身を伸ばした、かなめは

その場で膝を震わせてから……

す、ずず。

足を引きずるようにして……

崩れ伏した……ジーサードの側に、ついたのだ

その表情には、明らかな怯えの色がある

「……かなめ……っ」

分かる……まるで、自分の事のように。

かなめは、きっと──かつて俺が兄さんに命令をされた時と、同じ心境なのだ

逆らえないのだ。自分と相手との、圧倒的な格の違いに

つまり──その人の命令は、絶対遂行する……して、しまう……

「あたしは……自分より強い者には……」

声と共に、手をブルブル震わせたかなめは──

「……絶対、逆らわない……それは、非合理的だから……！」

その両腕を交叉させ、両腰の刀、その柄に手を伸ばしていく

「マズい……マズいぞ……！」

俯いて白雪・ジャンヌを見据えるかなめの表情が──鋭くなっていく

かなめを支配する人格が、入れ替わろうとしている

優勢になっていくのは、最初の人格――かつての、ジ・フォース・1

「あたしには恩義もある。ロスアラモスから出してくれたのは、サートだ――」

自分に言い聞かせるように呟くかなめからは、もう闘気が放たれている

その姿勢が低くなっていき、脚部に力が籠もっていくのが分かる

「戦うつもりか。その剣は、私たちには通じないのだぞ」

かなめの闘気を感じたシャンヌと白は、それぞれの刀剣を抜いて刃を寄せ合った

ウンハージャックの夜と同じ方法で、かなめの刀を破壊する協力技の構えだ

「かなめ。降参して。あなたは私たちに勝てない。それはこの間、分かったハズだよ」

という声に

――かなめは、

「あれは決闘。これは戦争」

[illegible] 蛍光ブルーの線のような光をたたえた刀の柄を、握った

「お姉ちゃんたちが攻略したのは、13種類ある先端科学刀の1つに過ぎないんだよ

――パパ！

かなめの足下から、芝生と土が勢いよく飛び散る

プロテクターによるアシストがあるらしく、超人的な跳躍で間合いを詰めたかなめは、

空中で抜刀――いや、

「――億狐環刃ッ――！」

刀とは言えない、何かを抜いた――

――それは言うなれば、光の刃。

鞘より長い、1ｍ程の輝きがジャンヌと一気に距離から迫る

2人は散開するように、光の刃を避け。

――ボウン――！

着地と同時に、かなめの光る刃が大地を払った

地面は溶岩のように溶け、白い煙が一気に広がっていく

――何だ、あれは……！

まるで映画みたいな光景だ。それこそ『スターウォーズ』に出てくる架空の武器に似た兵器だが、威力はもっと強力だぞ

喰らったら　たまりもない。触れた所が斬れる、いや、蒸発しちまうだろう

かなめが光を収めると、手元には鞘だけが残り――

「……ジャンヌっ」

「分かっている」

目を丸くしながらの白雪とジャンヌは、それぞれ刀剣ではなく魔術に切り替えたらしい

白雪は印を結ぶような手つきをし、ジャンヌの周囲には氷の結晶が舞い始めている

そして……今の一撃を見たジーサードが、不機嫌そうに鼻を鳴らす

「やはり故障したか、フォース」

「違うよサード。出力を抑えたの。あたしはサードより反応速度が遅い……想定より長時間展開させないと、切断中に多面結晶が溶けるから――」

「違う。お前自身が、だ」

百獣の王・獅子が唸るように、ジーサードが言い放つ

ハッ、と振り返ったかなめは――焦っている。

「フォース、俺の目は誤魔化せんぞ……今の一撃は、殺す意志が半分、逃がす意志が半分のものだった」

「……違う！　あたしは……！」

ぶんぶん、とセミロングの髪を振って……かなめが言い訳するように叫ぶ

「お前は故障し、人間に成り下がりつつあるのだ……フォース」

「違う違う違うッ」

かなめは頭を抱え、頭の中にいる他の自分を追い出そうとするかのように爪を立てる

「フォース……お前が何なのか思い出せェ！……お前は兵器、これは戦争だ！……やれ」

ジーサードは……修理、しているのだ

かなめを、ゾーフォースへと

ヤツは自ら白ジャンヌを攻撃せず、それをかなめに強要している

それはつまり修行、人格を元に戻すためにさせている事なのだ

どうして……どうして、戦争になっちゃったの……っ

顔を伏せた、かなめは——バッ——

両腕を広げるようにして、背に備えていた双剣を抜いた

それは中世ヨーロッパで斬首刑に用いられていたという先端の丸い処刑剣に似た形だが、その両刃の剣身、鍔の部分が刳り抜かれてU字になっている

そのU字形の先端は

炎や氷を準備していた白ジャンヌの方向へ、牽制するように向けられていた

「もう……戦争は……いやだよ——」

ヒュン——という高音に続いて——かなめの双剣、それぞれの鍔から弱い光が迸った

それが刃を伝うように駆け、先端で衝突し、反動もなく飛び出す

「——！！」

銃弾のような速度で飛んだ光の弾は白ジャンヌ、そしてジャンヌに迫り——

ジャンヌは剣で光弾を払うような動きをしたが、弾ける物ではなかったらしい

白ジャンヌはジャンヌの身を案じる意識があったせいか対応が遅れ、何の防御もできずにいた

そして次の瞬間、光弾はロケット砲が着弾したような音を上げて——

弾のサイズからは全く信じられない規模の、大爆発を引き起こした

「白雪！　ジャンヌ！」

2人はそれぞれ電車にでも撥ねられたかのように、左右に吹っ飛ばされる

白雪は地面にバウンドして倒れ、ジャンヌは画面外に消えてしまった

「白雪ッ　――」

食い入るように画面を見ると

白雪の引き裂かれた防弾制服の下に、用心深く付けていたらしい鎖帷子の、残骸が見える　ぴく、とその体が動くのも見えた　即死じゃない　だが、重傷を負ったようだ

戦闘は継続できない　すぐ、助けないと。

双剣を背に収めた、かなめは

――もう、いいよね？　という目で、ジーサードの方を振り向いている

だが、ヤツの回答は……

「――なんで手を止める　何なら俺が殺るか？」

殺せ、という意味だ。

やめろ！　もうやめろッ

という俺の想いも虚しく

哀れな泣き顔を上げたかなめは、脚部に備えていたナイフ状の道具――それも、科学の

剣の一つなのだろう――を、抜いて、

「兵器は、戦わなきゃいけない。やりたくなくても、やらなきゃいけない……！」

ざっ、ざっ。焦げた土を踏み越え、目先に迫る。

それを黙って睨むジーサードに、クスッ、と笑いながら――

「ジーサード。人の事ばかりでなくて、自分の事を心配したら？」

カナが、クレーンの上から声をかけた。

そして次の瞬間、バスンッッ！　中継スピーカーから、稲妻のような音が上がる。

音声接続している誰かが、発砲した音だ。

その数秒後に、

――トハチン――

ジーサードの側頭部付近でオレンジ色の火花が弾け、続けて芝生の一部から土砂が巻き上がる。

何だッ……今のは……!?

「――弾丸を防がれました。原因は不明です」

という、中継スピーカーからのレキの声で分かった。

今のは、大型スナイパーライフル。バレットM82による狙撃。

レキのバレットは銃身長が29インチもある。総重量は14㎏を超え、全長はレキの身長と

ほぼ同じサイズ。持ち運びには不向きなので、彼女は学園島に陣取り――

そこから直接、品川のシーサードを長距離狙撃したのだろう。

土くれが巻き上がったのは、その弾が着弾したためだ。ドラグノフよりもっと強力な、大口径弾で。

だが、なぜ当たらなかったんだ。レキが撃ち損じるとは思えない。

シーサードのそばで弾けた火花。ヤツが、何らかの防御をしたのだろう。バレット・ライフルは装甲車だって破壊できる強力な狙撃銃なのに。それを、易々と――

「――」

その時、シーサードの遥か頭上、クレーンから――

――理子！

いつの間にか忍び寄っていたらしい。理子がシーサードめがけてダイブしている。

手には4月のハイジャックでアリアを殺しかけたのと同じタクティカルナイフを持ち、ヤツが唯一プロテクターを装備していない頭部を狙ってる。

ここまで様子を見ていたレキと理子は――

まずシーサード、つまり大将首を獲ろうとしたのだ。

そうすれば、かなめは指令を失い行動できなくなる。そう考えて。

そして、その作戦はアタリだ。いける。シーサードは、かなめの方を見たまま。降って

くる理子の力を、振り仰ぎもしてない！

だが、

「――心配するような事かよ？　これが」

と言うシーサードの言葉に続き、ハチッ！

シーサードに接触する寸前で、理子はボールのように跳ね飛ばされた

そして鮮血を宙に散らし――ざぶっ……と、音もなく、海に落ちてしまう

今のは見えた。シーサードが片手で弾いたのだ。理子の力を見もせず、軽々と……

（ダメだ……やっぱり、ヤツには手も足も出ない！

ポルシェはまだ虹色橋の下。現着まで5分

かなめは、先端科学兵装の刃を手に――もう[illegible]の近くまで歩み寄っている

どうすればいいんだ。）

「……？　あれは何だ？　……トォヤマっ」

港南大橋に入りながら、ワトソンがモニターではなく、ウィンドーの外を見て叫ぶ

そして俺の腕を引っ張り、車の右方、空を向かせた

「……!?」

空――コンテナヤード上空に、光が見える。

星……じゃない。距離が近い。ミサイルにしては低速だ。航空機の類でもない。もっと

小さいものだ

光は、旧小火力発電所の上空を掠めて飛んでいく

「戦争は『何でもあり』なの……そしてあたしは、戦争のために作られた……」

画面内のかなめがナイフを振り上げ、俺がモニターに視線を戻した時

「――へぇ じゃああたしも『何でもあり』でやらせてもらうわ」

アニメ声が、車載スピーカーから聞こえてきた

続けて、バッ――バッ！

「っ？」

自分を守るような角度から、かなめの了丸に何かが飛来した。2発

炸裂音を上げて爆発したそれらは、オレンジ色の炎でかなめの姿を包む

これは、見たことがある――

「焼夷弾……ッ！」

ビスヒドロキシン・アルミニウム、ナフサ、超強酸化剤を使って高温の火炎を発生させる

超小型のナパーム弾。武偵弾の一種だ。それで空襲されたのだ。かなめは

ごろごろっ！と転がって、炎と煙から逃れたかなめは

空を見上げている。

恐らく、さっき俺たちが見たのと同じ光を

その手に、さっきのナイフは無い　今の武偵弾で撃ち落とされたのだ

「　アリア　!?」

幌を開けてポルシェをオープンカーにし――ショートの髪を風に暴れさせたワトソンが、上空を見上げている

俺も空を仰ぐと、もう、肉眼でも見える

さっきの光の正体が

「ア、アリアじゃねえか……ッ！」

防弾制服のスカート、その背部・側部の外側に――もう1重のスカートのように広がる、鎧の草摺みたいな白い機械を装備した――アリアだ！　可変翼が7枚あるように分かれたその機械の下端が、それぞれ噴射炎で光っている

形状や機動から見て、　あれは、高出力の小型ロケット式推進器・翼・姿勢制御翼

それを腰から7枚、前の開いたスカートみたいに腰に付けて飛んでやがる　アリアが

「おい、お前、なに飛んでんだ！　いつそんなモン手に入れたんだよッ！」

当たり前のように滞空しているアリアに、つい通信越しにツッコんでしまうと――

「これはホバー・スカート　納品は今さっき、ぶっつけ本番で使ってんのよ！　キンジ、あんたもグズグズしてないで早く来なさい！」

などと言いながら――バスバスバスッ！

アリアは上空から、焼夷弾、炸裂弾、飛散弾——

かなめに武偵弾を雨あられと降り注がせている。

爆音が……スピーカーと、もう耳でも聞こえてきたぞ。

ていうか、まるで本物の戦争じゃねえか……これじゃあ——

画面の中では、さっき白雪たちを仕留めた中空・胸刃の科学剣が徹甲弾で狙い撃ちされ、破損して地面に落ちている。それをレキのバレットM82が狙撃し、破壊してしまう。

（そういえば……）

さっきの上様の話……

——アリアは装備科という場所にいるらしい——

あれはアリアが入院時に注文したと言っていた、「ロケットブースター」を受け取りに行っていたのか……平賀さんの所へ。

よくよく考えてみれば、平賀さんの発明品も先端科学兵装みたいなもの。

見たことも聞いたこともない新兵器を、信頼性はともあれ次々作れる人なのだ。彼女は

目には目を、歯には歯を、科学には科学を——アリアはいかにもアリアらしい発想法で、ジーサードたちとの直接対決に備えていたってワケか。

人間攻撃ヘリと化したアリアを、呆然と見ていると——

「——お前たち、理子は私が助けたわ。敵をしっかり仕留めなさい」

理子のもののハズの音声回線から、スピーカーに気取った声が流れてきた
この声は——
「ヒルダ　っ？」
モニターの隅で、コウモリの影を無数に繋ぎ合わせたような黒い網みたいなものが
海から、理子を吸い上げているのが見える
「——ヒルダ、そこにいるんだな　急げノ、理子とジャンヌも救出しろ」
俺がそう言うと——
「ほほっ　おバカさん　いやぁよ　誰が下卑た男の命令なんか聞くものですか」
と、コイツは未だに味方だか敵だか分からん状態だ
「このノ・　緊急事態に何ほざいて　」
「よせトオヤマ」
怒鳴りかけた俺の口に、ワトソンが手を当て——
「できない事を言って済まなかった、ヒルダ　だいぶ傾いてきたけど、また夕陽が出てるもんね
などと、ポルシェを運転しながら大声気味に言う
「——何ですって？」
いきなりカッとなったような声を上げたヒルダは

「ワトソン。昔お前には話したでしょう。日傘さえあれば、私は陽の光なんか怖くない。昼のさなかに墓地をピクニックした事だってあるのよッ」

「いや、ムリしなくていいんだ。今のトオヤマには配慮が足りなかったよ。キミには出来ないんだ。今、白雪とジャンヌを救う事なんか」

「ワトソンッ。この無礼者。無礼者。お前はッ、この気高き竜悴公姫に」

ブツッ。

ワトソンは理子の回線を切って、金切り声を上げるヒルダを通話から追い出してしまう。

「お、おいワトソンっ」

「いいんだ。彼女はこれで100％。白雪たちを助ける」

なんと自信ありげに言うワトソンに促されてモニターに視線を戻すと——バサバサバサッ。

——無数のコウモリの影が、キレたような動きで白雪の体の下に潜り込んでるぞ。

そして、ずず、ずずず、と、その体を引きずってどこかへ運び始めた。

ホントに、救助に動いたらしい。俺の頼みは1秒で断ったくせに。

「——戦闘に参加するほどの力は今は出せないだろうけど、救助は任せられるよ。ただし、後で褒めてあげなきゃいけない」

そういえばワトソンは、俺たちに会う前からヒルダと接触があった。付き合いが長い分、扱い方も分かってるって事か。

意外な所にいたヒルダ・キラーに目を丸くしてから、画面の中央に目を戻すと

かなめとアリアが、まだ交戦中だ。

戦況はアリア優勢。惜しげもなく武偵弾を使って、力押ししてるぞ。

「……ッ……！」

粘着剤で両腰の剣――宙孤環刃までもを封じられたかなめは――

サッ！　と、空に向けて片方の腕を振るうような仕草を見せた

すると、発電所の煙突から上る白煙の中に隠されていた――白い布のようなものが空を翔けた

回転しながら飛ぶそれは、X字形をした布状の刃物

かつてアリアを苦しめた攻防一体の空飛ぶ兵器、磁気推進繊盾だ

しかも、2つ――左右に展開し、アリアを挟むように斬りかかる

「同じ手は二度食わないわ」

アリアは片方のガバメントから2発、その布剣ではなくかなめの方に発砲した

それが、　パッ！　パッ！　と、小さな太陽が生じるように閃光を放つ

「閃光弾……！」

かなめは、それでも身をかがめる事なく踏みとどまっている

だが、視界は塞がれたのだろう

ひらりっ——と宙返りしてX字の化を躱すアリアの機動に、対応できないかなめのコントロールを失った2枚の刃は空中で衝突し、お互いを中途半端に斬りつつ

アリアが撃ったダメ押しの粘着弾で、絡まってしまう

「い、今の動きは……!?」

墜落していく化刃を見送ったアリアは、今さっき——空中でツインテールを翼のように使って、航空機が減速するような動きを見せた

あれは風に靡いたんじゃない……まるで

「ハハッ」

そのアリアを見たジーサードが、愉快そうな声をあげている

「緋弾のアリア……の端緒が垣間見れたな……カナ、お前の条理予知も大したもんだぜ」

「私のは不完全よ……推理の域を出てないわ」

緋弾のアリア、条理予知——イ・ウーでシャーロックが用いていた言葉を交えて、ジーサードとカナが語ってる

何だ……何の話をしてるんだ……2人とも

だがそれを考えるヒマもなく、

「武偵弾が切れたわ……燃料もあと30秒……キンジ、そっちはあとどのくらい？」

スピーカーから、アリアの小声が聞こえてくる

「もうすぐだ、あと　３分持ちこたえてくれッ」

「オーケー、かなめはあたしが逮捕するわ　あんたじゃきっと、あの子に本気を出せないでしょ。かっっわいい妹さんだもんね」

なんだかイヤミな言い方をしたアリアは、飛行機雲のような噴射煙の尾を引きつつ降下体勢に入る。そしてそのまま旋回しながら――

シャッ！

背から２振りの日本刀を抜いて、かなめに迫った

「かなめ！」

「アリア！」

かなめは腕を伸ばし、手を組むようにして――その中から、輪のような光を展開させた

さっきの電弧環刃に似たその光は、丸鋸のように広がっている。

「うわああああっ！」

叫び声と共に、飛来するアリアめがけて跳び上がったかなめは

アリアの斬撃をプロテクターに受けつつも、アリアの飛行ユニットの側部を切り裂く

「――っ！」

バランスを失ったアリアは不時着し、それでも上手くターンしてかなめに向き直った

そして、長時間展開できないらしい電弧環刃が消えたのを確認して

まだ生きている背部の推進器（スラスター）を使って、かなめに飛びかかっている

ルタブースターでもついてるかのような勢いで走るアリアに本当にブースターが付き、かなめは次の武器を出す余裕もない　格闘戦に応じている。

その時ポルシェが、エアバッグが飛び出しそうな勢いで急停車し

「トオヤマ！　ここからは走るぞ！」

ついに現場に到着した俺（おれ）とワトソンは、戦場となっている発電所の南側へと走る

発電所の敷地では——理子、白雪、ジャンヌが煙突の影の中に集められていた

3人とも立ち上がれない状態だ

「……みんな……！」

その光景に、一瞬気が遠のく

あの時と同じだ　ノーサート達に初めて襲われた時と

俺はまた、間に合わなかったんだ

「トオヤマ、ボクは負傷者を手当てする！　キミはアリアに加勢しろ！」

衛生科の応急キットを持ったワトソンが、そっちへ駆けていく

俺は歯ぎしりしてベレッタを抜き、海へ続く芝生に向かう

そこでは——

「アリア……！」

かなめとの戦いで負傷したアリアが、がく、と片膝をつくところだった。

俺の到着に慌てるような素振りを見せたかなめは、腰から磁気推進繊盾を出している。

それも、左右に2枚ずつ。恐らく、折りたたんでプロテクター内に格納していた物だろう。

まるで4本の尻尾があるような光景だ。

「アリア、大丈夫か」

ベレッタでかなめを威嚇しつつ、アリアを守るような位置に立つと——

「まだやれるわ。気をつけなさい、あのプロテクターはかなめの格闘戦をアシストしてる……撃、撃か下がったわ。あたしの攻撃はあの布が自動的に防ぐし、攻めづらいの。レキも何度か火砲支援してくれたけど、通じないし……」

アリアは、ぱしゅっ、と水蒸気のような煙を上げてホバー・スカートを外した。

もう燃料が無いのだろう。そうなればただの重りだからな。

なおもアリアは格闘技の構えを取ろうとするが……ダメだ。ダメージは重い。

さっきのアリアの戦闘機並の攻撃力・機動力が長時間持続できる物だったら——勝てたかもしれない。だが、もうガス欠だ。負傷の度合いも重い。退かせるしかない。

「かなめ……！」

実際、大したヤツだ。お前は。

1度はたった1人でバスカービルを全滅させ……

2度目も、ここまで追い詰めたワケだからな。

そのかなめに加えて、向こうにはジーサードが無傷で残ってる

これはもう俺の手に負える状況じゃないぞ

だが——

勝機は、ある

「——カナ！　何でそこにいるんだ！　下りてきて一緒に戦ってくれッ！」

俺は、クレーンの上に腰掛けているロングコートのカナに叫ぶ

カナさえこっちに付けば、逆転できるかもしれない

それが切り札のつもりだったのだが——

「——キンジ。私は極東戦役の戦いの1つを見に来ただけよ」

沈みつつある夕陽の中、カナは、動かない。

「それに、私は『無所属』。誰とも戦う義理は無いわ」

石のような瞳で一つ瞬きしたカナは、

「でもジーサード、あなたはバスカービルと敵対した。戦役に参加し、敗北した者は死ぬか、敵の配下になる。それが今日、私がここに来た条件でもあるわ」

ジーサードにそう語って、それっきり黙る

代わりに、

「構わねえさ——ハハッ！　とうとうこれで『Gの血族』が揃ったな！」

洋上に立つジーサードが、でかい声を上げた。

「だが、使えねえヤツは切るぜ。今はキンジとフォースが怪しいとこだ」

そして見えない階を渡るようにして、こっちへ歩いてくる。

「『Gの血族』……？」

不可解な事情だが、それを詮索するのは後回しだ。

カナが説得できない以上……戦う選択肢は無くなった。

逃げるぞ……アリアも、かなめも、全員を連れて……！

「おい。逃げるんじゃねえよ」

俺の思考を読んだかのように、ジーサードが、一歩近づいてくるたびに——

桁外れの威圧感が、伝わってくる……まだヤツは臨戦態勢でもないのに。

っ……強いぞ……やっぱり……コイツは……それだけは分かる……

俺の背後のアリアもそれは感じたらしく、ごくり、と生唾を飲むのが聞こえてきた。

「キンジおめェ、フォースに何を吹き込みやがった。フォースはな、なれたはなれたが——もうＨＳＳにはならないと言い張りやがるんだ」

自分の話をされたかなめは、焦った表情でジーサードに振り返り……

再び俺の方を向いて、慌てている

……かなめ

「それに……どんな歓待を受けたか知らねえか、そこの女どもを殺りもしねえ」

立ちすくむかなめの背後に立ったジーサードは——が、

マットブラックの合金ブーツで、かなめの背中を蹴った

「あっ……！」

どさ、と力なくその場に四つんばいになってしまったかなめに——

「おいフォース。アリアを潰す手が止まってたぞ　その間に敵兵が散乱してっただろうが

今からでも遅くねえ、追え！！」

ジーサードが、吼えるように命令する

カメのように手足を縮こまらせた、かなめは——う、う、と呻きながら——

プロテクターの各所に灯る蛍光ブルーの光を、弱めていく。

「お兄ちゃん……ごめんね……あたしは、自分より強い者には……絶対に逆らわない……

それは、それは、ひ……非合理的だからっ……！　ごめんね、ごめんね、ごめんね……」

くぐもった声で何度も謝ってくる、かなめは……

またどこかから、科学の刃を出そうとしているのだ。

もう、精一杯なのに……もう限界なのに。

もう、戦いたくないのに……！

ノーサード……ッ！

そんなかなめに、無理強いしやがって……！

「——かなめッ！　もう戦わなくていい！　やめちまえ、そんなヤツの下なんか！」

俺は拳銃をシーサードに向けつつ、負けじと叫んだ

「お前はソイツに騙されて、利用されてるだけだ！　命の恩義だか何だか知らないが
お前を助けたのだって、どうせ自分の道具にするためだろ！　もう強がるな、そんなヤツ……ジーサードなんかに頼らなくたって、俺がついててやる……！」

「口がでけェよキンジ。おいフォース、コイツも黙らせろ」

俺を親指で指して言う、ジーサードに……

「……ふな……」

かなめが、地面に伏せたまま低く呟いた

だがそれは震える小声で、よく聞こえない

「何だ、フォース」

「呼ぶな」

今度はハッキリとした声で言った

かなめが、立ち上がる。

「──その名前で呼ぶなあああああッ!!」

ジーサードの方を振り向きながら、ガシャガシャガシャガシャン、

種の殻が割れるように、かなめのプロテクターがあちこち開いた

その奥には──小型のノズルが並んでいる

──ゴォッッッ！

それらが同期して炎を噴射し、

「うわああああああ──ッ！」

爆発的な力で、かなめがジーサードに飛びかかった

巻き上がる熱風の中で、かなめとジーサードが激突し──

交錯し、擦れ違っていく

「──かなめ！」

プロテクターに隠されていた──肉体ロケットエンジンは、おそらくこれも使い捨ての装備だったのだろう。もう、炎は出していない

人知を超えた爆発力で至近距離から体当たりを見舞う、必殺の攻撃補助装置。それを使い、ジーサードの背後まで駆け抜けていたかなめは──全身から煙を上げつつ、よた、よたた、と何歩かよろめいて

「あれ……？」

いま自分が何をしたのか分からない、という顔で、振り返った

ジーサードは、黙っている

さっき立っていた位置から、一歩も動いていない

まるで、かなめがヤツの体をスリ抜けたような光景だ

金属と防弾繊維の手甲をしたジーサードの指から、ぽた、ぽた……と、血が滴り落ちる

「あは……あ、あたし、非合理的イ……」

苦笑いしながらこっちに向き直ったかなめの——

胸部プロテクター、その中央下部が割れている

黒いアンダーウェア、その奥に深々と……傷が、見える

——かなめっ！

アリアの悲鳴が、俺の後ろから聞こえる

今、見えなかったが、今の一瞬で

ジーサードはかなめの胸に、素手で穴を開けたのだ

「フォース……残り少ない命を、ムダに散らすかよ」

背中で語るジーサードに、かなめは——

「散らせるものなら……」

口から赤黒い血を流しながら、ジャキンッ

両腕の手甲内部に格納されていた、刃を出した

「――散らしてみなッ！」

再びシーサードに飛びかかったかなめの体は――ドォォンッ

真後ろに吹っ飛ばされた　10m以上

バラバラに砕けた手甲剣とプロテクターが、割れたガラスのように飛び散っていく

今のも、見えなかった　ジーサードの打撃は……速い！　目で追い切れない……！

「あばよ、フォース　お前はやっぱり弱かった、それだけだ」

低く呟いたシーサードは、振り返りすらしてない

「――かなめっ！」

あまりの光景に棒立ちになってしまった俺の後ろから、さっきまでかなめと戦っていた

アリアが飛び出す。そして、仰向けに倒れたかなめの半身を抱き上げる

俺も、もう――何も考えられなくなり、ジーサードを無視してかなめの元へ駆けた

「……かなめ……かなめっ！」

俺とアリアに抱き上げられた、かなめは――

血まみれの顔で、虚空を見つめていた

「……いま、わかった……どうして、お兄ちゃんに……近づきたかったのか……」

何か、うわごとのように呟いている。

「あたしは……自分が、ニンゲンだって……心のどこかで、おもいたかった……だから、家族に……ニンゲンの、きょうだいに、会いたくて……」

「かなめ、喋っちゃダメよっ！　出血が増すわ！」

胸の傷を手で押さえながら、アリアがプロテクターの残骸を外してやっている。

「さっき……サードに逆らった理由も、分かる……サードの願いよりも……お兄ちゃんを、守りたかった……」

「かなめ……！」

俺もかなめの傷を押さえるが……ダメだ、血が止まらない。

もう……助からない……！

「……あは……今日は……言わないでくれた……お兄ちゃん、って呼ぶとね……いつもね、『お前なんか妹じゃねえ』って、何度も、言われて……あれ聞くと、ほんとに……もう、死んじゃいたくなるぐらい、つらかったけど……今日は、言わないでくれたよ……」

かなめが、力なく……それでも、笑顔になる。

「かなめ……！」

かなめ

ああ、俺は……どうして、今の今まで……認めてやらなかったんだよ……！

コイツを否定して、傷つけてばっかりで、どうして……！

胸の奥底に――

後悔……としか呼びようのない感情が渦巻く。心が、血を流すように痛む。

「あたしが、お兄ちゃんの妹なのは……永遠に、変わらない。だから、本気で愛しちゃいけない人だった。想いを、もう、見せちゃいけない。だから……想いを、胸に込めて、戦ったんだよ。自分より強い、サードと……」

憐れな自分を嗤うように、かなめは再び小さく微笑み

「……あたしは……ニンゲンで、お兄ちゃんの……いもうと……そういう、非合理的な事をする、ニンゲンに……なれたんだよ。最後の最後で、なれたんだ……」

かなめの、ボロボロになったプロテクターの内側から

お守りのように入れられていた何かが、血だまりの中へ落ちた。

それは、あのヘタクソな……俺のとお揃いで作っていたらしい『お兄ちゃん人形』――

俺にくれたのより小さく作ってあるそれには、『かなめ人形』が縫いつけられてあり……

そのフェルト製の手には、更に、体育祭の後でアリア達からもらったキメラ・レオポンが縫いつけられている……

「かなめ……！最後じゃないわ、こんな傷、大したことない……！」

赤紫色の目に涙を浮かべて気休めをいうアリアに、

「アリアも、ありがとう……」

かなめは、もう掠れてきた声でいう。

「学校での、みんなとの、日々……ケンカもしたけど……悲しくなかったよ。最後は自分で、めちゃくちゃに、しちゃったけど……」

「かなめ……！」

かなめは眠たそうに、目を細め——

最後の力を振り絞るように、声を絞り出す。

「サードは……本物の、兵器……お兄ちゃん……お願い……戦わないで……逃げて……」

かなめ……

もう呼吸すら断続的になってきた、かなめに——

「かなめ。悪いが、その願いは聞けない」

俺は、ハッキリと言った。

その血まみれの顔を覗き込み

「妹を傷つけたヤツを、兄は許さない」

そう、言ってやる。

その言葉を聞いたかなめは……

細めた目から、涙を零した。

ぽろ、ぽろ……と。

次から次へと。

それが血と混ざって、流れていく。

「お兄ちゃんが『行くな』って言ったから――もう、泣かないって決めたのに……」

あは、と、小さく笑ったかなめは

そのまま、糸が切れるように力尽きた

かなめ

「　かなめーノー」

アリアの叫びを聞きながら――俺は、２人に背を向けて立ち上がる

そして、まだこっちに背を向けていたノーサードを――睨み付ける

――分かる。

俺の体の中心・中央に、何か異様な血が流れているのが分かる

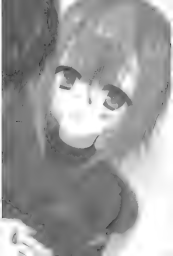
さっきまでの、逃げ腰な自分とは違う――危険な感情が、湧いている

これは――怒り。

かなめを苦しめ、手足のように使い、最後は物のように捨てた、この男への――

「……」

俺の視線を感じたのだろう



そのジーサードが、無表情に振り返る。

「――なぜ待ってやったか、分かるか？　おめェがそうなるのを待ってたんだ、俺はよ」

ジーサードが言いたい事は――

完全にではないが、分かる。

俺のこの、煮えたぎるような感覚は……何らかのヒステリアモード。

俺は、なっている。

これは恐らくヒステリアモードの派生系の１つだろう。ベルセにも似ているが、もっと強い、遥かに強いものを感じる

「来いよキンジ」

ばっ、とコートを翻し

もうかなめを見すらせず、ジーサードは海の方へ歩き出す

「いいのかジーサード、こうなるともう、俺は優しくないぞ」

アリアの手前、詳細は説明できないが

――今の俺は、通常のヒステリアモードより、その１・７倍の能力を誇るベルセより、明らかに強力な状態にある。しかも、敵は男だ。

「キンジ……」

かなめを抱いたまま俺を見上げるアリアは――

この新たな──危険な俺に、驚いたような目をしてる

ああ、分かる。

今の俺は、そこで一部始終を見ていた兄さんや　死んだ父さんがキレた時と同じような、底知れない殺気を放っているんだろう

「あ、あたしも──」

と、戦闘に参じするような声を出したアリアを、俺は視線だけで制する

「俺がやる　妹の仇だ」

「……っ」

人が変わったような俺の目つきに、アリアは言葉を失う

そして、何か言おうとして──やめてから、

「キンジ」

「……」

無言で背を向ける俺に

「死なないで。お願い」

すがるような声で、弱々しく言ってきた

アリアにしては……女性的なムードで

4弾　Gの血族

ジーサードは、再び海の上へと歩いていく

その足下には……俺も近づいてようやく分かった　何やら透明なガラスのような、橋が渡されている　目の錯覚のような光景だが、橋は質量を持った物質だ　俺もそこを渡れる

少し進むと足下の感覚が変わり、もっと安定した

ほぼ透明な船艇みたいな物の……甲板？　その上に立っている。

「キンジよォ　そいつは、ヒステリア・レガルメンテ――ベルセを何度か経験してからの発展系だぜ」

ジーサードが俺に振り返り、低い声で告げてくる

レガルメンテ……？

「オス１匹と多数のメスで群れを成す猛獣に類似した性質が見られる、「王者のＨＳＳ」
　ＨＳＳを持つ男が、自分の女を多数滅ぼされた時に発現するモノだ」

「――だからやったのか　こんな事を　２度も」

パスカービルの女子だけを狙った、先日のジオ品川での事――そして今日ここでの事

どちらも、俺に関係のある女を次々と傷つけたのは。

それ目当てでやらせてたのか……ジーサードが……

「そうさキンジ……こいつはみんな、おめェのせいだ……ハハハハハー」

戦場と化した陣を手で示して、ジーサードが俺を嘲笑（あざわら）っている

その挑発に乗って、いきなり仕掛けてやろうかとも思ったが……

……それは、しない。

ヒステリアモードの血流が頭脳に巡りきり、

さっきのかなめへの、ジーサードの攻撃……

その意図が、推測できたからだ

ジーサードは隠している……色々な事を

だが、その確認は後にさせてもらう……何にせよ、コイツのやった事は許せないからな

「歴史上、そいつがＨＳＳの中では最強らしいぜ……だが詳細は未解明でよォ……よく分からねえんだ……米軍の計算じゃ、中枢神経系の活動亢進は通常時の——約30倍の1.2倍——つまり、約36倍にしかならねぇんだよなあ」

首をひねり、ジーサードは俺の顔を覗き込んでくる

確かにその話はおかしい……それならヒステリア・ベルセの方が強力だ

——そんな計算を中断させるように、

「おやめ下さい、サード様」

ジーサードの横から、ジジッ――という音に続いて、レインコートのようなものを着た人影が現れた。さっきまで誰もいなかった空間に、忽然と。

そいつだけじゃない。

俺の周囲に、2人、3人と。同様のコートを着た連中が立っている。

囲まれてるぞ、いつの間にか。

周囲に視線を巡らす俺に、ジーサードが吹き出し、

「おいキンジ、光屈折迷彩を見るのは初めてじゃねえだろ。このガリオンだってそうだ」

かつん、と足下の見えない甲板を蹴っている。

「本日は休日に御座りますっ。このような得体の知れない男と戦う事、相成りませぬ」

ジーサードの隣からは、フードのようなものを脱いだ少年だか少女だか分からない美形が、話しかけている。

「……ノ……」

ソイツの頭には、玉藻と同じ――キツネのような尖った耳がある。

そっち系の人種には珍しくないが、ジーサードには玉藻と同種族の仲間がいたのか。

「迷子が好きだなァ、ツクモ。おめえはよ」

ツクモという名前らしいそいつの頭をジーサードが押しのけ、

「――お前らは横須賀に帰れ。21時間待機だ」

などと周囲の連中に指示を出している

この場を取り囲む、そいつらは　異形の集団だな　一言で言って。

顔面にも首にも縫い跡のある、白髪の男

頬に弾痕のある、筋骨隆々とした、身長2mを超す巨人

包帯で顔面を半分ほど巻いてる　巨人の、ひょろ長い体をした男

右と左で瞳の色が違う、銀髪の少女

先日、俺を[illegible]から武偵高までハマーで送った老人　アンガスもいる

——こいつら全員、ジーサードの手下って事か

その1人1人から　ただ者じゃない雰囲気が漂ってくる　ジーサード程じゃないが、かなりの戦闘力がありそうだ　少女と老人以外はな

「なりませぬ、なりませぬっ」

ジーサードを心配しているらしく、ツクモは必死に引き留めようとする

「キンジは俺が試す　それはこないだ決めた事だろ　男らしくねぇぞ、ツクモ」

「九九藻は女にございますっ！」

ふわっ、とマロンブラウンの髪を逆立たせたツクモを振り払い——

さらに「しかし、万が一おケガでもされたら」「こんなヤツ、サードが手を下すまでもありませんぜッ」「あたしにやらせて」などと騒ぎ出した手下たちに……

「――お前ら、俺が負けるとでも思ってんのかァ――」

眼光を鋭くしたジーサードが、鼓膜を劈くような大声で一喝した。

その声に、バッ！

子分共は全員、慌てたようにその場で直立不動の姿勢になった。

さっきまでパニクっていたツクモもキヲツケをしている。

ジーサードの身を案じ、統率も取れてるところを見るに――部下たちは、高い忠誠心を持っているらしいな。

と、俺が引き続き警戒する中――

ジーサードに敬礼した一同は、甲板から離れるように隣側へと渡っていく。

最後まで未練がましく残っていたツクモも、こっちに尻尾を向けて――立ち去った。

もう、ここには俺とジーサードだけだ。

「――シラ書42章19節――主は過去と未来を告げ知らせ、隠されたものの形跡を明るみに出される。――2人とも、後悔のないようにね。あなたたち自身のために」

と言うカナの声がしたので、クレーンの方を見ると――その姿はもう無かった。

言葉の意味はよく分からないが、やはりどちらにも手は貸さないって事らしいな。

――構わないさ。誰も手出しするなよ。コイツは俺が斃す

「来いよキンジ」

ジーサードは俺に背を向け、足下を蹴るようにして何かを操作した。

するとそのそばがマンホールのように開き、内部──海面下に続く梯子が迫り出す。

「入れ、って事か。この乗り物の中に」

　いいぜ。アウェイでブチのめしてやるさ。その方が心理的ダメージも大きいだろう。

幻影のように宙に在る穴から、ヤツに続いて内部に入ると──すぐ、揺れたぞ。動いた。

ヒステリアモードの知覚が、状況を把握しにかかる。

加速度の方向は前後左右どれでもない。下？

入口の穴は閉じたところだし、窓が無いから視覚的には分からないが──下降している。無音ってワケじゃないが、とても静かに。

「これは──水中機だったのか」

それも垂直離着陸機。火力発電所やLNGタンカー付近に着水していたという事は──何らかの燃料を盗み取っていたのだろう。

LEDで照らされた機内の廊下は、長い。大きな乗り物だ。さああぁ──という、水面下にあった機体から水が落ちる音から判断して、全長は20m、全幅は50m以

機影は──全翼機、だな。

巨大なブーメランのような形状をした、主翼のみで飛行する機体だ。

ナチス・ドイツのホルテンHo229を大型化したような──いや、違う。アメリカの

B－2爆撃機　ステルス機の代名詞といわれる、あれと瓜二つだ

俺が持参していたある銃弾をベレッタにコンバットロードしつつ、

「米軍のオモチャか、この乗り物も」

と、探りを入れると、

「次世代ステルス機の試作機さ　暗号名は　ガリオン　——低探知性じゃ世界一だろうよ　つっても製造コストのせいで量産はできねぇらしいぜ　ああ、安心しろ　操縦士も、誰も、邪魔者は乗っちゃいねぇよ　事前に決めた航路を飛ばす、自動操縦だ」

まるで友達に話すように、ノーサードは平然と返してくる

ガリオン

その名は　初耳じゃないな　ジオ晶山で、コイノの部下の老人が言っていた

「——こんなに静かなVTOLがあったとはな」

「おめェは見た事のあるモノに何度も驚くんだな　磁気推進機構と同じ、自動揚力粒子の併用揚力だぜ　これはよォ」

磁気推進機構

かなめが使っていた、空飛ぶ刃物——あれと同じ、先端科学の力で浮かんでいるのか

しかも、光屈折迷彩　目に見えない光学ステルス性を備えてる　レーダーに映らない事は言わずもがなだろう。まさに先端科学兵装の象徴だな　この航空機は

その時、

「ちょっと重量オーバーだな」

なぜか俺に聞こえよがしにそう言ったジーサードが、機内ドアの一つを蹴り開けた。

「重量オーバーだ」

「なぜ二度言うんだ」

「うるせえ」

と、ヤツが入っていった室内には――

ビニールでパックされたドル紙幣の束が、乱雑に積み上げられている。

おらよっ、などと言って床のハッチを開けたジーサードは、まるで爆撃するように金をハラハラと落とし始めた。俺もハッチから下を見ると、すでに30m程浮かび上がっているカリオンを心配そうに見上げたジーサードの子分たちへ、札束が降り注いでる。

さらに金塊と書かれた箱を投下したジーサードは、それが頭にぶつかって転ぶツクモに一笑いしてから、

「よし、これで軽くなったぜ」

などとまた聞こえよがしに言う。

そして、コイツにしては珍しく俺から目を逸らしつつ――廊下へと戻っていった。

ヤツと共に入った、本来ならクラスター爆弾やB61小型核爆弾、統合直接攻撃弾などを搭載するのであろう広い格納庫には

「絵……？」

写実的な宗教画、[illegible]や印象派やキュビスムの油彩画、前衛的な現代美術絵画といった、様々な様式の絵が飾られている。ピエロやアイドルみたいに派手な衣服も散在してるし、大きな彫刻、それと巨大なスピーカーもあちこちにあるな

まるで美術館のような——いや、それとオーディオルームを組み合わせたような空間だ

「何だここは。武器じゃなくてガラクタを抱いてるのか」

「見る目がねぇなキンジ。こいつはパブロ・ピカソだぜ」

などと版画の1枚を親指で示しつつ、ジーサードが……何だ……？

ヤツから伝わってくる、元々強かった殺気——

それがここへ来て、一層強まった気がする

「——ヒステリアモード……か？」

つい口をついて聞いてしまった俺に、ジーサードはニヤリと笑う

「それがお前の呼び方らしいな、HSSの」

否定しない。

それは、かなめの本名——ジーフォースとの名の繋がりで、何となく予想された事だが

やはりコイツもヒステリアモードを持っていて、なったのか。今の一瞬で。

「いや、だが——ここは無人だぞ？」

俺が目で女の姿を探したのに気づいたのか、

「違うぜキンジ。過去いろいろあって、女はどうもダメでな」

ジーサードは後ろ頭を掻きつつ、俺と被る事を言う。

「じゃあ、どうやった」

「脳はブラックボックス——とはよく言ったモンだよなァ、キンジ」

刻一刻とヒステリアモードの雰囲気を強めつつ、ジーサードが笑う。

「ＨＳＳのトリガーはβエンドルフィン。そいつを分泌させる方法は、１つじゃねえってことだ」

ドンッ、という腹に響く振動が格納庫内に吹き荒れ

大音量で、音楽が流れ始めた。電子音とボーカル——これは近ごろ手当たり次第に世界の音楽を聴いてるレキも聴いてた、イビザ・トランスだ。

一気にクラブみたいなムードになった、この空間で。

「俺はな、キンジ。美——芸術に触れた時、βエンドルフィンが働くのさ。物でも音でも、飽きが来るまでトリガーに出来るって事だ」

と言う——ジーサードの話を、俺は一笑に付すことができずにいる。

あまり興味の無かった記事だが、昔ネットで読んだ事がある

男女がクラブや美術館、映画館に一緒に行きたがるのは　音楽や芸術が脳を恍惚状態、つまり性的興奮に似た変性意識状態にさせるからだよ

ヤツはそれを意図的に使って、ヒステリアモードを発現させられるのか

つまり、言わば　絵画嗜好、彫刻嗜好の一種だ

ヒステリアモードに限って言えば、身につけた者勝ちの便利な性対象倒錯だぞ、それはブラドやカナより、自由度が高い

ジーサードは　心地よさそうに言い紺を剥いて、小さなケースを出した

「普段はここを　歩きするだけでもいいんだがな。お前にはもう一丁使わせてもらうぜ

そのケースから１cm四方ぐらいの赤い紙キレを取り出し、口の内側に張り付けている

「——何を入れた」

「先端科学が産んだ、脳内神経伝達物質ル進剤のカクテルさ　成分を聞いたら、触るのも怖くなるぜ　ロスアラモスじゃ命に関わるってんで投薬中止になったシロモノだ

ヤツから伝わってくる——殺気が　更にもう一段、高まったぞ

ブラド、金一兄さん、シャーロック——今まで戦ったヒステリアモード使いの誰よりも、手強そうだ　魔獣と同じ部屋にいるような感覚がある

だが、俺のヒステリアモードも今までとは違う。

この新しいレガルメンテ・二十名のHSS　とやらで、やってやるさ

「そろそろいいだろう　上がってこい、兄弟」

と、ジーサードは格納庫の奥にある螺旋階段を上がっていく

天井には小さな扉が開いており、階段はそこへ続いている

機外　機体の、上へ

翼の上で戦うつもりらしいジーサードに続き、ハッチから機外に出ると

もう日は沈んでおり、雲の合間で月が白く光っていた　天候は・・雲が散在している

ガリオンの機影は、今の俺の目にはぼんやりと見える

音から類推した通り、B　2爆撃機とソックリだ

だが、素材は全く違う　その表面全体が超高性能なディスプレーのように、眼下の景色、

その夜景を映し出す夜間迷彩を行っている

光屈折迷彩は・・透明になるというより、色や柄を精密に変える物だったのか

まるで空飛ぶカメレオンといった風情のガリオンは　機首の上がり方、翼の傾きの

様子を見るに　緩やかに旋回しながら、雲を飛び越すように上昇を続けているようだ。

現在の高度は、4000m程

そこを極めて低速で、ゆったりと飛行している　時速は100km前後だろう

こんな低速で飛べる大型航空機が開発されてたとはな。さすがアメリカだぜ。

しかも、極めて低音だ。旧来の航空力学とは異なる揚力を併用するこの機体は、推進に使うジェットエンジンの使用を抑える事ができるのだろう。飛行機雲も見えない。航跡雲抑制剤を排気に混入する機能があるみたいだな。そこはB―2と同じなのか。

俺から20m程離れた、機首側に立っていたジーサードは、

「ここなら広いだろ」

空全体を示すように、両腕を広げつつ振り返ってきた。

俺は気流に注意を払いながら、僅かに傾いた翼の上で背を伸ばす。翼が生み出す風の渦に飲まれると、気に流されて転落してしまいかねないからな。

「いいや、空でさえ狭い。俺と、お前がいるにはな。ご退場願おう、ジーサード」

これは……ヒステリアモード的な言い回しだな。我ながら。

もう、血流は体内の中心に充分巡ったってことか。

だが、戦う前に確認したい事がある。そっちを先にさせてもらおう。

「ところで。お前は優しいんだな。意外と」

俺のセリフに、ジーサードは「何だとォ？」と思いっきり眉を寄せた。

「逃がしたんだろ、かなめを。お前は殺してない」

と、こっちが核心を突くと――

ジーサードは黙ってこっちを睨んでくるだけだ　否定してこない

やっぱり、読み通りだったみたいだな

「ヒステリアモードになってから思い出して、記憶の中で理解したよ　あれは再起不能の一歩手前の傷だった　しかも　あの場にはワトソン、それと医師免許を持ったカナもいた

かなめは九分九厘、助かる」

「——」

「お前は、かなめの話や様子から　女の、弱くなるヒステリアモードの正体を理解した

それでもう自分たちの活動にはついてこれないと判断し、仲間から外すことにしたんだ

かなめに[illegible]やショックを与えて、お前への忠誠心をブッ壊してやりながらな」

ヒステリアモード、その下位版の類か

さっきジーサードの手に掛けられたかなめと、東京駅で自決しようとしたレキの姿を、

オーバーラップする映像のように想起している

「主のためなら命も惜しくない」。私の忠誠心は、その命の遣り取りレベルのショックでも与えない限り失われない。レキも自殺未遂以降は『風の命令』とかいう妄想を失ったようだが、かなめの心も　自分を殺しかけたジーサードからは、離れる事だろう

「かなめの忠誠心の事だけじゃなく、どこかに監視の目か何かもあったんじゃないか？

まるで結果を見せつけるようだったしな　だが・・総じて上手かったぜ、お前の芝居は・

完全に殺意の籠もった、瞳に見えたよ」

「――そう思いたきゃ勝手に思え」

俺の話を中断させるように言ったジーサード、そのHMDの下の顔が、――赤い。

やはり、図星だったんだな。バレたんで、恥じてやがる。ガラにもない。

「もう1つ思ってる事があるが、言ってもいいか？　ジーサード」

「……何だ」

「お前は俺に絶対勝てるとは思ってない」

「バカ言え」

「だから、仲間を危険に晒さないように蹴り出した。自分というリーダーを失っても当面生きていけるように、金も渡してな」

さっき、ジーサードが部下に金をバラ撒いていたのは――そういう事だったんだろう。

これらは全てヒステリアモードのお陰で分かった事だが。

それ以上に、コイツの事はなぜかよく分かる。かなめに対してそうだったように。

「誤解も甚だしいぜキンジ、俺はな――」

少し慌てた感じで否定しようとしてきたジーサードに、

「安心しろ、お前の真意には誰も気づいてないさ。俺以外はな」

さっき俺がやられたように、話を中断するタイミングで言ってやった。

隠していた本心をズバズバ言い当てられたジーサードは——

しばらく何か反論しようと考えていたらしいが、できなかったらしい。ただ赤くなって、口を開け閉めしただけだ。

なんというか。

コイツに人がついてくる理由が、少しだけ分かってきたな。

実は、ツンデレなんだ。コイツは。理子語で言うところの。

表面は威圧的だが、その実、人に甘いところがある。お人好しといえるレベルで。

苦笑いをこぼした俺に、ジーサードが腕組みをする。

「いいセン行ってるぜ、お前の話はよォ。だがな。一つ大間違いがある。俺がアイツらを蹴り出したのは——お前に殺られる可能性があるからじゃねえ。その可能性はゼロだ」

「じゃあ何でだ」

「体がな。まァ、そんなに保たねえのさ。フォースも同じさ」

「——何？」

「お前と遊んでる途中で、勝手に死ぬかもしれねェって事だ。『活命制限』——俺たちのDNAにロスアラモスが仕込んだ、反逆防止システムがあってなァ。ヤツらしか知らない何らかの化合物を定期的に摂取しないと、長期には生命維持が出来ねえ仕組みになってんだよ。俺たち人工天才は」

ジャサードはそんな話を、まるで他人事のように言う

「フォースの場合は、フラン・ボノマ──キャラメルなんかに含まれてる重合化合物で一定程度代用できる事が判明したんだがな　俺の化合物は、まだ未解明でよ」

そう、だったのか。

だからかなめはいつも欠かさず、キャラメルなんかを食べてたのか

なんて非道い話だ。虫酸が走るぜ　ロスアラモスのやり方には

「──さて、と　今なら雲の上だぜ　炸裂弾だろうが焼夷弾だろうが、閃光弾でも下から見えねェ　好きなだけ使えよ　それと……」

積雲を緩慢に飛び越えていくガリオンの上で──ジャサードは濃紺色の夜空を見上げ、さっきの話をはぐらかすように不敵な笑みを浮かべた

「やったなキンジ　これでお前も有名人だ」

「有名人？」

「この戦いは監視されてる　米軍の偵察衛星でな」

「……マジかよ」

「先端科学兵装は先端科学兵装を探る　ヤツら、人間兵器のデータを取ろうとしてるのさ　俺と対峙する、お前の事も含めてな　おっと　今さらそのマヌケ面を隠してもムダだぜ　最新の画像処理技術は、1cm四方に書かれた文字だって解析できるからよ」

　アメリカさんよ　あんたらも狂ってるな

「フン」

俺は罵声に向けて、ヤツら流に　中指を立てて見せてやる。

それを見たジーサードは、プーッ、と吹き出した

「クハハッ　なるほど、そういう事か…」

「そういう事ッ」

「いや　イ・ウーでシャーロックが、お前と戦いながら『笑った』って話に聞いててよォ

意味不明だったんだが、分かったぜ　お前、バカなんだな　面白えよ。確かに」

イ・ウーでの俺とシャーロックの戦いを　知ってやがるのか　そこまで詳しく

「大した情報力だな　お前、俺のファンだろ」

「ゾッとしねえ事を言うんじゃねえよ　ていうか遠山キンジ武偵、本当にいいんだな？」

「何がだ」

「俺と戦う事が、だ　お前はEランク、俺はRランク　結果は見えてるだろうが」

「『R』は『E』より随分後ろにあるぜ　アルファベット順ではな

と言いつつ、俺はD　Eを抜くことで返答に代えた

ジーサードは俺のセリフにまた笑ってから──

ジャキンッ、と大腿部プロテクターに格納されていた拳銃を抜いた

「ヘッケラー&コッホ、USPマッチモデルか……」

あまり戦りたくない銃の1つだな。

威力は口径によるが、精度が高いんだ。あれは。アンダーレールに基本的デザインの銃口制退器をマウントしてるしな。複列弾倉で装弾数も多い。

だが……

「レーザーガンでも出すのかと思ったが、拳銃は既製品だな」

「これは俺の主武器じゃねェからな。お前をあやす、オモチャさ」

ジーサードは背部プロテクターから、重そうな大型ナイフも取り出す。

しかしそれも、かなめが使っていたような先端科学兵装ではなさそうだ。俺が両手指に嵌めている『オロチ』と似た超硬合金製の、ただのファイティング・ナイフに見える。

結果、俺とジーサード。2人の構えは、奇しくも同じ――剣・銃になった。

この空間と相手を見て、同じ判断をしたって事だ。言い合わせたワケでもないのに。

「気が合うじゃねえか、キンジ」

「不本意ながらそうみたいだな」

「じゃあ、まずは見せてくれよ。『銃弾撃ち』ってヤツをよォ」

「本当に……よく知ってるな、俺の事を。シャーロックの事といい」

「宣戦会議の少し前に、イ・ウー主戦派残党から話を買ったのさ。恨みがあったんでなァ、

お前には」

「怨み……？」

「シャーロック討伐、イ・ウー殲滅は――元々は俺の仕事だったんだぜ？　それを横取りしやがってよ？　知ってるかキンジ。アメリカじゃ人の仕事を取るヤツは盗人なんだ」

「逆恨みって言うんだぞ、そういうのは、日本では。だが、まあ、成り行きだったとはいえ、人の獲物を取ってたなら遺憾だよ」

俺は溜息をつき、チャキッ――と、ＤＥの撃鉄を起こす。

デザート・イーグルは、ダブルアクション・シングルアクション併用銃。

大[illegible]きなのは引き金を引くだけで弾が出るダブルアクションだが、こうやって撃鉄を起こしてからトリガープルで発砲するシングルアクションも可能だ。

そして、引き代が短く軽いこのシングルアクションの方が、初弾の精密射撃には向く。

精密射撃。

つまり、獲物を横取りした詫びとして、やってやろうって意味だ。

飛来する弾を弾で撃って逸らす技――銃弾撃ち、をな。

それを理解したらしいジーサードは、ニヤリ――と笑う。

「いいぜキンジ。男はそうこなくっちゃな。だが、どうする？　俺のＬＳＰは装弾数13発。お前のＤＥは8発だ。銃弾撃ちじゃ捌ききれねえよなァ？」

「――なんとかするさ」

俺たちはそう言い合い――

高度600m近くまで上昇した翼の上で、視線を交錯させた

「じゃ、始めるか　お互い――戦う事ぐらいしか、能がねえんだからよ！！」

フルオート化したらしいUSPが、マズルフラッシュを連ね――

13発の45ACP弾が一斉に飛びかかってくる。

――いいぜ

リクエスト通り、見せてやろうじゃねえか　銃弾撃ち――　とばかりに、俺はD・Eでそれを迎え撃つ。

「――連鎖撃ち――ッ！」

バチバチバチバチバチバチバチッ！

弾丸同士が衝突する火花が、俺とジーサードの中間で連なった

全ての弾が四方八方に飛び散り、2人の銃口から出た煙が機体後方へ流れていき――

「！」

半分は驚きつつも、ジーサードが嬉しそうな貌をした

「……」

無言で立つ俺は　無傷だ

13発を8発で防ぐ方法。

そんなのは簡単だ

実際のビリヤードでいう、『キャノン・ショット』と同じで——俺の弾1発が、続けて敵の弾2発以上に当たるような射角で撃てばいい

もちろん敵の1弾目に当たれば俺の弾の軌道も変わるから、それも計算した上でな

つまり、銃弾撃ちの2連鎖

それを8発中5発織り交ぜたから、8+5で、13発防弾できたってワケだ

普段じゃ難しいだろうが、今のヒステリアモード——レガルメンテの俺なら、1射撃で1、5連鎖までいけるだろう　その確信がある

30発でも50発でも撃ってこい　ジーサード　弾代を損するだけだぜ　お前はよ

そして——

俺の頭の中には今、もっと重要な別の数式が閃いていた

——分かったぞ、このヒステリアモード・レガルメンテの強さの理由が

連鎖撃ちの際に自己分析できたが、今、俺の脳内を駆けめぐる神経伝達物質の量は——普段の75倍ぐらいだろう　これは通常のヒステリアモードの2・5倍に相当する強度だ

俺はその体感を元に仮説を立てて、逆算してみた

そして、分かったのだ

ジーサードは、レガルメンテとは『通常のヒステリアモードを更に1・2倍強める物』たと語っていた。

それは、おそらく正しい。

だが、続きがあるのだ。

──レガルメンテは、累乗する──」

白雪、ジャンヌ、理子、アリア、かなめが相次いで倒されたのを目の当たりにしてどうやら5人を『自分の群れの個体』と認識していたらしい俺は、レガルメンテを5重に発現させたのだ

つまり、1・2倍の5乗──約2・5倍

それを通常のヒステリアモードの効果──30倍に掛ければ、75倍

今の俺の体感とピッタリ合う数字になる

ジーサードは、この構造を知らない。

女を複数傷つけられれば発現する、という所までは分かっていたようだが──ヤツは、レガルメンテを正しくは知らないのだ

そして人間は、正しく知らない事には、正しく対処できない

「もう終わりか？　ジーサード」

俺の心は──落ち着いている。レガルメンテはベルセと違う、静かな怒りのヒステリア

モードだ　これなら、いけるぞ　勝てる。

俺に浚まれたシーサ　ドは、くるっ、と大型ナイフを手ルで　回転させた

―そっちで遊びたいのか　いいぜ。

D　Eをホルスターに収めつつ、俺はバタフライナイフを構え――

――黒と金のコートを翻して駆けてきたシーサードと、激突した

ギンッ！と刃がクロスして火花を散らし、俺は腕に伝わってくる違和感を確かめる

その一瞬の隙に、シーサードが鈍器代わりにした拳銃の握把が右肩にヒットしてきた。

ゴキンッ、という異音が俺の体内から上がる

右肩を　脱臼させられたな　これは。

ナイフごと強烈に押されるようにして後退した俺の体は――

翼が作り出す気流にヘタな飲まれ方をしてしまい、後方へと滑っていった。

（ッ！）

踏みとどまろうとした瞬間、俺は――光屈折迷彩で見えにくかった翼の縁を踏み外し、

虚空にいた　ヤツが俺を押した狙いはこれだったのか

ここは雲の上空　高度は800mほどだろう

ヒルダと戦ったスカイツリーより高い、そこから――転落、する？

そんなワケないだろう　俺よ。

パスッ！

回避する道を考えるのとほぼ同時に、俺はベレッタを発砲していた

右手は人差し指一本でトリガーガードを保持し、残りの指で青い発光体を掴んでいる

これは先日、平賀さんから試供品としてもらった「繊維弾」

銃口から着弾点までに極細アラミド・リキッドのワイヤーを張る、仕掛け銃弾だ

これが航空機だと分かった時点で装填しておいて、正解だったな

夜空に光学偽装したガリオンに、下から――ワイヤーの先端となる前進弾子が着弾し、固定される

俺が掴む白い発光体――ワイヤーの後端となる滞空弾子にも、その感触が伝わってくる

今、ガリオンと俺の手の間に、極細の化繊ワイヤーが張られたのだ

空中ブランコのようにガリオンの前方へ振り子運動した、レガルメンテの俺には……頭の周囲に渦を巻く、気流の形が分かる　集中さえすれば

俺が気流に乗って機首側上空に吹き上げられると、振り返るブーサードと目が合い――

ついでだッ――！

ガスッ

気流に揉まれながら、俺は右肘からガリオンの右翼に着地した。

ゴクンッ、という音が体の中で聞こえる。

「――クハハハッ！　痛えんだよな、ソイツぁ！」

俺が今やった事を理解したジーサードが、左翼側で楽しそうに牙を剥いた

今のは、戦闘中の脱臼の自己修復

遠山家にはわざと落馬して治す方法が代々伝わっていて、兄さんには　車に飛び込めって教わったけどな　ステルス爆撃機でやったのは前代未聞だろうよ

（痛えな……やっぱり）

俺は僅かに眉を寄せた

肘が、ではない　この程度の痛みなら、強襲科時代に慣れっこだ

頭が痛むのだ　その痛みは今や背骨にも広がっている

これはおそらく、レガルメンテ特有の弊害

通常の75倍もの能力を発揮する事に、脳、そして全身の神経が耐えられないのだ

これ以上ヒステリアモードが進まれば、どこかがプツンと切れてしまうだろう

「いいワイヤーアンカーを持ってるみたいだな　キンジ」

「――武偵高にもいるんでな　和製　先端科学兵装ちゃんか

流れ雲に到達しつつある翼では――あちこちから黒い煙が発生し、後方へ流れていた

さっきの撃ち合いの流れ弾で損傷したのか　なんて脆い飛行機だ

絶対に探知されない自信があるから、無装甲なんだな

「続きといくか」

雲に入り始めたガリオンの上で、俺はジーサードに向き直り、

狙いをヤツの右腕以外に絞っての、短期決戦向けの攻撃順序を考える

――その視線に気づいたのだろうか

ジーサードは右手で俺を制止するような仕草をし、

「その前に、キンジ　お前、銃弾撃ちから余計な気を遣ってやがるんじゃねえのか？」

鋭い洞察力で、そんな事を言ってきた

「…義手なんだろ」

初めから少し違和感を感じてたんだが……

さっき握把で殴られた時、感覚で確認できた。

ジーサードは、右腕の肩から先が無い

代わりに、極めて高性能の筋電義肢を付けているのだ　神経の微弱な電気信号を受けて、

自由自在に動く義手を　見た目には全く分からないがな

「――遠慮は要らねェよ　俺はそれにムカついて、お前の右肩を抜いてやったんだぜッ

人のメッセージには気づけ、この鈍感野郎！」

なんだかアリアにもよく言われるな、そういう事は

お前らノンデレって人種に言いたいんだが、俺にメッセージがあるなら、ちゃんと口で

「ってくれよ。俺はカンも悪いし、小什先祝みたいな超能力者でもないんだから」

「もう——やめておかないか」

ムダと思いつつも、俺は一応そう訊いてみる。

「このレガルメンテは——今までのヒステリアモードを遥かに凌駕している。今のお前は大きく見えるぜ。お前にも俺が大きく見えただろう。一流の武偵なら、敵と己の戦力差は直感で分かるハズだ」

「……」

「俺は、日本の武偵だ。殺さないように戦るつもりだが——お前が余計な動きをすれば、える可能性もある。短い期限付きの命なんだろ。ここでムダに散らす事は無いぞ」

「ハッ、散らせるものなら、散らしてみやがれ」

と言うジーサードの息が——雪山にいるように、白い。俺の吐く息も。

現在の高度は１０００ｍに到達したあたりだろう。

どこまで昇るつもりだ。

地上が８℃だとしたら、ここは１・５℃になる。酸素濃度も２％減る。レガルメンテで壊れつつある神経の事もだが、今までの上昇ペースから考えて——

早めに勝負を付けないと、危険な事になってくるな。瞬々

「——どうする？　このまま宇宙まで行くか？　兄弟」

防寒性もありそうなコートを風に翻すジーサードが、制服姿の俺をあざ笑う。

「そうなる前に着水させるさ、力尽くでな。それに、俺とお前は兄弟じゃない。かなめと同じような事を言うな」

濃霧のようになってきた雲の水蒸気の中、そう返した俺に――

「まだ知らなかったのか。調査力が足りねえなァ、キンジ」

ジーサードは呆れたように言って、ごし、ごし……と、顔面を手で拭う

……フェイスペインティングを落としているようだ

ぽんっ――と、ガリオンが雲を上空へと突き抜け、月光に照らされた雲の上で――

「……ッ！？」

HMDを、取り外したジーサードの顔が、明瞭に見えてくる

今までHMDやペインティングで隠されていて、素顔を見た事は無かったか……

その顔は……似てる……

似てるぞ……！

――俺に……

双子って程じゃないが、よく似た兄弟程度には似てる

変装ではない。ヒステリア・レガルメンテの視覚で分かる。あれはヤツの素顔だ

「――俺はお前だよ、キンジ」

長めの頭髪を気流に縺れさせながら、ジーサードが笑う。

「どういう、事だッ」

「遠山金叉。日本人。元・公務員特命の武装検事。心・技・体の全てに優れ、ＨＳＳと呼ばれる特異体質を有す。趣味は将棋だったか？」

なぜだ。ジーサードが、俺の——

「1989年、S・D・Aランクでは総合8位をマーク。当時はアメリカ国防総省からも要敵対回避人物としてリストアップされた

俺の——父さんのプロフィールを語っている。公式、非公式を含めて。

「そのリストに、を付けた当時のロスアラモスは、遠山金叉——略称Ｇという暗号名を金叉に付け、極秘裏に作戦を展開し、その体組織の入手に成功した」

「……ッ……！」

「顔色が変わったぜ、キンジよ。分かってきたか？　そうさ。お前のオヤジの遺伝子から必要な染色体を選択し、他で取得された優秀な遺伝子と組み合わせ、作り出されたのが、俺とフォースって事だ。こんぐらい、そっちで調べるべきだったんじゃねえのか？」

先日、美術室でワトソンが——

人工天才は、アメリカの研究機関が人工的・科学的に作り出したと言っていた。

それは育成のみならず、誕生にまで科学の手を加える行為だったのか。

いや、それ自体は今日日、世界的には珍しい事ではない　だが、それにしても――

　　漫画的すぎる　軍事目的で、超人を誕生させようだなんて

それも、俺の父さんのDNAを勝手に使って

「俺は遠山金叉の構造遺伝子を50%――色濃く受け継いだ、『Gシリーズ』の3番目さ。といっても、ジニオン・シリーズでは最大割合の遺伝子を持つ父または母に子がいた場合、それが胎児であっても存在した人数分だけ番号を飛ばす　遠山金叉には既に長男がいて、次男――お前が産まれる予定があったからな、俺がサードとされたってワケだ　実際の所、俺とお前はほぼ同時に産まれたらしいぜ」

「それは、じゃあ、　お前は、俺の――どっちが兄だったんだ、産まれたのは」

「どっちでもいいじゃねぇか、そんな事は　血族である事には違いねぇんだからよ」

　　血族

Gの血族

さっきジーサードが言っていた、その言葉は・

G、すなわち父さんの遺伝子を持つカナ、俺、ジーサード、かなめ

あの場に揃った4人が、遺伝学的には兄弟姉妹だという意味だったのか

だから、かなめが俺を『お兄ちゃん』と呼んでいたのは――間違いではなかったのだ

愕然とする俺を見ながら。

「さて、兄弟。様子見はこのぐらいにしとくぜ。だいたいお前の倍率は分かったからなァ——まぁ、75倍ってとこか？　大したモンだが、１・０・０倍まで舐めりゃ軽く捻り潰せる。60倍以上は試した事がねぇが——イケるさ」

ＨＭＤを掛け直したジーサードが、目に赤く小さな紙キレを入れた——２枚、３枚と。

あれは、脳内神経伝達物質亢進剤——

ヒステリアモードを強化する目的でヤツが使う、薬物だ。

「１００倍……か……」

通常の１００倍まで、ヒステリアモードによる効果を高めるってのか——その薬で。

よせ、そんな事——ヒステリアモードは大脳新皮質、それ以外にも全身の神経系に負担を掛けるんだ——75倍で戦ってる俺でも、ギリギリ持ちこたえてるってのに。

「１００倍だなんて、命に関わるぞッ……！」

ジーサードはそれこそ乱用薬物をキメたように目を閉じ、ごき、と首を捻って。

「世界は——」

むしろ落ち着いた——それこそ超人を思わせる澄んだ声で、語りかけてくる。

「一定して宇宙の潮流の中にある——その流れの中では、如何なる超兵器を開発しようと、いずれは廃絶させられる——では、絶対廃絶させられないものは何か？」

ヤツからの殺気が……増す——増すぞ……！

まるで、風力を強めていく台風のように……留（とど）まる所を知らず

「答えは、人体だ。アメリカは核廃絶後の世界を見据え、それに匹敵する戦闘力を有する超兵器を造ろうとしている。それが人間兵器――俺は、そのプロトタイプ――！」

俺の足が――一歩、後ずさった。全くの無意識のうちに。

圧倒されてるってのか。この、レガルメンテの俺が。

紛争抑止力となる人間兵器は、完璧でなければならない。いかなる敵にも、敗れない。最高のコンディションにあるHSSの敵でも斃せる事を、今から実証してやる。あの人の想いを、実現するためにもな――！」

分かる。分かってしまう。

ヤツは今、俺より強い。

こっちを見る、その瞳孔に光る目が、人間のものには、見えない。もう

――あれは……超人――！

急げ。ヤツはまだ昇る。

これ以上ヒステリアモードを強化する前に、仕留めないと――！

再び耳を掠（かす）めるガリオンの上、流れる霧（きり）のような水蒸気の中――――

俺はD・E（デザートイーグル）の弾倉（マガジン）を放り、空弾倉のエジェクションとほぼ同時に空中でリロードする。

そして、バスッッッン！　不可視の銃弾で、ヤツの頭部を掠めようと発砲した。

レキの見様見真似（みようみまね）だが、プロテクターの無い頭部――脳にダメージを与え、一撃で決着をつけるつもりで

「フハハハハハ！」

大声で笑うジーサードの周囲で――バシュッ！――

という風を切る音と共に、白の水蒸気が爆発するように吹き飛んだ

「――！」

見えた　今、ヤツが――交叉（こうさ）させた両腕を瞬時に開きながら、俺の撃った弾（たま）を右手の指で挟んで減速させ、左手の指で逸らす光景が

（あの技は――）

（[illegible]駅でコイツ・狙姫に狙撃された時に編み出した、俺の『銃弾逸らし』と

そっくりだ）

「ビビるなよ　お前もできるんだろォ　『銃弾払い』ぐらいはよォ」

それが　ジーサード流の『銃弾逸らし』の名称か

さっきレキの狙撃から身を守った技も、これだったのだろう

だが……こんな技は実戦、それも死線をくぐり抜ける際にしか身につかない

コイツも俺のように、強敵・難敵と戦い続ける過酷な日々を生きてきたんだな

（だが……

俺はD・Eに改造で付けたセレクターを、3点バーストに切り替える

「——連射には耐えられねえんだよ、銃弾逸らしは！」

同じ技、その欠点をも知る俺が3連射を放つと

ジーサードは「ホッ」と口を丸めてふざけるように声を出し、殺到する3つの弾のうち2つを結ぶ直線上に、左手のファイティング・ナイフを奔せた

——ギギンッ——！

その刃から、金属音と火花が2つ上がる。

2つの弾が切断されて、それぞれY字を描いて散らされたのだ

あれは、俺がAN‐600便で理子の弾から身を護った、『銃弾斬り』

それを2弾、いっぺんにやりやがった

さらにジーサードは残りの1弾を、右手で——バンッ——！

——ト・螺旋・ッ——

ワトソン戦で俺が編み出した、片手で弾丸を逸らす技も、使った事もなげに

それも、俺のより高度なレベル。ほとんど体を揺らさず、腕だけでやりやがったぞ

力なく虚空に消えていく50AE弾を見送った俺に——

「『弾丸断ち』、『螺旋』——何なら『銃弾撃ち』と同じ『銃弾弾き』も見てくか？」

ヘラヘラと笑いながら、ジーサードが声をかけてくる

〔シーサードには、銃が、効かない——〕

これは——効くな。精神的に

今まで俺が倒してきた敵も、この絶望感を味わったのか

因果応報ってやつだな。〕

「だからさっき言ったろう？　こんな物はオモチャだ、ってよ。俺たちゃ——」

拳銃とナイフを背後の空へ捨てたシーサードが、翼を蹴り——

「……このぐらいじゃねぇと、遊べねぇよなァ！」

——ジャコンッ

その足下から迫り出した、ランチャーの中には

〔近距離空対空ミサイル！〕

　バシュッ——！

激しい光と煙を放って、それが有無を言わさずガーオン後方へと発射された

そして煙の尾を引きながら、空を回り込むようにUターンし……

ぐんぐん加速しつつ、こっちへ——

は——速い！——！

〔ダメだ、もう躱せない！〕

あれはFIM-92C。最高速度はマッハ2を超える

人間が躱せる代物じゃない　たとえ、レガルメンテの俺でも

しかも既に、Ｄ　Ｄで迎撃しても――飛散する破片で致命傷を喰らう距離・速度だ

「何してやがんだ！　このガリオンも無事じゃ済まねえぞ！？」

「知るかよッ！　ほらほらどうするキンジ！　ハハハハーッ！」

笑いながら叫ぶジーサードが――誘導者だ　破壊光波誘導システムじゃない　何かの光を使って逸らす事もできないぞ。

近接信管？　衝撃信管？　時限信管！？　ダメだ、考えてる暇は無い。

ミサイルはもう、翼を追うように迫り来ている

「――クソッ！」

いま閃いたこの方法じゃ　ガリオンは確実には救えない　五分五分だ

だが、もう他に打つ手がない。イチかバチか、やるしかない！

――今この瞬間、死なないためにッ！

「う、おおおおおォォオッ――！」

銃を放り上げつつ、俺はミサイル目がけて駆け足下を蹴って、翼と平行に飛ぶように跳んだ

そして振り上げた両拳で、飛来するミサイルに――！

――ガスッ！

両手を組んでの打ち下ろしを、全身全霊で見舞う

進路を斜め下方に変えられたミサイルは、俺の腹の真下を擦れ違うように飛ぶ

——だが、これだけじゃダメだ　誘導弾は銃弾とは違う

信管の種類にもよるが、通常なら目標に接近した今この瞬間、爆発するものなのだ

そうなれば俺は、ミサイル本体の破片を浴びて即死する

だから——もう一発ッ！

「ッ」

俺は滞空したまま、ミサイルにノールック・キックを叩き込んだ

ミサイルは無装甲の翼に易々と穴を開け、機内に突っ込んでいく

「これでどうだ……ッ！」

　うなれば、全身での銃弾逸らし　『誘導弾逸らし』

ガリオンは紙のように脆い航空機　翼全体の厚みも1m弱

誘導弾逸らしでミサイルを逸らしつつ加速させ、この翼を貫通させてしまえば

——ドンッ……！

「……！」

くぐもった音と振動が、翼への着弾と同時に伝わってきた

ま　間に合わなかった　コンマゼロゼロ数秒。五分五分の賭けに、負けた

主翼に滑り込んだFIM92Cは、翼の内部で爆発したのだ

ホウッ——と、右翼後方から炎が上がり——

黒煙が、流血のように尾を引く。

さっき投げ上げた拳銃をキャッチした俺は——隙もない

「ハーッハッハッハ！　おもしれえ！　キンジ！　やっぱり、お前は天才だぜ！——」

翼か燃料タンクでなかった事は不幸中の幸いだが、

もうダメだ、墜落するぞ　この機体は——！

「剣は銃より強し　拳は剣より強し——」

ジーサードは銃もナイフも持たずに、左翼から中央へと歩いてくる

それに目を合わせた俺に——

「これで分かったろキンジ　俺たちの武器は、これよォ」

ジーサードは拳を握り、見せつけてきた。

そういえばコイツは——ロスアラモスから脱走した時、武装軍人を素手で全滅させたと

ワトソンから聞いたな。

まあ、やれるだろうよ。元が天才で、意図的にヒステリアモードになれて、さらに

俺と同じような技を一通り持ってるんなら

「……」

自分が人間離れしてきた事を認めるようで、考えたくなかったが。

今のジーサードのセリフは、ある意味正しいのだろう

俺に刃物は効かない

俺はジャンヌの剣を指真剣白羽取りで止め、シャーロックの突きさえ躱した

俺に拳銃は効かない

俺は弾丸を斬り、止め、逸らし、或いは跳ね返しさえして、何度も防いできた

そして、いま俺自身が証明してしまった事だが

ヒステリアモードを持つ者は、ミサイルからでさえ身を守れる

そんなヒステリアモード同士が戦えば——

——こうなる、って事か

俺はＤ・Ｅを収め、素手になる。ナイフも無しだ。時間のムダだからな

火炎は右翼の内側を焼き、翼端側は翼の１まで延焼している

全焼は時間の問題。あと５分ってところか

５分以内にヤツを倒し、高度１０００ｍから生還する道を探し出さねばならない

だから、時間のムダは一切無しだ

徒手でやるぞ。とことんまで

ヒステリアモードの性能だけで行っても、ジーサードは１００倍、俺は７５倍。人凡の

能力値だって段違いだろう。圧倒的に不利だ。難しいぞ。勝つのは

――だが、生還の道はヤノを踏み越えた向こうにしかない

何事も、難しいからって足踏みしてたら……1秒ごとに1歩ずつ、破滅に近づいていくだけだ。それなら、特攻精神で挑んだ方がまだマシだろう

やりたかないが、まだマシなんだ。足踏みしてるより、難しい事に立ち向かう方が

それと、これはアリアの受け売りだが……

――『難しい』ってのは、『不可能』って意味じゃない

『不可能』じゃない。つまり、『可能』って事でもあるんだ

屁理屈みたいな話だけどな。まあ、事実だと思うぜ。思わなきゃやってられんしな

「だから、挑ませてもらうぜ。この難敵にもな……！」

俺は火炎を背に――機体中央側、ジーサードの方へと歩いていく

ジーサードも、俺の方へと歩いてくる

2人の足下では、故障し始めた光屈折迷彩が雲を斑に映したり明滅したりしている

その下を流れるのは、ちぎれ雲の薄い霧。

周囲で天高くまで続いている雲の中には、微かな黄金色の輝きが見える

さっきまでの積雲とは違う。より上空に来た事で現れた積乱雲だ。輝いているのは、黄

火炎でバランスが崩れたガリオンの上昇ペースは、むしろ上がっているようだ。高度は

1500mを超えただろう　気温は氷点下　俺たちの頭髪は、霧の中の微細な氷の結晶が張り付いて灰色になっている。気圧、酸素濃度、共に2割は低下した

雷雲の谷、炎に氷に、低酸素・低気圧――

こんな地獄みたいな場所で、殴り合いの兄弟喧嘩か

全く　どうなってんだよ、俺の人生は　カンベンしてくれ

「一度だけ生き延びるチャンスをやるぜ、キンジ　そこに跪いて、俺の下につくと言え　こっちには女もいるから、全部くれてやるさ　人外とガキとだが、見た目は悪くねえぞ　HSS持ちにゃあ好条件だろ」

「ふざけろ　女なんか俺には悪条件だ　そのくらい、そっちで調べるべきだったぞ」

さっきのノーサードのセリフを返してやるよ――

事情があって、お前は必要な人材なんでな。殺さないように戦るつもりだが、ミスる可能性もある　安い命とはいえムダに散らす事はないぜ、キンジ」

ヤツも、セリフを返してくる

「散らせるものなら、散らしてみやがれ」

まるで自分自身と喋っているように、セリフのリピートをしながら――

――近づいていく

俺は、ヤツに。ヤツは、俺に。

「まあ、跪（ひざまず）くさ。血を吐き、泣きながらな。そうして、『緋弾（ひだん）のアリア』を連れてくる」

「『緋弾のアリア』……？」

また聞かされたその言葉に、俺（おれ）は足を止めた

「何だそのツラ　アイツの真ッ隣にいるお前が知らねえワケねェだろ　イロカネ界隈（かいわい）じゃ有名だぞ　古い連中なんかは、女神（かみ）様が降臨するとかいって騒ぎやがってるしよォ」

「女神？　あの大メシ食らいのチビか、なんで神様なんだ」

「……本気で知らねえのか？　……ああ、なるほどな　お前には隠す必要があるって事か　部分的には」

何やら1人で納得し出したジーサードが、その場で足を止めた

「まァ、少しは教えてやろう　緋弾のアリアってのは、シャーロックの緋色の研究で予言されていた『超々能力者』　いま世界にいる人造人みてえな超能力者とはもとは別次元の、神がかった力を司る超人さ

語るジーサードの目つきが

それこそ何かの神を信じる、宗教の狂信者のようなものになっていく

「その力の片鱗、現代の超能力学を超えた力の発現も確認されてる　お前も見たんだろ？『緋人・緋陽門』時空を操る技をよォ」

時空を操る技　確かに、見た。

それを今年イ・ウーで使って、アリアは3年前、シャーロックに撃たれたのだ

だが——

「残念だったな、ジーサード　あれはアリアとシャーロックが2人がかりでやった技だ

俺を人質にでもしてアリアに無理強いするつもりかもしれんが、再現はできないぞ」

「アリア1人でもできてるんだぜ、既によォ　実例がある——数年前、どっからともなく

日本にピラミッド形の投棄物が漂着したろォ」

そう言われた俺は、レガルメンテの頭で記憶をまさぐる

そういえば……確かに、そんな話はあったな

昔、ピラミディオン台場——カジノ警備の仕事をアリア達とやった時、資料で読んだ

その漂着物を見てデザインされたのか、あのピラミッド型のカジノだったとか

「ああ　だが、その古い漂着物が何だったって言うんだ」

「それはパトラのピラミッドだ　アリアが1人で先端を吹っ飛ばし、過去に送ったのさ」

「何ッ……!?」

「信じられねェなら漂着物の破片をどっかから手に入れて、放射年代測定でもしてみろ

俺は、もうやったぜ」

この突拍子のない話には——目を丸くせざるを得ない

あの時はただピラミッドの上辺が「消滅」したように見えたが

そんな事か、起きてたのか……ッ

時空を超える力……俺は、それに用があってよォ。そのために、お前にも一役買わせるってことだ……服従させた上でな」

「なぜ……そこに俺が必要なんだ」

「あー……そいつは言えねえなァ」

顎を指で掻いて片眉を上げたジーサードは、答えない。

「じゃあ質問を変えてやる。お前はその力を使って、何をするつもりだ。安物のSF小説みたいに、歴史でも変えるつもりなのか？」

俺に問われたジーサードは――ギロッ、と目つきをシリアスなものに変えて、

「――それに答えて、俺に何か得があるのかァ？」

それまでの粗野さ、饒舌さを、急に失った。

しばらく黙って回答を促しても、何も言わない。

「……」

その目に何か……深い物が、よぎっている。

それは、哀しみのような……誰かを、偲ぶような――

答えを推理しようと試みて、ジーサードの過去に思いを巡らせた時……

レガルメンテの頭で……分かった。

分かって、しまった

シーサードは、過去に干渉しようとしている。

その企みは、かなめが体育祭の日に体育倉庫で語っていた話に繋がっているのだ

ノーサードには――愛する人がいた

地獄のようなロスアラモスで、たった１人、自分に優しく接してくれた美しい女性

そして　その人は、ノーサードの訓練中の事故で亡くなった

その死を自分のせいと断じ、苦悩したシーサードは――

「――生き返らせようとしてるんだな　サラ博士を」

俺のその言葉に　ノーサードは、

「よく調べてあるじゃねえか　そういう事だけはよぉ」

触れてはならない所に触れられたような、低い声で　そう答えた

やはり、人間を――自分の愛した人を、生き返らせようとしているのだ　コイツは

アリアの力を使い、過去に干渉する事で

「よせ　そんな事は　気持ちは分からなくもないが、自然に逆らう事だぞ」

「知るかよ　俺は神にだって逆らう覚悟だ」

という、シーサードの悲痛な目から――

彼が、サラ博士を深く、深く　真摯に、愛していた事が伝わってくる。

アイツは一歩も退かないだろう。たとえ、死んでも

――愛のため、神に逆らう……そのために、別の神を濫用するってワケか

同情しないわけじゃないが、お前の企み……ここで、止めに入らせてもらうぜ

「女神のドレイこと、この俺がな」

俺が決意を新たに、ジーサードの方へ歩き始めた時――

ずんっ……と、ガリオンの右翼側が折れ、揚力の偏った機体が右へ傾き始めた

ジーサードは一歩も動かず――目を閉じ、祈るように天を見上げている

そうか。

コイツが、空を決戦の場所に選んだのは――

「サラ……見ててくれ……あんたが夢見た通り、人工天才は完全な存在なんだ……」

――愛する女のいる、天国に近づくため――

「俺は手に入れる、『緋弾のアリア』……アイツを使って、時を巻き戻す……アイツになら、出来るんだ……あんたは、よみがえるッ……――」

もう何もかもを吹っ切ったように、ジーサードは――

坂の上のようになった左翼側から、右拳を握りしめて駆け下りてくる……俺の、方へ！

――バチイイイイッ！

俺とジーサードが激突し、文字通り火花が上がった

同時に突き出された右拳同士が激突し、俺のオロチとヤツの手甲が火花を上げたのだ

威力はシーサードの方が上。弾かれた俺は後方に回転受け身を取り、

「――ッ！」

瞬間移動するような瞬発力で追撃してきた、シーサードの蹴りを躱した

空振った蹴り足から、ドンッ！　というゲームみたいな炸裂音が上がる

なんて蹴りだ。今のは足の周辺の空気が歪んだ音だ。非常識だぞ

！？

違うッ、今のはフェイント――！

――シーサードは反対の膝を蹴り上げ、俺の――防御のために突き出した右腕を弾く

それだけで全身を回転させられた俺は、その勢いを利用して斜め軌道の突き返し蹴りを放つ。

だが――ヤツの顎を狙った俺の蹴り足、その右膝に追撃の左肘が飛び込んでくる

速い、なんて反応速度だ。まるで原チャリでF1カーと競争させられてるみたいだぞ

加えてシーサードのローキックが、ヒンッッッ！　俺の左足で稲妻のような音を上げた

「……重いッ……！」

インパクトの瞬間、ダメージを打ち消すように手足を引いてはいるのだが――ダメだ

一発一発が、ケタ外れに重い。響く。なんて速力、なんて威力だ

これが、１００倍ヒステリアモードか！

転がるようにしてさらに後退するが　右翼側は火の海　後ろは無いぞ

炎は、翼の内部にも充満しているらしい。

流れる気流は氷点下なのに、足下は熱したフライパンのようだ

「ッ——」

ボウンッ——と、火災は機首側にも飛び火している

火炎はガリオンを下からも焼き崩し始めたらしく——後部ハッチが壊れ、シーサードが蒐集した絵画が燃えながら火の海に飛び散っていくのが見えた

——機体が空中分解するぞ　もう、時間がない！

両手足に重く残る痛みを堪え、炎を背に立ち上がった俺を、シーサードが笑っている

「１発喰らってやったか　誇っていいぜ、キンジ　俺は敵に２発以上の打撃を喰らわせた事がねェ、全員、１発で斃してきたからよォ」

「むず痒い程度だ、こんなのは。次は俺が叩き込んでやる」

ブラフでそう言いながら、俺は両足を踏む力のバランスを均等にし　見えない誰かを前へ押しのけるような手つきで構えた　そして自らの重心を、肉体の完全な中央に据える

——この構えは遠山家の、『絶牢』

合気術の応用で、全身を回転扉のように使い、敵による打撃の威力を利用して反撃する

ための構えだ。

どんな敵でも今の俺を殴ったが最後、回転軸を殴るのと同じ事で――自分の攻撃と同じ重さの攻撃が自分に返る。

要は相手の打撃が強ければ強いほど跳ね返す力も大きくなる、カウンター技だ。

そもそもヒステリアモードでなければ出来ない大技で――人に見せるな、見せたら殺せ――と伝わっている秘中の秘技でもあるんだが、事ここに至っては仕方ない。

――恨むなよ、ご先祖様――

面見不殺――この技は、俺の代で終わる。

だが、ジーサードは

この明らかに防御的な構えから、技の内容をおおよそ見抜いたらしい。

「俺も、あまり長くは闘りたくねえからな。流星でとっか丁切るぜ」

そう言って右肘をこっちへ向け――

体を横向きにして、腰と頭を落とし、右足を後ろに引き、右拳を大きく振りかぶった。

古代オリンピックの短距離走、そのスターティング・フォームにも似た――超加速狙いの構えから、今度は俺が、ヤツが出そうとしている技をおおよそ見抜いてしまう。

あれは――

「お、桜花――！」

間違いない

俺の桜花と構えは全く違うが、あれは――

全身の筋肉・骨格を全く同時に連動させて、超音速打撃を放つ技の構えだ。間違いなく。

そ、想定外だぜ。こいつは

対応できないぞ。きっと。絶対じゃ

今ヤツが言った通り、体がぶっちぎられる　腕かどこか

ヤツは絶対――回転扉を、丸々ブッ壊すつもりなんだ

「……ッ……！」

どうする、俺よ――

ここでも思いついちまったが、やれるか、いや、やれた所で

――ダメだぞ　そう易々と勝てはしないだろう

ヤツは１００倍ヒステリアモード、俺は７５倍ヒステリアモードなんだ

だが、これしかない……ッ……！

「――サラ、見ててくれ。俺は強い　完璧な兵器なんだ」

シャリッ――と、足下を踏みならしたジーサードのヒールが……

「……血……？」

血が見える。

ヤツは、喀血しているのだ。さしたるダメージも無いハズなのに。

それは多分、活命制限――さっき言っていた仕掛けが体を蝕んでいるせいなのだろう。

更に、100倍ヒステリアモードで急激に負担をかけたせいもあるのかもしれない。

それに俺が気づくと、ジーサードは口から細かい血を散らして咳き込みつつ――

右手の人差し指を、左右に振って見せた。

「最近じゃ、よくある事さ。心配すんな。この1撃分は――もつからよォッ！」

そう言った次の瞬間、カッと目を見開いたジーサードが――

――ドンッ！

ミサイルより勢いよく、低い姿勢で俺めがけて突っ込んでくる。

超音速に乗ったその右拳、プロテクターから――

流れ星を引くような、円錐水蒸気が放たれるのが見えて――！

その拳が俺の右足に触れた、刹那の瞬間。

「橘花――絶牢――桜花ッ！」

俺は肉体の重心を中心に前方宙返りを切りながら――空中で、全身の筋肉を連動させた。

――そして、返すッ！

ヤツの『流星』の勢いを、足による『桜花』に乗せて――！

ハスンッッッッッッッッッッ！

ジーザードの肘に、宙返りした俺の胴回し回転蹴りが叩き込まれ

「――うがァァァァァァアアッ!!」

黒と金の肘部プロテクターが、破片になって飛び散った

――ヤツは自分の"流星"を、自分の肘に喰らったのだ

その衝撃は更にジーザードの両腕にも伝わり、脚部プロテクターをも破壊していく

「……！」

や、やったぞ……

足は、立ってる。よろけてはしまうが、完全には壊れていない

75倍ヒステリアモードだと、こんなことまで出来るのか

今、俺は

まず、ヤツの打撃エネルギーを受け取った

体を破壊されないギリギリの衝撃になるよう、桜花を通常とは逆ベクトルに放ちながら

名付けて、『橘花』――減速防御に用いる、第二の桜花

桜の次に咲く橘になぞらえた、全く新しい技だ

そして『絶牢』で、攻防が入れ替わり――

胴回し回転蹴りを叩き込む瞬間、俺は『桜花』で再加速をかけた

スカイツリーでワトソンと戦った時に偶然編み出した、自損しない、亜音速の桜花を

「さすがはレガルメンテ……だな」

あの一瞬で、こんなにも複雑な、しかも起死回生の返し技を叩き込めるとはな

だが……何もかも上手くいったワケじゃない

無茶やったせいもあり、足へのダメージはかなりある――損の桜花、ってとこだな

「グゥ……！」

方、さすがの人ー大才も一撃では倒れなかった

うつむいて右肩を押さえつつ、足下を蹴って大きく後退している

そしてノーサードは右膝側で膝をつき、ゲホゲホと血の咳をした

ヤツも……限界なんだ。もう

「もうやめろ、ノーサード！」

火は既に、右腕の全体に回っている

右腕はもう火蝶を撒き散らしながら、溶けるように崩壊している最中だ

火の粉の中、俺も片足を引きずりながら――

ヤツを追うように、胴体の火を鎮まるを待たない

「お前は戦える状態には見えない　俺も足が利かない　勝負は引き分けだ！」

「ほざけ……ゴホッ！　うっ――」

シーサードの、吐血声が……増えている

手で隠すようにしているが、ハルはもう血まみれだぞ

やっぱり無茶だったんだ？　１００倍のヒステリーモード、なんて

「意地張ってる場合じゃねえだろ！　このガリオンだって、もう……！」

俺が手で翼を示した時、炎上していた機体前方が

タンクローリーが爆発するように、一気に燃え上がった

燃料タンクがそこにあって、引火したのだ　！

「うおッ……！」

爆炎に巻かれつつ、俺は熱風に追われるようにして右舷側に走る

そこではジーサードが

膝を震わせながら、立ち上がっていた

なんていう根性だ。アイツは桜花の直撃を受けたのに

十数秒、片膝をついただけで　再び立ち上がるなんて！

「―サラ、見てるよな　どうだい、俺は完璧だろう　何ともねえさ、これぐらい」

違う　根性じゃない。

コイツは――戦う事しか知らないんだ。

戦う事でしか、自分を表現できないんだ。

そして、表現しようとしている　愛する人に……

もう、この世にはいない人に……！

「ジーサード、お前はちっとも完璧じゃない！　お前自身、それが分かってるんだろ！」

「違うッ、俺は完璧な──ゴホッ！　人間兵器ッ！　それが、それがサラの願いでッ──兵器は、俺は完璧であるべきなんだッ」

「俺に蹴られて血ィ吐いて、挙げ句に女の名前覚えてるヤツの、どこが完璧なんだッ　完全に不完全だろうがッ！　もう目をさませ！　人間ってのは不完全なんだよ！」

人間……だとッ？　俺はそんなものに堕ちちゃいねェ

「堕ちてたさ、最初っからッ　お前は　自分が人間だと思いたかったんだッ　だから、会おうとして　会いに来たんだろッ？　俺と、カナに──！」

「……！」

自分でも無意識だったのか、ジーサードは俺にそう言われて、驚いたような顔をした

俺の背後、胴体側に火炎が広がっている

もうガリオンは火の中だ

自慢の光屈折迷彩もすっかり解けて、左翼側は白いツルツルした翼を丸見せにしている。

「──どうしてだろうなァ、キンジ」

「何がだ」

「どうしてお前がそこにいて、俺がここにいるんだろうなァ」

ガリオンの最期まで時間が無い事を悟ったジーサードは、自嘲気味に笑って……

「俺は、お前になりたかったよ　生まれた時に俺が選べなかった運命　そのクソみてえな、平凡な人生を　生きたかったぜ」

握手を求めるように、右腕を差し出してきた

「来いよキンジ、まだ持ってるんだろ　俺と同じ――切り札をよォ」

コインが何をしようとしているのか、分かってしまった俺は――

「それは後悔するぞ　俺は兄さん以外に負けた事がないんだ　それでは」

俺は誰にも――フォースにも、これじゃ負けた事がねえぜ

全員同じなのかよ　切り札　うちの一家は。

「……」

「……」

俺はジーサードと、お互いが傷つけ合った右腕を組む。

奴も、もう体も限界だし……足場のタイムリミットも近いだろう　これが最後だ

しかし、こうやって間近に見ると……本当に、俺に似てるな。

向こうもそう思ってるのか、ちょっと苦笑いしてるぜ

俺は――

――ジーサードと共に、鏡像のように振りかぶった

両手両足がボロボロになるまで戦って……最後に残った、頭を

そう。同じ遺伝子を持つ者同士は、切り札も、同じだったらしいぜ

――ガスッッッッッッッ！！！

俺とジーサードは、お互いの額に渾身の頭突きをブチ込む。闘牛同士のように

「なんで……石頭だ、この野郎……！」

「それは、お前もだろうが……！」

だが……2発目ッ

――ガスッッッッッッッ！！！

明らかに、ジーサードがぐらついてる

ははっ……これに関しては、俺の方が上だったみたいだな

俺がほとんど……本能的に、

――ガスッッッッッッッ！！！

トドメの3発目をブチ込むと――！

「ハハハ……ハハハハハハッ……」

ジーサードは笑いながら、真後ろに傾いていった。俺に、押し倒されるようにして

そして――ずさっ……俺と折り重なりつつ、大の字になって倒れ込んだ

「……笑ってる場合じゃねえだろ……」

と言いつつ起き上がる俺も、もう……笑うしかないな。

火は左翼側まで回ってきた。もう逃げ場ナシだ。

どう見ても操縦不能。不時着水もできないだろう。胴体が燃え尽きつつあるんだからな。

「——そんなに心配そうな顔をすんなよ、キンシ」

そう言ったジーサードは、ばきばき、と、自分の後背部プロテクターを破壊しながら外していく。そして、ガチャッ　俺の横に、置いた。

「小型だが、1人なら降りれるぜ」

その背部プロテクターの内部には——これも先端科学の化繊によると思われる、小さなパラシュートが覗いている。

「……お前はどうするんだ」

「だからそんな顔をすんじゃねえよ。俺は——あの人の所へ、行くだけだ」

火が回ってきた左翼の[illegible]で……ジーサードは、ただ、人の字になって寝ているだけだ。

……死ぬつもりか、1人で

「何言ってんだ[illegible]——」

そう言って、俺がジーサードの[illegible]手を掴んで引き起こそうとした時——見た目以上に、左翼内部が崩壊していたらしく——ジーサードの体の下が、崩れる　落ちる[illegible]！

「ッ！」

俺は崖の縁に腹ばいになって、何とかジーサードの落下を食い止めた。

遥か下を流れる雲に、ガリオンの破片が、小さな水しぶきのような煙を上げて墜落している。この距離感——高度は、およそ2000m。雲の表面までさえも、数百mあるぞ。

左腕を掴まれて、宙づりになったジーサードは——

血まみれの口を歪ませて、苦笑いしていた。

「キンジ。手を離せ」

「上がって来い——」

「いいんだ、もう……兄さん」

「——！」

ジーサードの言葉に——

俺は高所の熱風に巻かれながら、目を丸くする。

コイツは、俺の

俺はなァ……嬉しかったぜ。死ぬ前に、兄さんの姿を見ることができて——

……弟……！

それならなおさらだ。

なおさら、この手は離せない！

「兄貴が……弟を、見捨てるワケ、ねぇだろ……」

俺の言葉に、ジーサードはまた笑いながら――

「弟も、兄貴を見捨てねぇもんさ」

ガシュッ……

という音をたてて、俺が掴んでいた左腕――義手を、体から切り離した。

「――――」

その体はガリオンの瓦礫と共に、小さく、小さくなっていき……空間に……消えていく。

「ジーサード……ジーサード！」

なんでだ。

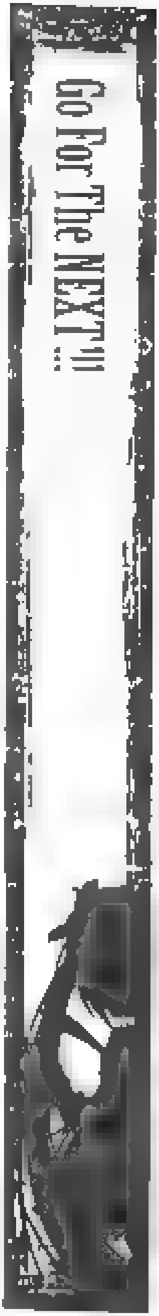
なんで。

もっと話したかったのに。お前も交えて、兄弟みんなで……過ごしたかったのに！

「バカ野郎ォォォォォォ――――ッ！」

炎と氷の渦の中、俺の絶叫は

ただ、響いただけだった。


Go For The NEXT!!!

「ジーサードの野郎」

自宅療養中の俺に届いた、差出人の名に師団の友人アンガスとある国際郵便。

キューバからの封筒に入っていたDVDを再生した俺は、机を蹴り、それが絶叫を放った足だったせいで痛みに悶える。

テレビの中では、楽園みたいな浜辺でスポーツカイトに興じる

「ハハハッ。どうだ兄貴！　上手いもんだろ？」

義手もしっかり付け直した、ジーサードの姿があったのだ。

白い砂浜では、半分の女どもが水着でビーチバレーなんかをやってやがる。

アンガスが撮影してるらしい映像にはジーサードが揚げる人凧が映っていて——それは

ヤツがガリオンで着ていた金縁ロングコートから作ったものだと、一目で分かった。

あの野郎。あんだけ死ぬような顔をしといて——

——墜落してる間に気が変わったらしい。

で、どうやらかなめの磁気推進繊盾と同じ素材で出来てたらしいあのコートを使って、

紙飛行機みたいに着陸してたってワケか。

俺なんかパラシュートで着水した後、24時間も漂流したんだぞ　相模湾を　朝方なんかサメに遭遇して、D・Eで追っ払ったりしてたんだ

しかも漁船に拾われて小坪港にたどり着いてから武偵高に連絡したら「自己責任」とか言われて、JR横須賀線で東京に帰って来させられる始末　もちろん自腹で

しかも翌日から、武偵高では中間学力テストだったんだ　それにもちゃんと出たんだぞ、俺は　もちろんズタズタだったさ　保体なんかエンピツ転がして答え決めてたんだからな

それを、てめえはのうのうと、カリブ海でバカンスかよッ

「クソッ、クソッ」

俺はテーブルの半額弁当が振動で飛び上がるほど、テーブルを叩く

撮影が俺へのビデオレター用だと気づいたらしい、キツネ耳の女……ツクモがアップになって、アカンベー、とベロを出した所で映像は一旦終わる

次のシーンは、絢爛豪華なレストランで

「カナ　ダメ兄貴のキンジをよろしく頼むぜ　俺の手にゃあ負えねえよ」

スーパースターみたいなギラギラのスーツを着たジーサードが、厚み5㎝はあろうかというステーキを赤ワインで頬張ってる

……どうやらこのビデオレター、カナにも送られてるらしいな

『サード様、やはりこれを送るのはカナ様だけにした方が』

「遠山キンジに襲われたら面倒ですよ。おケガも治られてないのですから」

などと心配そうに言う、ドレス姿のツクモたちに、言われたジーサードは――

「うるせェ。こんなモン気合いで治るンだよ！」

……エセ紳士っぷりを発揮してるな、相変わらず。

「おい見てるか兄貴。Eランクのバカのくせに、よくも人工天才を「バカ野郎」呼ばわりしやがったな。あれはサブの研究への恵みだ。死ぬのも忘れるほど、ムカっ腹が立ったぜ。いっとくが俺は負けたとは思ってねェからな。あれは引き分けだ！　また遊びに行くぜ、東京によ」

来んな。

「来んなっつっても行くからな。「緋弾のアリア」を賭けて、改めてもっぺん闘ろうぜ」

……この野郎。カメラ越しとはいえ、人にフォークを向けんじゃねえよ。

とりあえず今回は、これにて一件落着だ。あとは……かなめをよろしく頼むぜ」

と、ジーサードの声を最後に、ビデオレターは終わり――

「……」

今、コイツ

言ったな。ジーサードじゃなく、『かなめ』って。

「全く……」

俺は、暗くなった画面に映る自分の顔が　笑ってる事に気づく　苦笑いだけどな

兄さんといい、かなめといい、ジーサードといい　俺の兄弟姉妹は

どいつもこいつも一筋縄じゃいかない連中だよ　全く

まあ、向こうに言わせりゃ、俺もそうなのかもしれないけどな

武偵高では4時間目までが一般科目、5時間目からが専門科目の授業だ　その合間には教科棟の移動や昼食等のために休憩時間がある。

その休憩時間、ジーサード戦の疲れ、テスト明けの疲れが重なっていた俺は

探偵科棟に行く前に仮眠を取ろうと思って、机に突っ伏していた

うるさく声をかけてくる理子や武藤をスルーして、クラスから人けが無くなった頃……

「キンン」

　がば！

アリアのアニメ声を聞いて、反射的に起きてしまった。

これは俺がアリアに好意を持っているからとかそういう理由ではなく、タヌキ寝入りがバレた際に座ってるイスごと抱え式バックドロップをやられた経験が8回あるからである

なお、内2回は教室の窓から外に落とされた。

「なんだよ。俺は眠いんだ」

既にイスの後ろ側を掴もうとしていたアリアを押しのけつつ

俺は、もう教室に俺とアリアしか残ってない事に気づく

さらに教室のドアが内側から施錠されてるな　アリアがやったのか

「みんながいなくなるのを待ってたのよ　理子とかがいたら、後で面倒だから」

「何がだ」

「褒めてあげようと思ったの　ノーサードとの戦闘のこと　あんた、タフだったわ」

ハスカービルの副リーダーことアリアには、一応——

空で何があったのか、巡了駅のホームから電話で話してはある

ヒステリアモード関連と、イロカネ関連の話は避けたけどな

「ワトソンが言ってたけど、ノーサードはRランク武偵だったそうじゃない」

「病人だったんだ　それが出た時、たまたま決着がついたんだよ」

「それにしてもよ　よく勝てたわね」

「向こうは負けを認めてなかったけどな」

「強襲科で習ったでしょ？　戦闘の勝ち負けは、認知じゃ決まらないわ　戦闘後、状況がどう変化したかで決まるの　あんたはノーサードの撃退——強制排除に成功した　これは明確な勝利だわ」

ちょん、と俺の机に腰掛け、にこっ、と　アリアがネコっぽい目で愛らしく笑うので、

「き、興味ねえよ　勝ち負けなんか　まあ、好きに解釈しろ」

ついドキッとしてしまった俺は、顔を背ける

調子狂うなぁ

アリアがニコニコして俺に話しかけてくるとか、ありえんだろ

「バスカービルは損害軽微——あたしは軽傷　理子は鼻血　白雪・ジャンヌは全治3日

お前らのがタフだろ

特に理子　ジーサードにモロ殴られてなんで鼻血で済んでんだよ

「というわけで、あんたにご褒美をあげるわ　これから1勝するごとに、1段ずつ内容をレベルアップさせてあげる　最初は何がいい？」

わしっ、と頭頂部を鷲掴みにされて、強制的にアリアの方を向かせられたので

俺は正対して向かざるを得ない

こないだ『ジュース作る』とか言い出して素手でリンゴ握り潰してたからな　この女

「じゃああと5分寝させてくれ」

「何がいい？　ほら、もう時間ないんだから　好きなこと頼みなさいよ」

なんだこの、ご褒美の押し売り　しかも俺の心からのリクエストを完全無視しつつの

じゃあ弾代でも貰おうかな

「お小遣いはあげないからね」

はい消えた。

「何もいらねえよ　モノなんかもらっても置き場所ねえし」

「あたしが何かプレゼントの箱でも持ってるように見える？　モノ以外でも、もっと他に何か・その・　あ・る・で・しょ!?」

アノアは　鼻息荒いな

なんかエサを見つけたネコみたいな興奮っぷりだ

何が起きてるんだよ　アリアの中で

でも、でも・定刻迄までよ　場所が場所だし　ほら早く　敵前逃亡は校則違反よ、から、と顔を近づけてきたアノアから

女性フェロモンでも分泌されてるのか、やたら女っぽい雰囲気が

「空——」

クチナシの香りのする唇が、俺の顔に近づきながら静かなアニメ声で告る

レキに観測させてたの　あの子が、炎上した航空機を見つけて　最後、爆発したって聞いた時　それでも、あたし、泣かなかったよ」

アリア——

「キンジは生きて帰ってくるって、信じてたから」

って・

「お、おいっ

何だよお前……なに目ぇ閉じてんだ！？

誰もいない教室で……俺の頭を掴んで

あまつさえなんで、お、俺の目に目を近づけてくるんだよ！？」

なぜか、俺がなぜか、本当になぜか自分も目を閉じかけてしまった——

——次の瞬間、

「はいアウトぉー！」

かたんっ

俺たちの頭上で天井の板が１枚外れ、制服姿のかなめが上から出てきた

がばっ、とアリアの首に上からあぐらをかくようにしたかなめは

天井のフチにかけた手に力を込め、懸垂の要領で、ぐんっ！

自分自身とアリアを、吊り上げる

「くぎゅう」

かなめの太ももと膝で首をロックされ、だらんっ！　と吊り上げられたアリアは

く、首つり状態。

「名付けるなら、『首４の字ネックハンギングツリー』……かな」

なんちゅう技を思いつくんだ、かなめ

お前も新技の発明家だな　俺の妹だけあって

「いやー危ないとこだったね、お兄ちゃん　気をつけなきゃダメだよーっ　アリアって、線超えてからは意外とアニマルになるタイプだと思うから」

「は、はあ？」

アリアの首を股に挟んだままニコニコ語る、かなめは――

――ジーサードに攻撃を受けた後、やはりカナに助けられていた。

その後、ワトソンの看護、白雪の超能力による手厚い治癒も行われて、　今ではご覧の通りピンピンしてる　傷跡さえ跡形もないぐらいだ

今で俺が指摘したジーサードの思惑は、上手くいったと言えるだろう

かなめも思うところがあったのか、ジーサードの話はしなくなったし――

ワトソンが調べた所によると、やはり偵察衛星か何かで監視していたらしいアメリカの資料では『ジーフォースはジ・サードと仲間割れの末、死亡した』となっていたそうだ

それを聞いたワトソンはワシントンのリバティー・メイソン幹部を通じ、再調査を防ぐ私的な隠蔽工作を完遂したらしい

まあ、それが上手くいけば御の字。いずれバレても、　仕方ない　その時はその時だ

守ってやるさ。相手が誰であろうと。半分とはいえ、血を分けた兄妹なワケだからな

「そんじゃね、お兄ちゃん　アリアは迅速かつ合理的に強制排除します」

だらーんと動かなくなったアリアを天井裏に足で押し上げてから、かなめは楽しげに、

ぱちん　ウィンクして天井板を戻した

「かなめ。

そういえばお前は、まだジーフォースだった頃

レキの携帯を通じて初めて俺とテレビ電話で通信した時も、そのウィンクをしてたな

あの時より、ずっといい顔してたぞ　今のは　やってることは大差ないけど」

「それと、アリア

今の強制ご褒美が何だったのか結局分からなかったが、お前、自分で言った決まりには

従えよな。強制排除されたんだから、負けた　今のはお前の

――などという相変わらずロクでもない俺の生活を、一変させる出来事が起きた

探偵科（インケスタ）の授業を終えた俺は、メガネ美人の高天原ゆとり先生に手招きされ

他の生徒が講義室を出るまで、先生と2人で待機させられた

さっきのかなめの事があったので、天井を警戒していると――

「遠山（とおやま）君。重要な連絡がありますので、これから一緒に教務科へ行きましょうね」

高天原先生はそんな事を言いつつ、俺のネクタイを直してくれる

教務科（マスターズ）　呼び出しか？――

イヤだな。東京武偵高・3大危険地域の1つじゃねえか。

しかし、何の用だろう。テストの点が悪すぎたのかな。いや、うちの怠惰な教師どもがもう採点したとは考えにくい。

あっ。分かったぞ。これは1年の時みたいに、ご指名で何かの依頼を貰えるパターンだ。有難いな。指名が入ると単位が割増しになるんでね。

などと脳内でソロバン勘定をしつつ、自身も身だしなみを整えた俺は、高天原先生に連れられ、教務科棟に、入る。

久しぶりだな、教務科。5月にアリアに強要されて潜入して以来だ。

エレベーターで上へ──上がり。

「ん……5階？」

職員室よりも上の階だぞ。行ったこともない所だ。

そう思っている内に、先生と俺は5階のロビーに着く。

そこには、スーツ姿の蘭豹先生と

「──レキ？」

つい、声が出てしまった。

セーラー服のスカーフをきちんと整えた、レキもいたのだ。

「……」

相変わらず無言のレキは、目だけで俺を見てくる。

「……ふ」

高天原ゆとり先生は、2年A組の担任でもある。俺は2年A組。

蘭豹は、2年C組の担任でもある。そしてレキは——2年C組。

どうも、クラス担任が、それぞれのクラスの生徒を連れてきたって事らしいな。

今期はこの2人やな？

「そうねぇ。2人ともいい子だから残念だけど、仕方ないわねぇ」

などと語る先生たちの表情が——時計を見ながら、緊張の面持ちになっている。

——なんだこれ。あんたらのそんな顔、初めて見るぞ。

香港ヤクザの娘こと蘭豹が、緊張とか。冗談だろ？

高天原先生。あんただって、頭部を狙撃されて戦えない体になる前は『血塗れゆとり』と恐れられた傭兵だったってこないだ聞いたぞ。それがどうして緊張なんかするよ？

「あの……これは何ですか？」

今さらながらそう聞いた俺に、高天原先生が振り向く。

「うーんと、ね。これからお二人には、校長先生に面会してもらいます」

——校長？

「緑松武偵校長と、俺たちが……面会？

「行くぞ。時間や。武偵は時間厳守やで」

蘭豹（らんぱお）がレキと俺の背中を小突くようにして、5階の廊下を歩かせ……校長室、という

プレートのついたドアの前に立たせた

ちょっと豪華な木製の……しかし極々、普通のドアだ

この中に校長がいるんだな。

そう思うと俺も緊張してきた

平然としてるのは、ぼけーっと突っ立ってるレキだけだな

蘭豹と高天原（たかまがはら）先生は視線を交わし合い、頷き合っている

「緑松さん、失礼します。高天原です。今期の2名、連れて参りました」

——ドアにかけられた声に、

「はい、はい。どうぞ」

普通の——としか言いようのない男性の声が返ってきた

ガチャ、と、ドアが開き——中にはベタな観葉植物と校長のデスクがあり——

「はい、はい。ようこそ。緑松です」

にっこりと笑う、お兄さんともおじさんともつかない男がデスクについていた

この人が——緑松校長か。

始業式・終業式で毎度おなじみのハズなんだが——

俺は、この人を、覚えていない。

こんな人なんだ、という感想すら抱けない。あまりにも特徴がなさ過ぎて。

それが武偵業界で有名な、緑松の怖さだ。

　通称、"見える透明人間"。

ジーサードのように光学的に消えるのではない。全く別の、心理学的な技術による。人の記憶に残らない能力を持っているのだ。彼は。

見えるのに、見えない。記憶できないのだ。意識できないのだ。見過ごしてしまうのだ。あまりにも、特徴が無くて。

どうやってるのかは分からないが、彼は顔、動作、声から身長体重に至るまで何もかもが日本人の平均を取っているから——この人の事は、何度見ても記憶できないのだという。「どんな人？」と聞かれても、誰もが「えっと、男で……」で終わってしまう。

つまり、この方に狙われたが最後。

どこで会っても、気がつかない。気にならない。気に留まらない。狙われてるから気をつけろ、と言われても、気をつけようがないのだ。

そして。自分が緑松に会った事を知るのは、撃たれた後、という事になる。

なんでそんな危険人物が校長なんかやってんだと思わざるを得ない。いかにも武偵高の校長らしい人物だよ。

「遠山キンジです」

「レキです」

教務科ではどの部屋に入ってもまず名乗る規則があるので、俺とレキが名乗ると・

「はい、はい　それでは重要な連絡になります」

誰の声にも似ている声で淡々と語る、表情があるんだかないんだか分からない緑松は、何でもない事のように、淡々と

——こう、続けた。

「2年A組23番、遠山キンジ君　2年C組35番、レキさん　東京武偵高は今月末を以て、君たち2名を——退学処分とします」

Go For The Next!!!

あとがき

HO-HO-HO!　お待たせしました!　今年もやってきましたよ、赤松サンタ!

この小説11巻・コミック版5巻・緋弾のアリアAA3巻の、一斉発売ですよー!

そして、こちらもお待たせしました。『緋弾のアリアQ&Aコーナー』です!

Q：『ハイマキの名前の由来を教えてください!』

はい、はい、ハイマキね!　レキが飼ってる白いオオカミの名前ですね。

ハイマキとは、作中に出てくる架空の民族・ウルス族の言葉です。ウルス語は日本語・ロシア語・その他アルタイ諸語を元にした混成言語。『ハイマキ』は日本語由来の単語で、『白い』という意味になります。（ハチマキ、あたりが訛ったものと思われます）

つまり日本語にすると「シロ」という、ベタな犬の名前だったのです。

レキは考えがないなぁ、と思ったそこのあなた!　白はウルス族にとってただの色じゃないんですよ。彼女らは源氏の末裔ですが、源氏は白・平家は赤という旗を掲げて戦った源平合戦の記憶から「白」を吉祥の色としているんです。なので、レキはハイマキの毛の色に合わせつつ、ラッキーカラーの『白』を名前として与えたんですねぇ。

Q：『携帯を替えたキンジですが、レオポンのストラップは今でも付けてるんですか？』

　キンジは自らの失言・失態・白雪（しらゆき）や理子（りこ）に必要以上に近づかれた等の理由で、アリアに拳銃（けんじゅう）でよくいじめられてきたのですが……そこは武偵（ぶてい）。もう『撃（う）たれるのは仕方ない』としながらも『撃たれた回数が少ない日』を探し始めました。日々グラフを作って。

　そしてある日、気づいたのです。レオポンのストラップをしてる日は、撃たれた回数が通常より少ない事に！　女子の気持ちがよく分からないせいで、その理由までは分からなかったようですが……今はレオポンを『アリアからの弾（たま）よけのお守り』として常に付けるようにしてるそうです。普通は、敵からの弾よけのお守りをするものなんですけどねぇ。

　Q＆Aコーナーでは、まだまだご質問を受付中です！　後ろのページにあるQRコードからアクセスできるモバイルアンケート、もしくは郵送でお送り下さいね。

　さて、この11巻ではキンジの身に〝退学（クエスチョン）〟という一大事が起きてしまいました！　一体どうなっちゃうの!?　という大きなQへのA（アンサー）は……次巻で書かせていただきましょう。

　――それでは、次は桜花（おうか）と橘花（きっか）の間あたりの、心地よい頃（ころ）に。

2011年12月吉日　赤松中学（あかまつちゅうがく）

■１１巻は水着３連続
という豪華仕様で
お送りします！
口絵も水着なので
水着祭り。

たいへん楽しく
描けましたので
読んでくださってる
皆様も楽しんで
いただけてたら
嬉しいです！

■１２巻も引き続き
よろしくお願い
いたします！！

緋弾のアリアXI
コラテラル・ブロス
Gの血族

発行　2011年12月31日 初版第一刷発行

著者　赤松中学
発行人　三坂泰二
発行所　株式会社 メディアファクトリー
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5
印刷・製本　株式会社廣済堂

©2011 Chugaku Akamatsu
Printed in Japan　ISBN 978-4-8401-4331-8 C0193

※本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、固くお断りいたします。
※定価はカバーに表示してあります。
※乱丁本・落丁本はお取替えいたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。
※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。
メディアファクトリー　カスタマーサポートセンター
電話:0570-002-001
受付時間:10:00～18:00(土日、祝日除く)

※この小説はフィクションであり、実在の人物・団体・地名等とは一切関係ありません

【 ファンレター、作品のご感想をお待ちしています 】
あて先:〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト　株式会社メディアファクトリー
MF文庫J編集部気付　「赤松中学先生」係　「こぶいち先生」係

左記より本書に関するアンケートにご協力ください。

★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料待ち受けプレゼント!　★サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。　★中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。